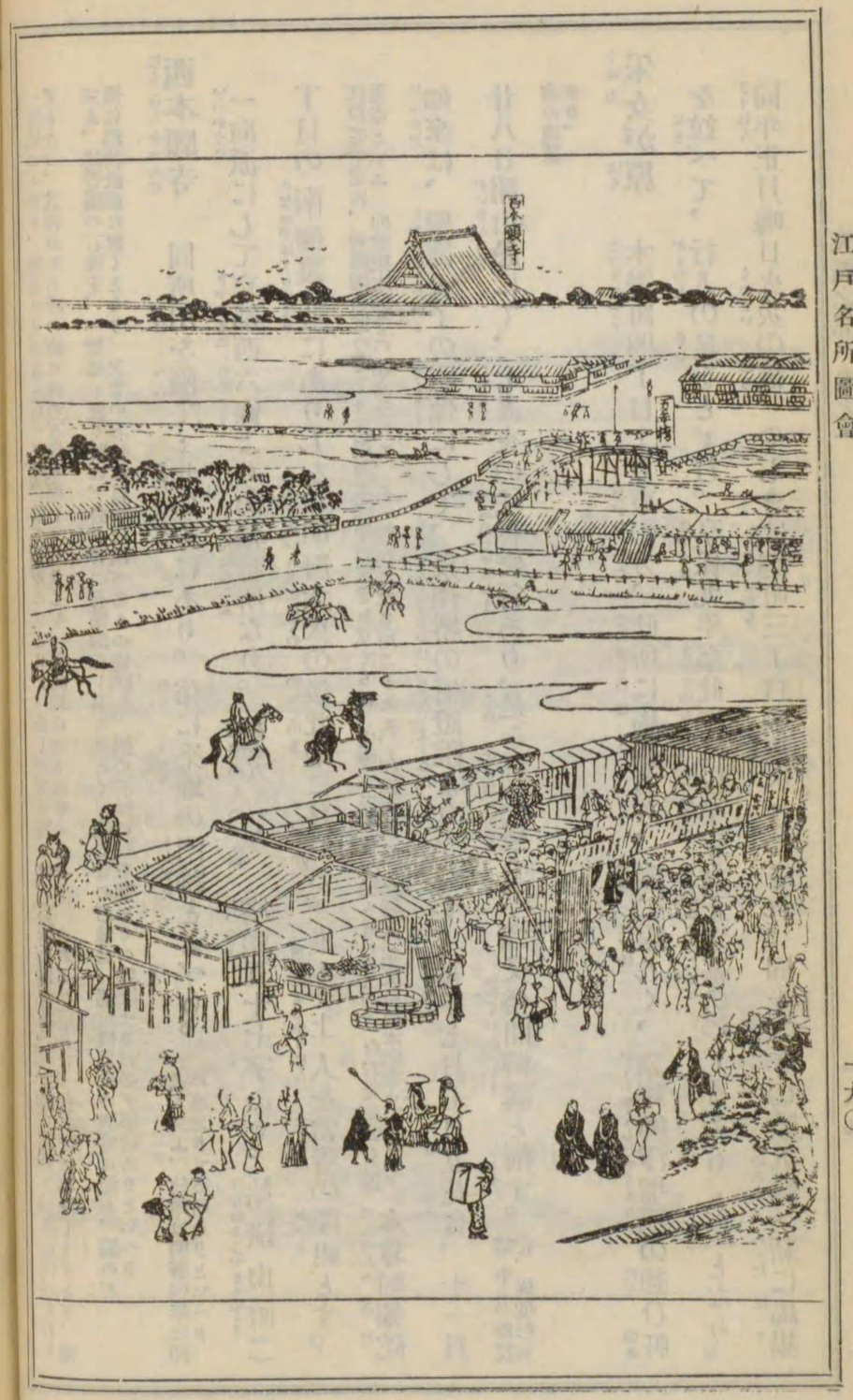
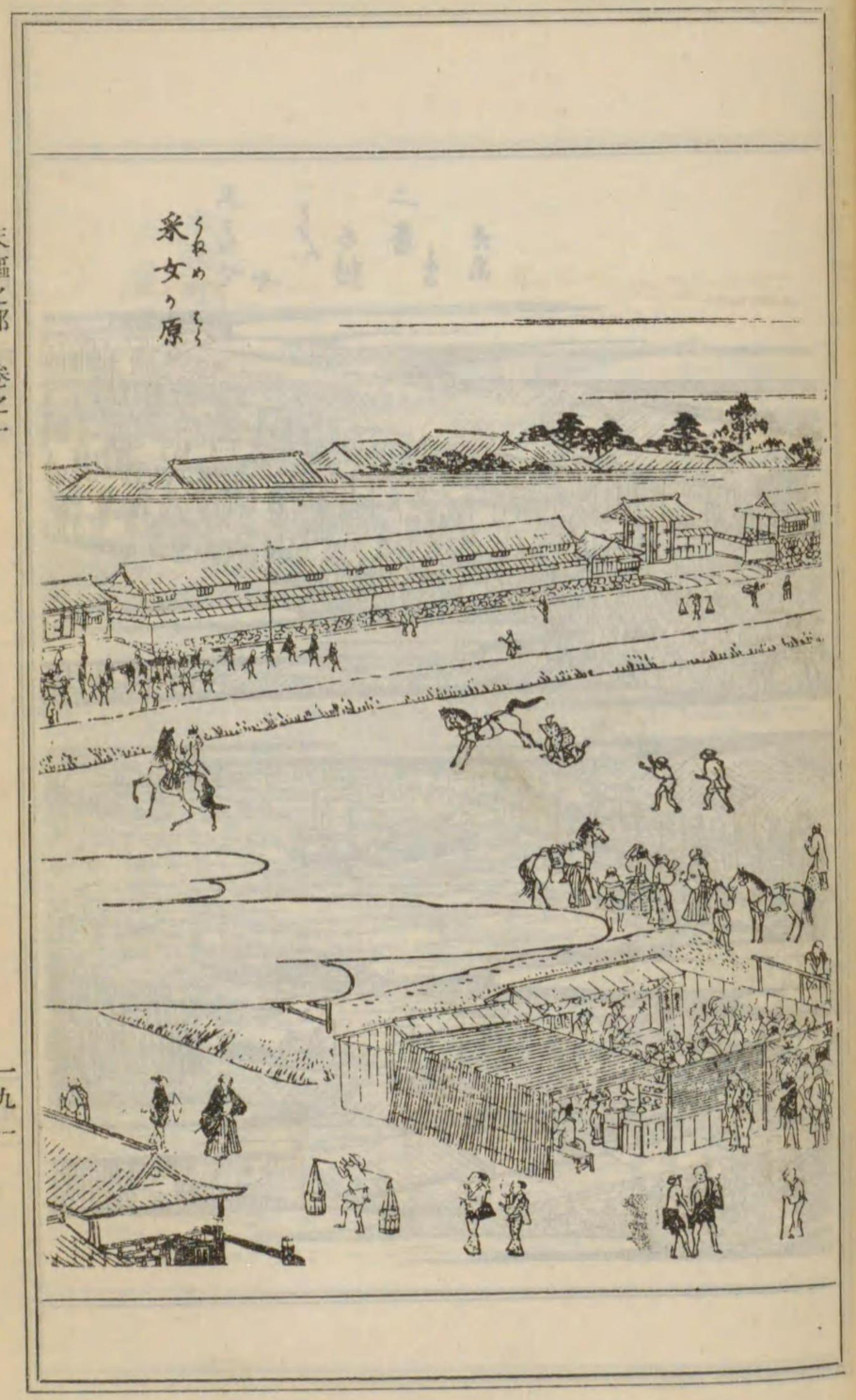
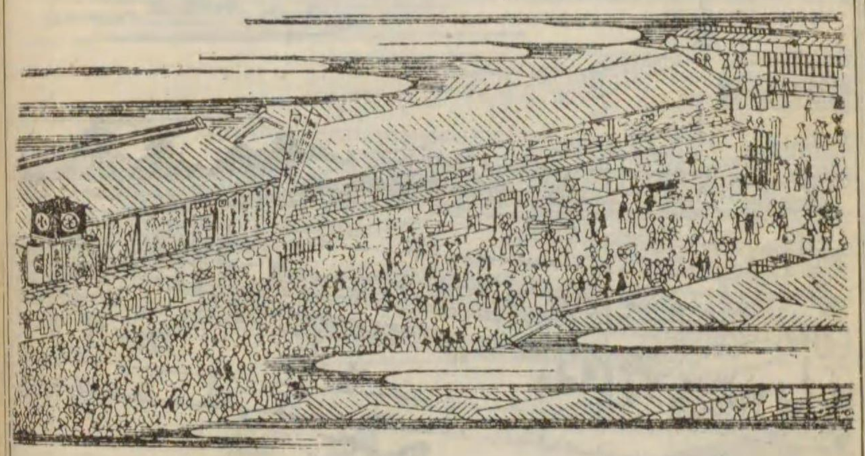
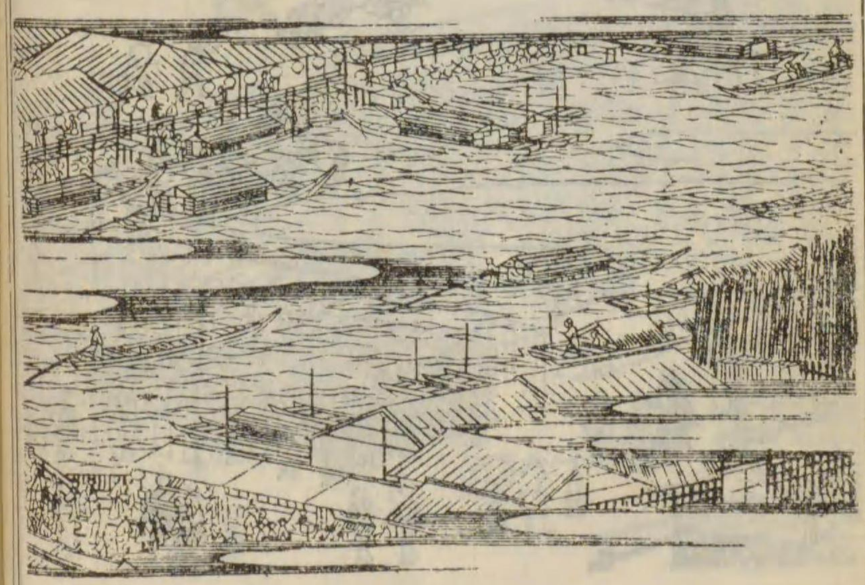
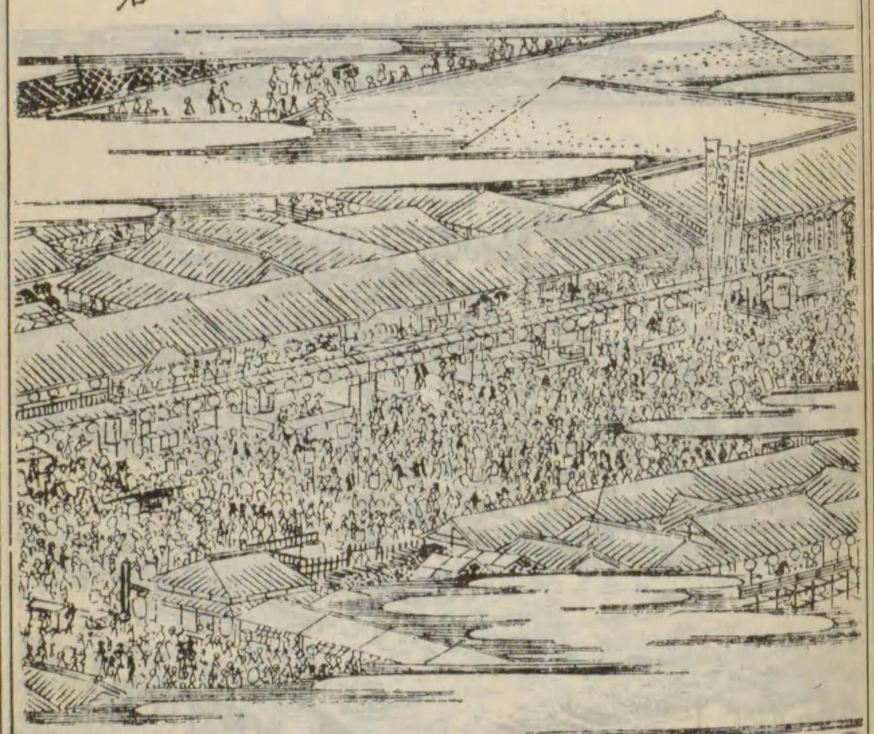
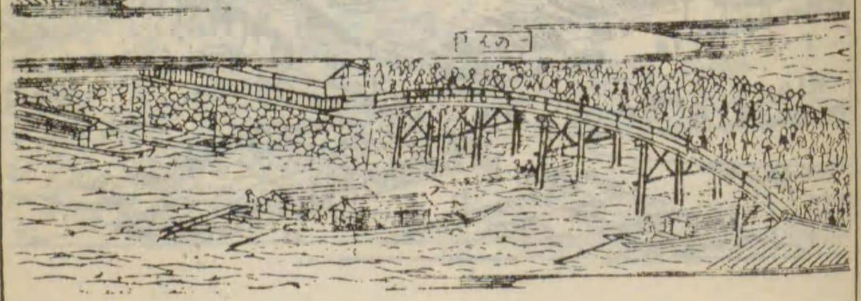



糸女ヶ原

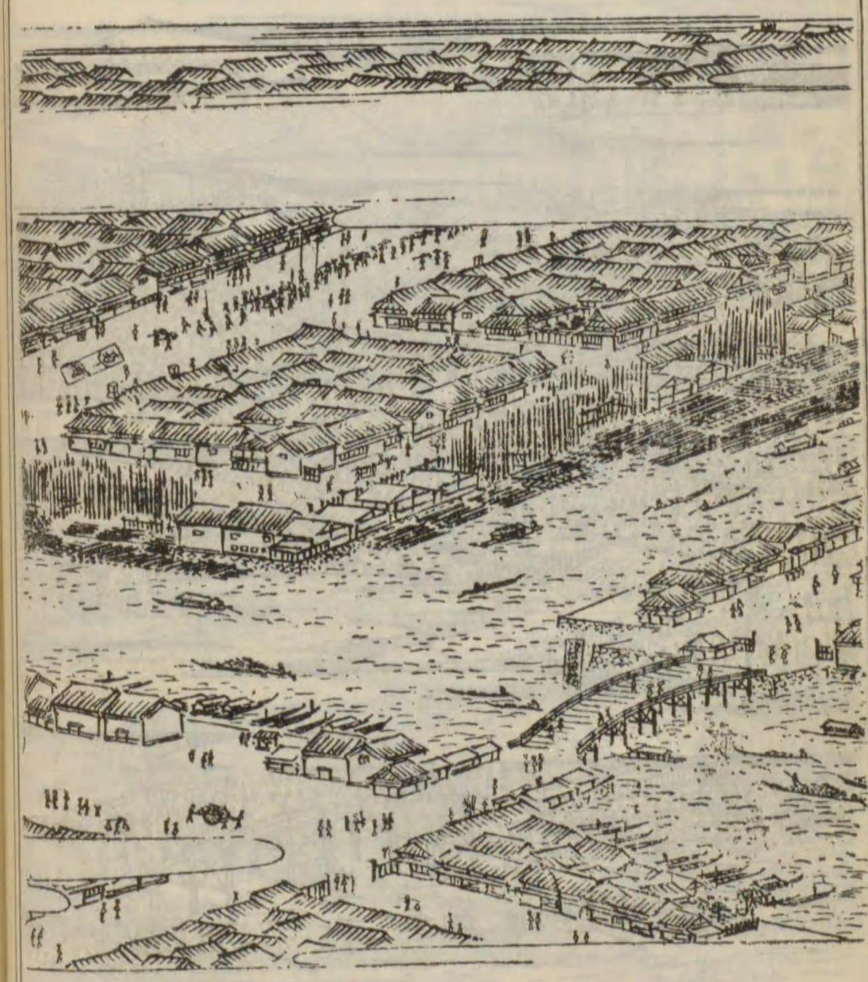

二番
看板

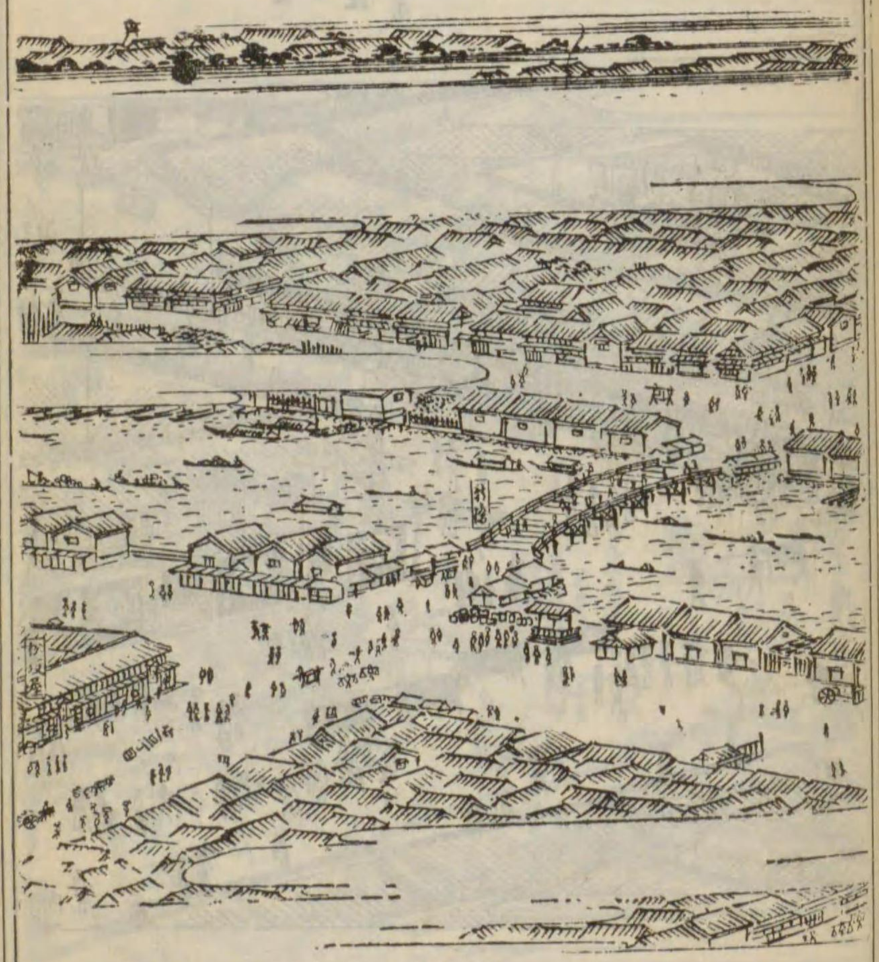


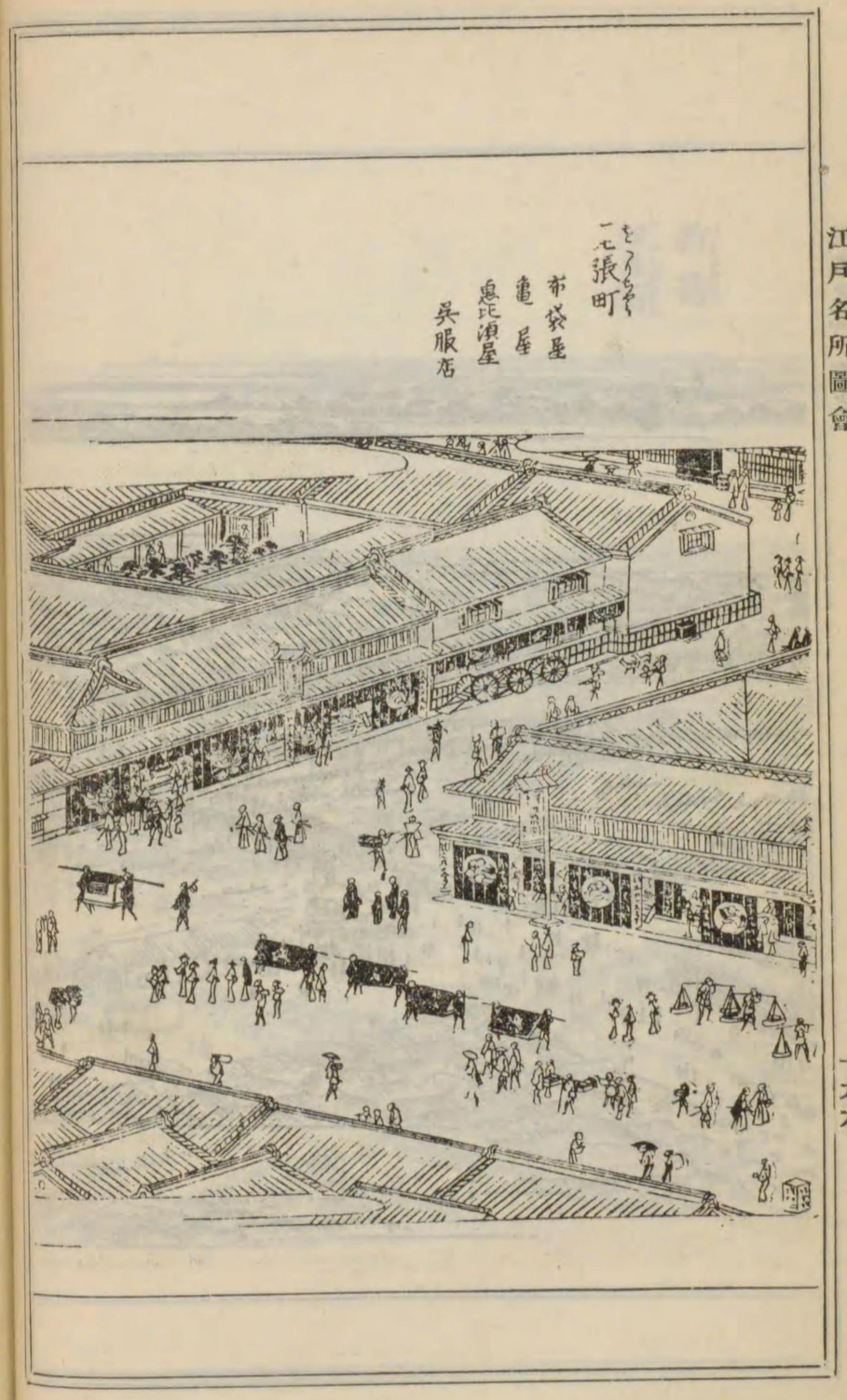

水茶屋町
芝居

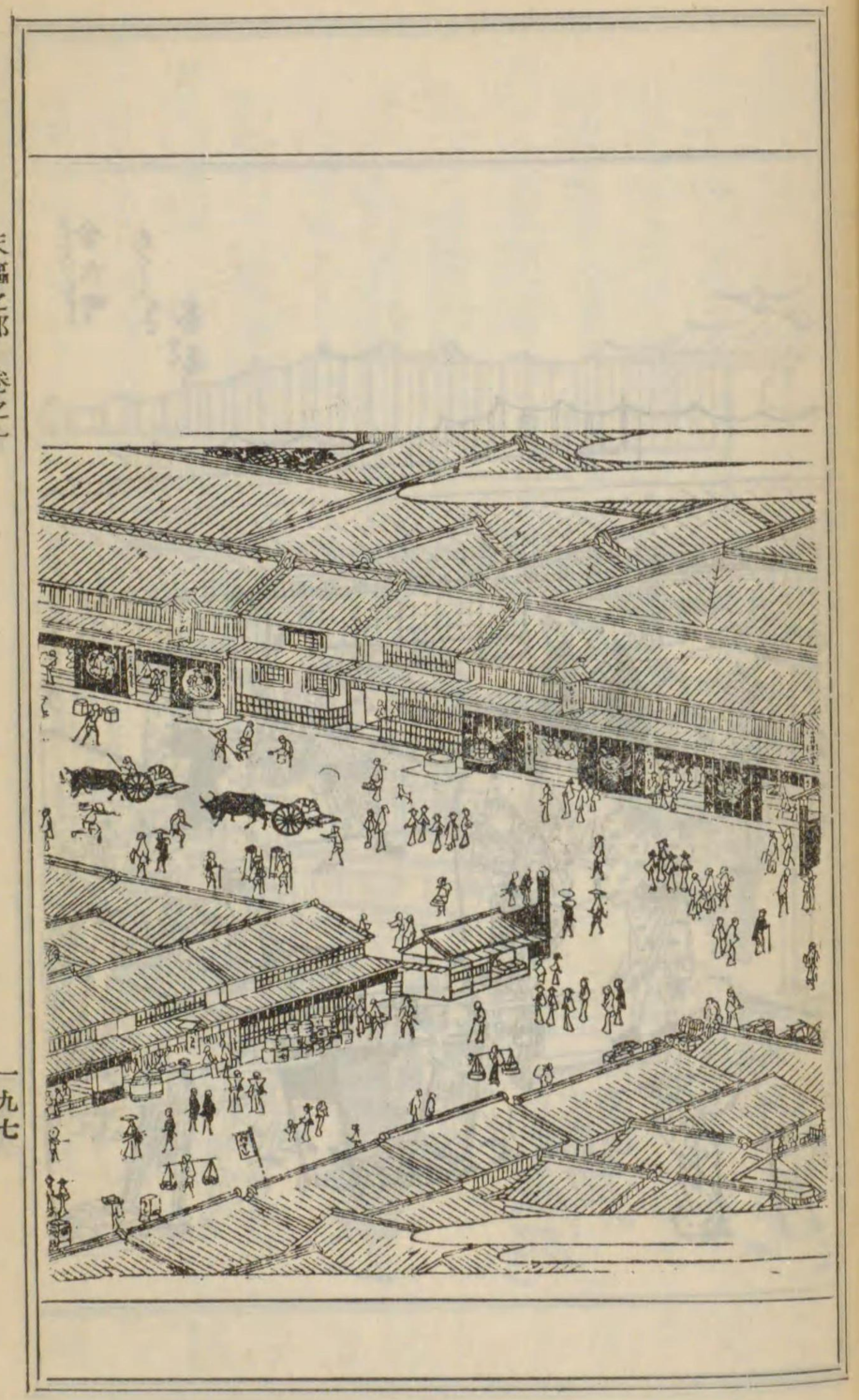


新橋
汐留橋

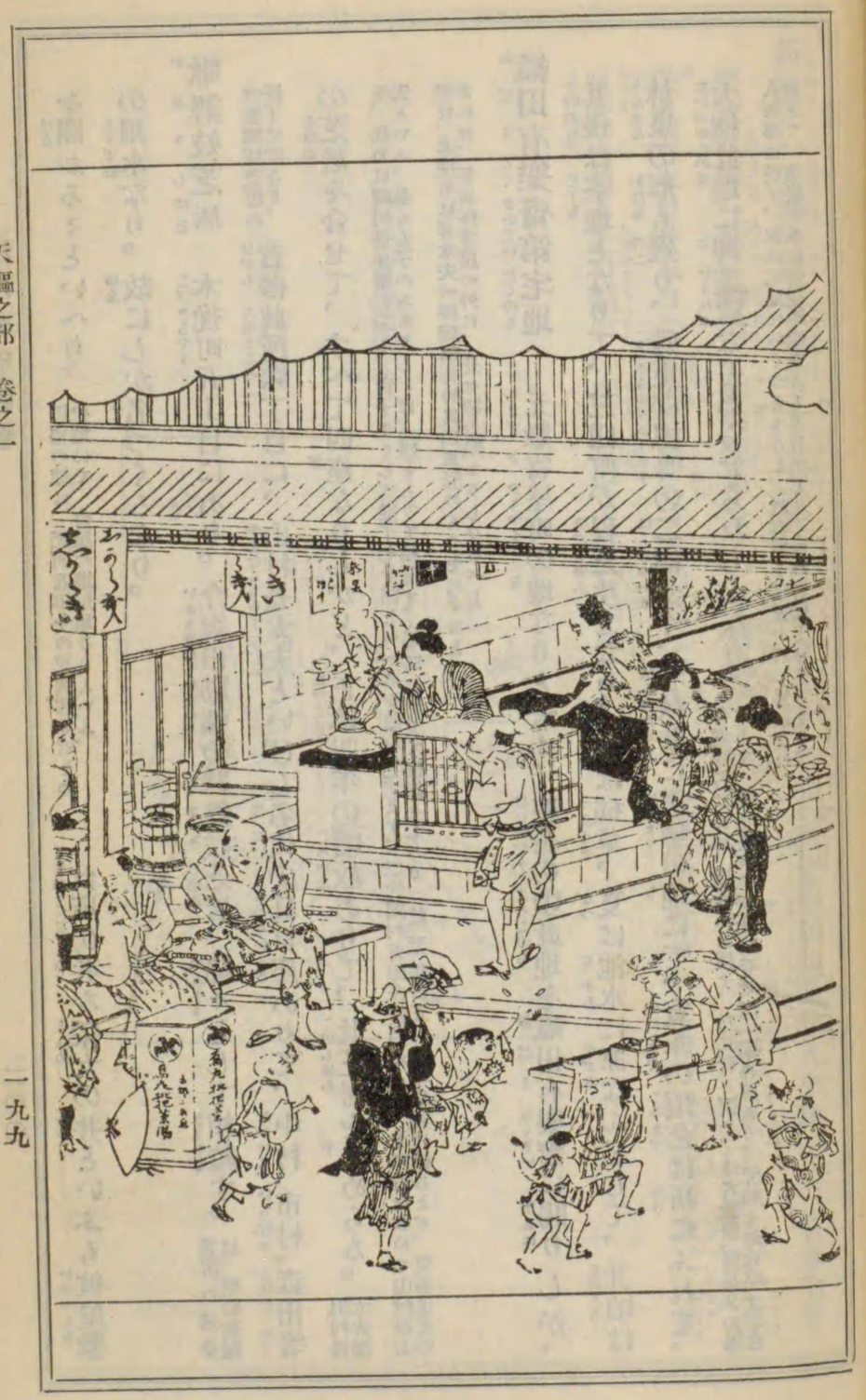





一ノ張町
布袋屋
亀屋
恵比須屋
呉服店



金六町
茶店



を開かるゝといへり。馬場の地は、天明五年今の芝西應寺町その代地にて、町屋の地馬場なりといふ。

の用水なり。故にしか名づくるなり。

此所の井を采女の井といふも彼屋敷

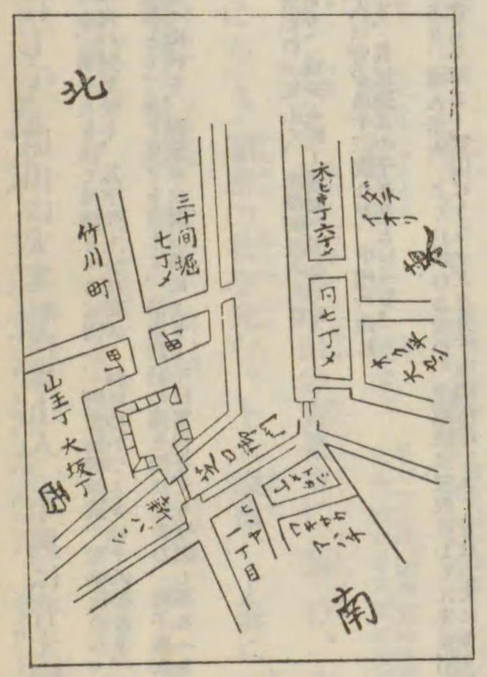
歌舞妓芝居　木挽町五丁目にあり。今森田勘彌の歌舞妓芝居、綿々として相續す。芝居の基原は、堺町葺屋町歌舞妓芝居の條下に詳なり。昔は此所六丁目に、山村長太夫といひし名代の狂言座ありて、中村、市村、森田等の芝居を合せて、すべて四座なりしかど、正德四年の頃故ありて、此芝居を止めらる。山村長太夫座を、初めは岡村長兵衛と云ふ。實子なくして從子七十郎といへるを養ひて子とす。二代岡村五郎左衛門是なり。後に名を改めて山村長太夫といふ。是も女子のみありしかば、婿をとりて相續す。此時に至りて斷絶せしなり。此芝居は正保元年申歳に始るとぞ。東海道名所記に、木挽町に喜太夫が浮瑠璃其外異類異形のものを見せるとあれば、昔は狂言座の外に、見せ物の類ありしなるべし。

織田有樂齋第宅地　元數寄屋町の地なりと云ふ。慶長の頃此地を織田有樂齋に賜りしが、其後は空地となりて、三四町が程芝生となり、春は摘草、夏は池水に涼なんどして、其頃は林泉の形も殘り、殊更櫻楓等の二樹多く、春秋共に遊望の地にて、寛永の頃迄は折にふれて、大樹此地に御遊獵などあらせられしとなり。有樂齋名は長益、源五郎と稱す。法名融覺、信長公の弟にして、茶道を利休居士に受けて一家の風あり。元和七年に卒す。此人茶事に長ず、故に宅地にいくつともなく、數寄屋を建置かれし舊跡なれば、後世土人數寄屋の唱をうしなはずして、町の名に上べりとなり。

新橋　大通り筋、出雲町と芝口一丁目との間に係る。正德元年辛卯朝鮮人來聘の前、寶永七年庚寅此所に新に御門を御造營ありて、芝口御門と唱へ、橋の名も芝口橋と更られしが、享保九年正月廿九日の火災に燒亡するの後は、復舊の町家となされたり。此川筋の東、木挽町七丁目と芝口新町の間に架せしを汐留橋といふ。

正德四年

江戸圖



三縁山増上寺　廣度院と號す。關東淨家の總本寺、十八檀林の冠首にして盛大の佛域たり。

百一代後小松院の御願にして、開山は大蓮社酉譽上人、中興は普光觀智國師なり。十八檀林は、武總常子等に存在す。阿彌陀佛六八本願の中、第十八を以て最勝とするに因み、御當家御稱號、松平氏の松や千歳を閲歴し、能く霜雪にをかされず、又君子の操ありて、しかも太夫の封を受く、其字や太公に從ふ、細にわかつときは十八公なり。依て是を彌陀の十八願にかたどり給ひ、精舍十八區を建て、永く梅檀林とし、多く英才を育して、法運無窮の謀を設けたまひ、御子孫永く安からん事は、霜雪の後、松悃獨榮茂する如くとの戸慮に從ひ、源家の御代を、淨家の白旗孤義により、千代萬代までも守護し奉るべき名を表し給ふなりとぞ。以上淨宗護篇新著聞集等の意を採摘す。

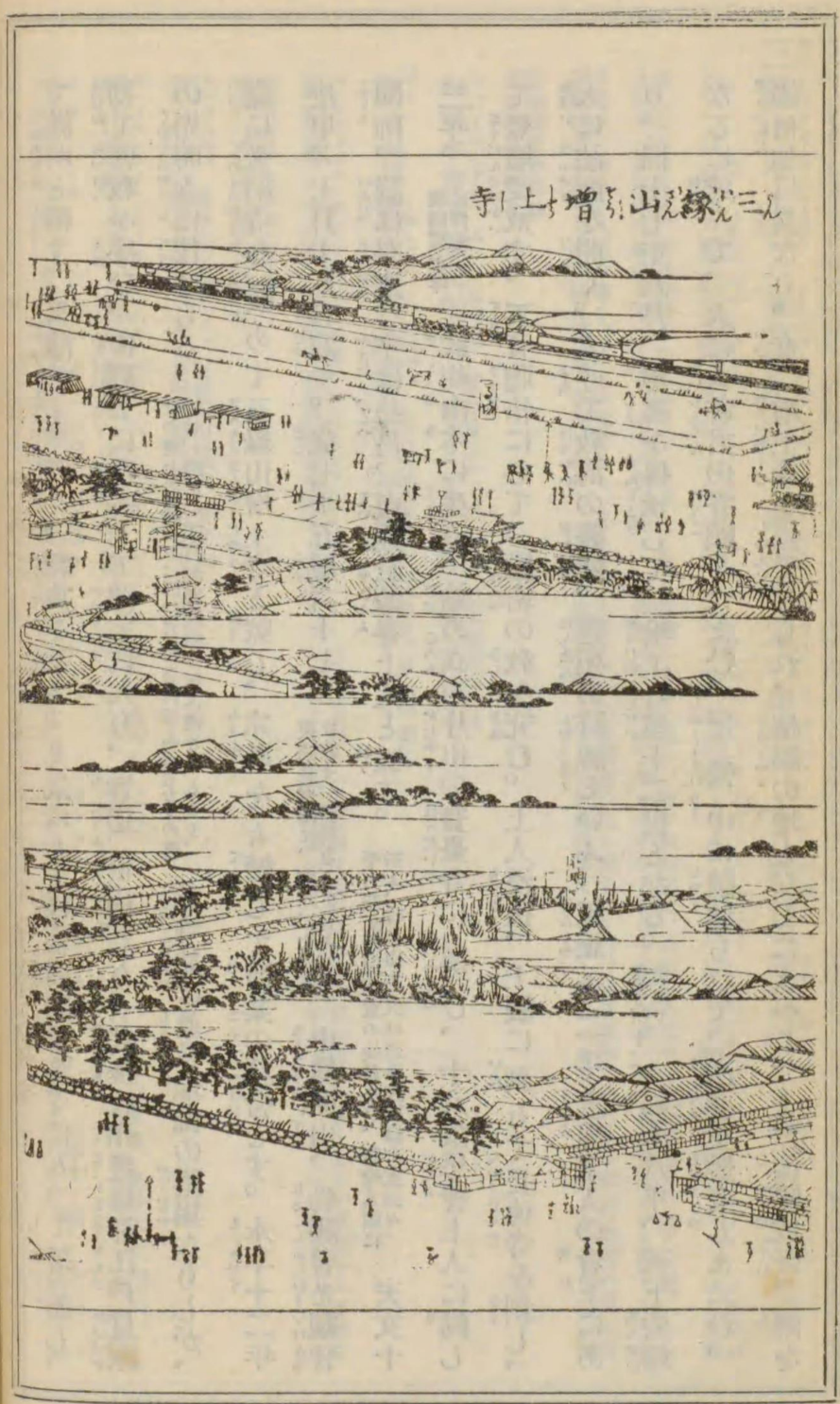
本堂本尊阿彌陀如來　惠心僧都の手にして、座像御長四尺ばかりあり。或云ふ佛工運慶の作なりと。

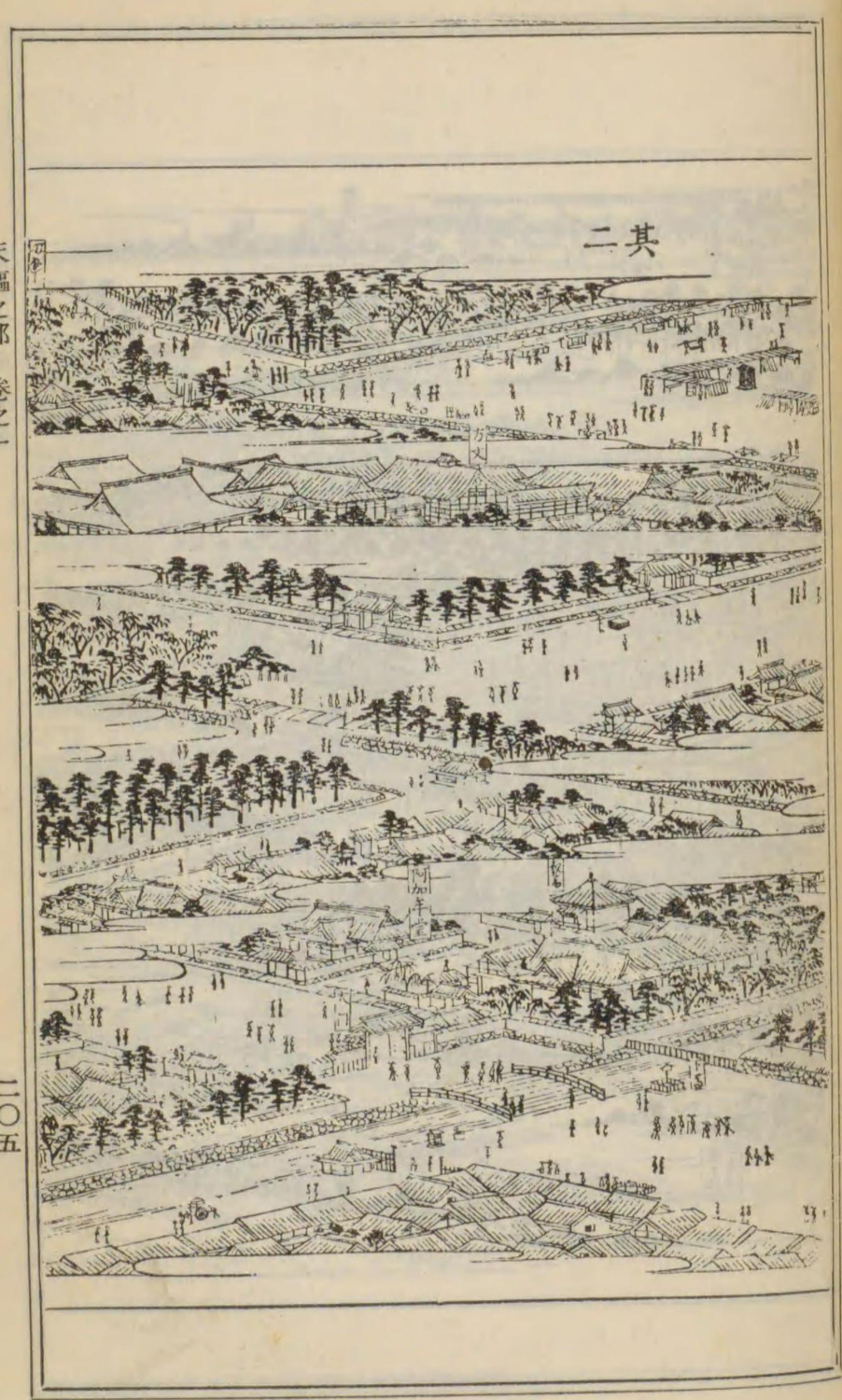
額　三縁山　廓山上人眞蹟　上人は當寺第十三世なり。甲州の産にして、高坂彈正の子なりといへり。

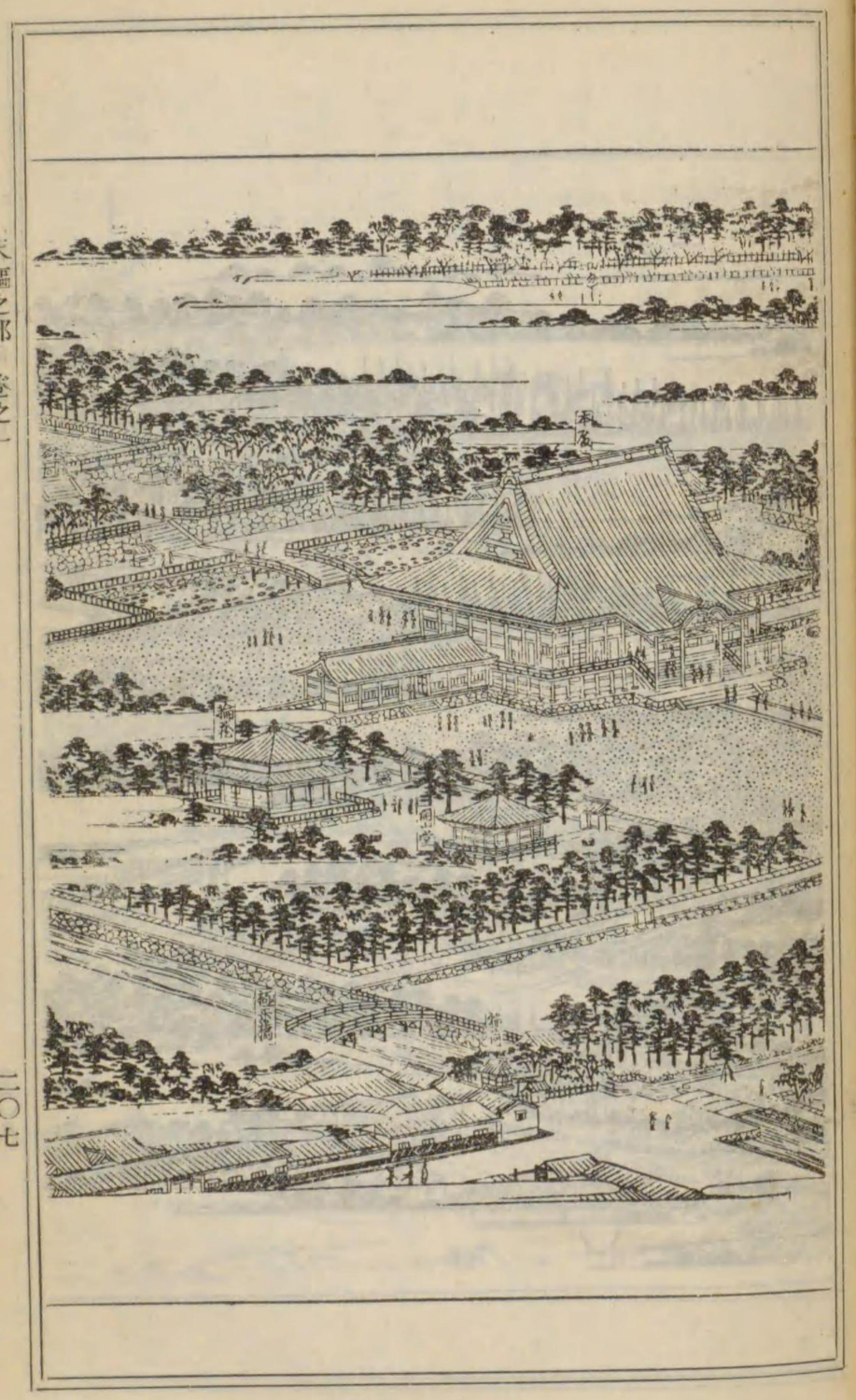
御經藏　本堂の前左の方塀の中にあり。或人云ふ、こゝに納むる所の一代藏經は宋板にして其先豆州修善寺にありて平政子の寄附なりとぞ。後彦坂九兵衛尉台命を奉じ、當山にうつすとなり。菊岡沾凉云ふ、昔は方丈にありしを、寛永九年照譽上人了學大和尚、經藏を創立したるとなり。今は官造に列す。

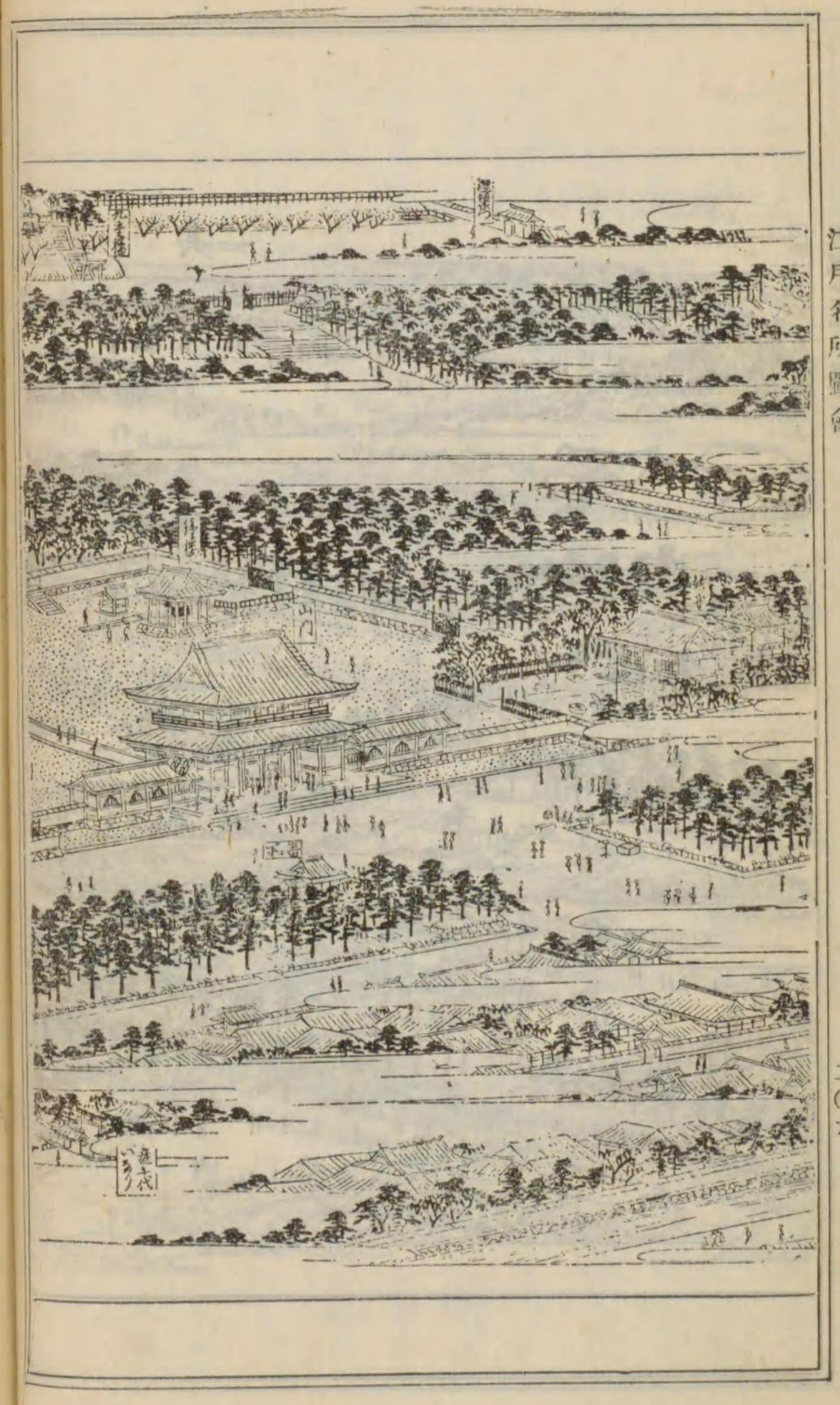
開山堂　同所左にならぶ。當寺開山以下、累世大僧正の肖像、および靈牌等を置かれたり。

開山酉譽上人、諱は聖聰大蓮社と號す。鎮西正統第八世の祖とす。貞治五年七月十日、千葉系圖、貞治二年六月三日とあり。北總の千葉に生る。父は千葉陸奥守氏胤母は新田氏なり。童名を德壽丸と云ふ。一書に、德千代とあり。加冠して胤明と稱す。出離の志深く、釋典を慕ふ。九歳にして遂に同國千葉寺に入つて落飾し、初て密教を學び、後問公に投歸して淨宗に入り、智道倍熾なり。其後武州豐島郡江戸貝塚の光明寺に住せらる。今の増上寺是なり。江戸名勝志に云ふ、増上寺の舊地は、糀町一丁目越後屋敷と云ふ邊なりとあり。此寺始は眞言瑜伽の道場なりしが、竟に光明寺を改めて三縁山増上寺と號し、宗風をも轉じて淨業の精舍とす。永享十二年庚申、七月十八日寂す。歳七十五臘六十七。東國高僧傳に、應永二十四年に寂す。壽詳ならずとあり。中興開山、勅賜普光觀智國師、諱は存應、字は慈昌、貞運社源譽上人と號す。平川左衛門尉季重の後裔なり。傳燈系圖に云ふ、姓は由木、父は金吾校尉源利重云々。天文十三年、護國篇十年に作る。武州由木に生る。始め衣を片山の寶臺寺に掘ひ、十八歳感譽上人に歸して登壇受戒す。天資聰悟にして、顯密の教を究む。上人沒後、上簑に到りて長傳寺を創し、大に法席を開く。人呼で教海の義龍、蓮苑の祥鳳といふ。天正十二年雲譽上人の會下にあり。同十七年八月、璽書を傳承して、増上寺第十二世となる。當寺第十二世たり。同十八年、天下安靖なるに逮んで、大に大神君の眷顧をたまひ、屢營中に請ぜられて、法要を聽受しまたひ、崇信他に異なし。竟に増上寺を修營せられ、植福の地となしたまへり。また後陽成帝、師を

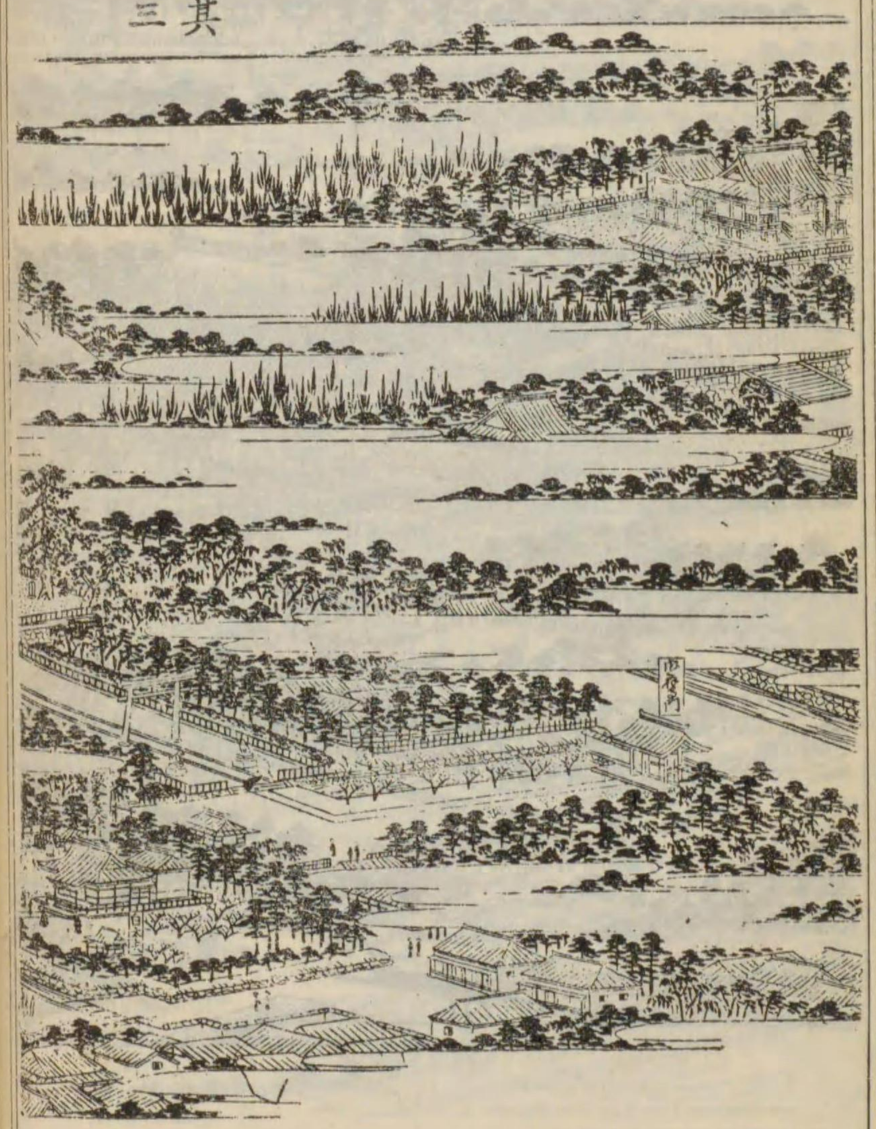

三緣山增上寺


其二

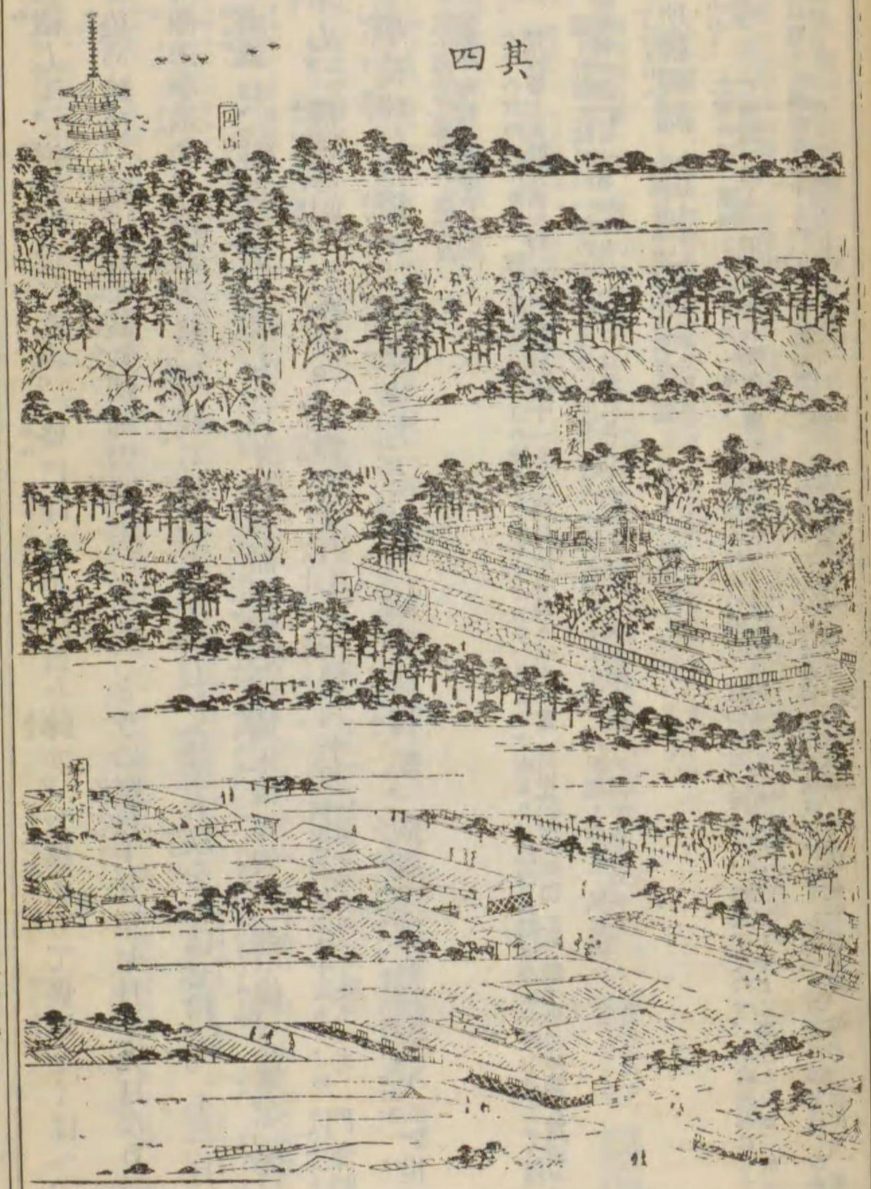




其三



其四



宮内に徴して、道を問ひたまふ。盛に淨教の深旨を陳ず。感歎ありて褒章をくはへ、新に宸翰を染め給ひ、特に普光觀智國師の號をたまふ。ときに慶長十五年七月十九日なり。元和六年師微恙を示す。嗣君大將軍親ら臨んで、かたじけなくも疾をとはせ給ふ。十一月二日、諸徒に遺誡し、辭世の偈を書して曰く、佛話提撕心頭塵末後一句但稱佛、と筆を拋て端座合掌し、佛號を唱へて化す。世壽七十有七、僧臘六十。護國篇、世壽八十とあり。いづれか是なることをしらず。門葉甡々として、學徒流れに浴す。撰述するところ、論義決擇集、阿彌陀經直譚等、大に世に行はる。以上淨土山僧傳、淨宗護國篇、傳燈系圖等に出づ。

大銅鐘　本堂の右の方にあり。鐘の厚さ尺餘、口の渡り五尺八寸ばかり、高さ一丈程あり。銘曰、新鑄洪鐘掛三緣二層上寸之樓。二十六世疫譽上人歷天大和尚、延寶元癸丑年十一月十四日。神谷長五郎平直重、須田次郎太郎源朝寛、鑄工椎名伊豫高寛云々。其聲洪大にして、遠く百里に聞ゆ。一種の間の響尤長くして、行人一里を歷るとて、諺に一里鐘と稱す。風に從ひて、當國熊谷の邊に聞ゆるまあり。かしこは江戸より十六里を隔つ。又安房上總へも聞ゆるといへり。

熊野三所權現祠　同所にあり。則ち當寺の鎭守にして、護法の神と稱す。

黑本尊堂　本堂の後、蓮池より奥の方にあり。本尊阿彌陀如來の像は、惠心僧都の作なり。御長二尺六寸、相向圓備にして、生身の佛體に向ふが如し。世人呼んで黑本尊と稱せり。多くの星霜を歷て、金泥こゝとごとく變じて黑色となる。故に此稱あり。或は源九郎義經奉持する所、故に九郎本尊といふの意なりとも。始め參州矢子の明眼寺にありしを、某の邑の調を以て寺產に充て此靈像を得給ひて、常に御念持佛となし給ひしが、竟に當寺に遷し給ふとなり。元祿八年、增上寺御修營の時、桂昌一位尼公、重ねて佛龕を新たにし、寶帳玉扉構飾精巧を極むと。以上淨宗護國篇に載る所也。毎歲正月十六日、四月八日同十七日、諸人こゝに參詣する事をゆるさる。

三門　元和九年癸亥御建立。或は云ふ八年なりと。樓上に釋迦、文殊、普賢、及び十六阿羅漢等の木像を置く。正月七月の十六日、二月八月の彼岸の中日、又二月十五日、四月八日等に登樓をゆるさる。

安國殿　本堂構の外、南の方にあり。四月十七日は、御祭禮にて、參拜を許さるゝ故に、詣ずる人多し。來由は其憚あるを以て、是を略す。御別當を安立院と號す。

五層塔　同所御佛殿の地、蒼林の中にあり。酒井雅樂侯の建立なりといへり。

涅槃石　同所にあり。御彫物師吉岡豐前作なりといへり。羅漢石とも號く。

鷹門　同所にあり。

極樂橋　同所前の構に渡する所の石橋をいふ。

宗廟　御當家御代々の御靈屋なり。當寺院中より御別當を務む。

御常念佛堂　湿門の方にあり。惠照律院と號す。淨土律にして、當山の別山たり。播選社縱譽心岩上人開基す。同卷赤羽心光院の條下に詳なり。當院に上人眞影の涅槃像の印板あり。有信の輩に授與す。他の圖に異なり。

性壽庵　方丈の後の方にあり。屋州清須城主、松平薩摩守忠吉の靈牌を置く。故に俗に薩摩堂とよべり。側に小笠原藍切を始として、殉死五人の石塔あり。柳の井といふは、同所南の坂迴りにある名泉なり。

飯倉天滿宮　天神谷にあり。當山の地主神なり。世飯倉の神明もこの地にありしとなり。社地に梅樹を多く栽て、二月の頃一時の莊觀たり。寶松院別當す。

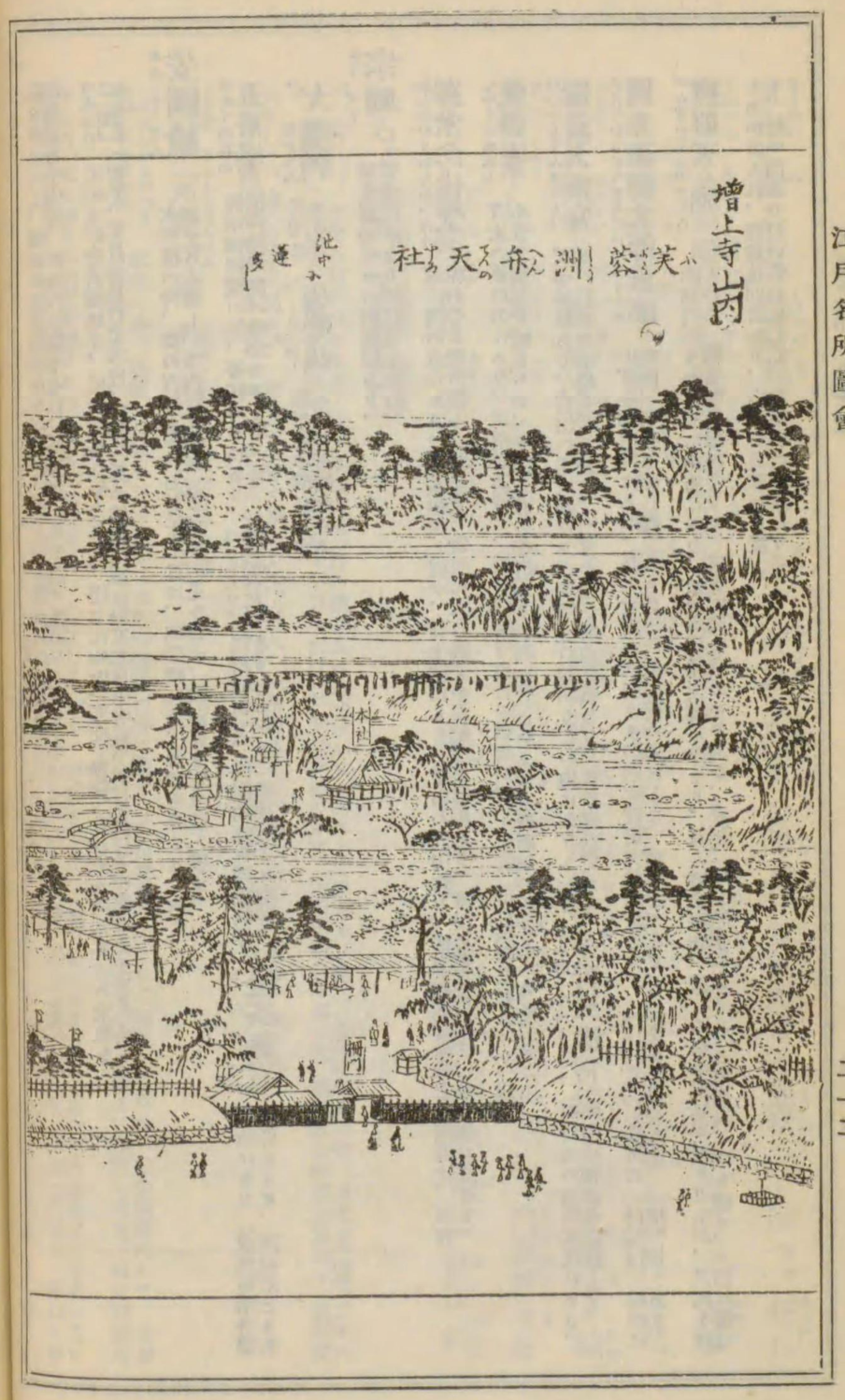
茅野天滿宮　同所南の方松林院にあり、神像は菅神の直作とす。

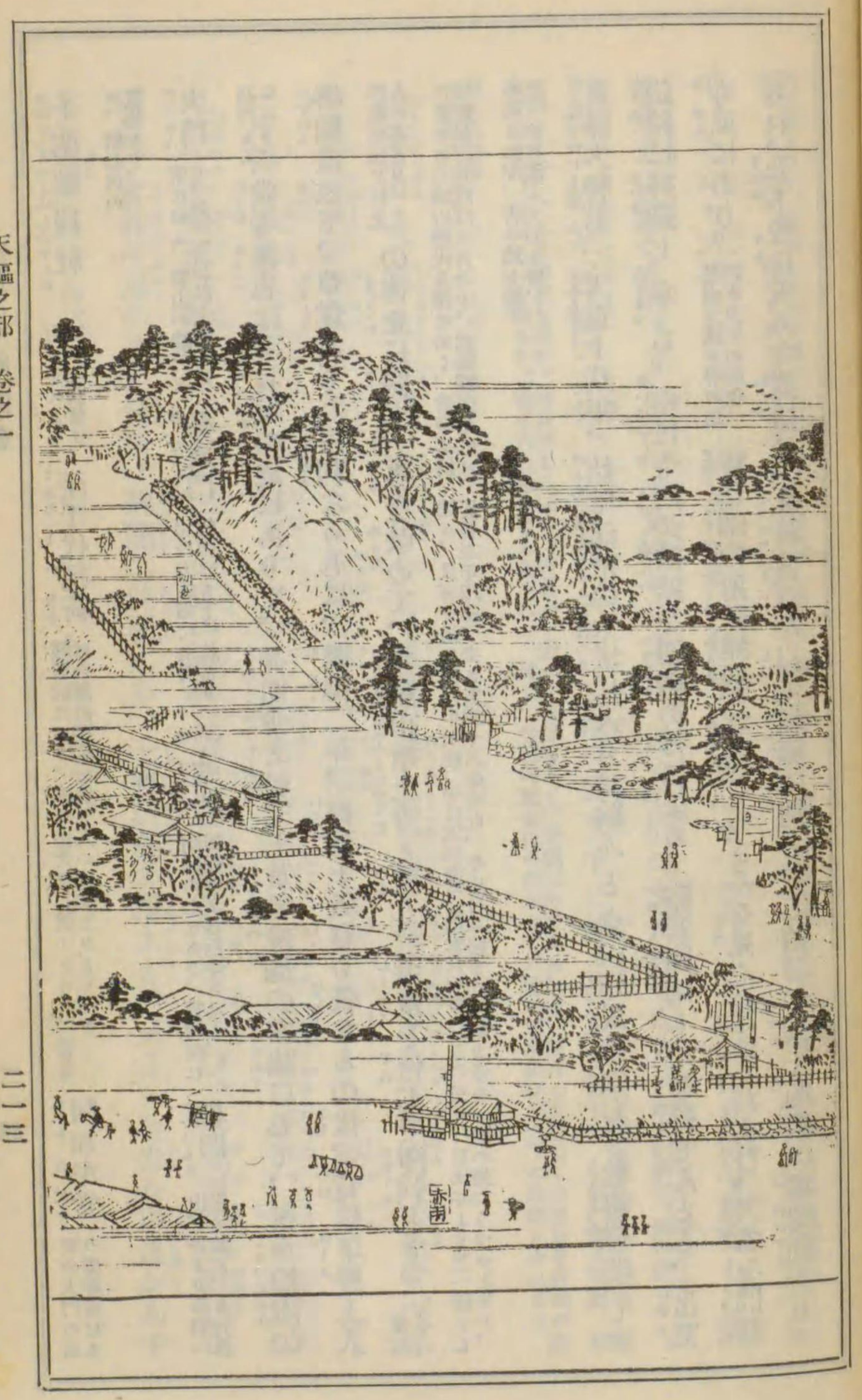
圓光東漸大師舊跡　山下谷明宅院にあり。是も當山の別院なり。明定院前大僧正定月大和尚、明和七年に建立せらる。六間四面の堂にして、戒壇造りなり。

圓座松　同所にあり。

圓山　同所にあり。

辨財天祠　赤羽門のうち蓮池の中島にあり。本尊は智證大師の作なり。右大將賴朝卿、鎌倉の法華堂に安置ありしが、星霜を經てのち、觀智國師感得ありて、當寺寶庫に納めありしを、貞享二年、生譽靈玄上人、この所に一宇を建て、一山の鎭守とあがめられ、寶珠院別當たり。中島を芙蓉洲と號く。此所門より外は赤羽にして、品川への街道なり。


増上寺山内
芙蓉洲
弁天社
池中の蓮



ねのひじりごんげんのやしろ
子聖權現社　山下谷にあり。昔は普光院と號すとなり。當寺は合運社明譽僧通上人の舊跡なりといへり。清林院別當す。

産千代稲荷　觀智院にあり。

阿加牟堂　東の大門の通り常照院にあり。常念佛の道場なり。

大門　東に向ふ。當山の總門なり。外に下馬札を建らる。

御成門　北の方馬場に相對す。此所にも下馬札あり。

羽門ともいへり。

浮槃門　切通の上にあり。惠照院に浮槃像ある故なるべし。

柵門　山下谷より赤羽へ出る故に、また赤

當寺舊古は、貝塚の地にありて、光明寺と號せし眞言瑜伽の密場にして、後小松院の御願に依て、草創ありし古刹なりしに、至德二年、酉譽上人移り住するの後、竟に了譽上人傳通院三ヶ月上人の事なり。の德化に歸し、寺を改めて、三緣山增上寺と號し、宗風を轉じて淨刹とす。事跡合考に出せる三緣山歷代系譜に云く、當時草創ノ地者。貝塚今糀町邊。中頃移于日比谷邊ノ後慶長初移于芝ノ云々。日比谷より芝へ移りしは慶長三年戊戌八月なり。武徳編年集成に、慶長三年戊戌、去る天正十八年辛卯、平川口へ移されし增上寺を、芝の地にうつすとあり。平川日比谷、古へ地を接す、故に混じていふ歟。

東照大神君　天正十八年、始て江戸の大城に入らせ給ふとき、州民鼓腹し、老幼相携て、道路に拜迎し奉る。幸に寺門の前路を通御あるにより、觀智國師も是を拜せんとし、出て寺前にあり。是則ち比々谷の地にありての事也。時に師の道貌雄毅、尋常ならざるを見そなはしたまひ、其名を問せられ、乃ち寺に入りて憩給ひ、其後當寺を以て植福の地となし給ひ、永く師檀の御契約あり。

御崇敬あつく、勝師を營中に請ぜられ、法要を聽聞なし給ひ、待するに禮を殊にし、是を親王に比せられ、師をして、乘輿して殿階に昇る事を得せしむ。以て永式とす。今に至り歷代の住持、咸この榮をうく。

て、しかも大城に接近す、是乃比々谷にありし時の事也。依て今の地にうつされ、おほいに資財を喜捨し、殿堂房室に至るまで、ことぐく營建したまひ、最も宏壯の大梵刹となる。事跡合考に、慶長十年乙巳、本堂回廊等、御造營ありて、大伽藍と云々。これにおいてじやうけなる云々。於是、淨家の宗教、一時に勃興し、念佛の聲天下に洋々たり。以上淨宗護國篇に出たり。慶長十年、一朝門前の老翁、師に謂つて云く、今夜祥夢を感ず。師微笑して云く、何其夢を審げ、吾買んとて、青銅二十疋をあたふ。既にして翁云く、增上寺軒端の垂木繁ろちん、師曰く、吉徵なり、愼で人に語ることなかれと、果して翌日伽藍營復の命ありて、竟に宏構鉅材、天下の壯觀となれる由、淨土高僧傳に出たり。

抑當山は、關東淨刹の冠首にして、龍象の聚る所、實に靈山會上布金紺園にも比すべけん。數百戸の學寮は、疊々として軒端を輾り、支院は三十餘宇、靡々として甍を連ねたり。三千餘の大衆は、常にこゝに集る。なかにも能化は、一代の法藏を胸間に貯へ、所化は十二の教文を眼裡に晒せり。三心卽一の窓の前には、五念四修の月を弄び、事理俱頓の林の中には、實報受用の花を詠ず。佛閣の莊麗たる、七寶莊嚴の淨土も、又こゝを去る事遠からずとぞ思はれける。

御忌參　正月。廿五日　涅槃會　二月十五日　誕生會　四月八日　開山忌　七月十八日に修行す、一山惣出仕亦に近在の末寺より出て、大法會を修す。　十夜法會　十月六日より同十五日迄修行す。

飯倉神明宮　同東の方、神明町にあり。江戸名所記等に、日比谷明神とあり。今俗間芝神明と稱す。其舊地は增上寺境内飯倉天神の社地なりと。或は云ふ、赤羽の南、小山神明宮の地なりとも。社司は西東氏、名所記に、往古當社の神、詑宣ありしにより、相州足柄郡より齊藤氏なる人を招きて神主とすと云々。別當は金剛院と號す。其餘社家巫女等あり。

神鳳抄云　武藏國飯倉御厨　當時四貫文

同書又曰　飯倉御厨　長日　御幣五十丁

東鑑曰　壽永三年甲辰五月三日庚寅。武衞被奉寄附兩村於二所大神宮。去永曆元年二月。御出京之刻。感靈夢之後。當宮事御信仰異他社。然者平家黨類等在伊勢國之由。依令風聞。遣軍士之時者。縱雖爲凶賊之在所不相觸事之由。於祠宮無左右不可亂入神明御鎭座砌之旨。度々所被仰含也。謂件兩所者。內宮御分武藏國飯倉御厨。被付當宮一禰宜荒木田成長神主。外宮御分安房國東條御厨。被付會賀次郎大夫生倫。訖。爲一品房奉行。遣兩通御寄進狀。下畧

寄進　伊勢皇太神宮御厨壹處

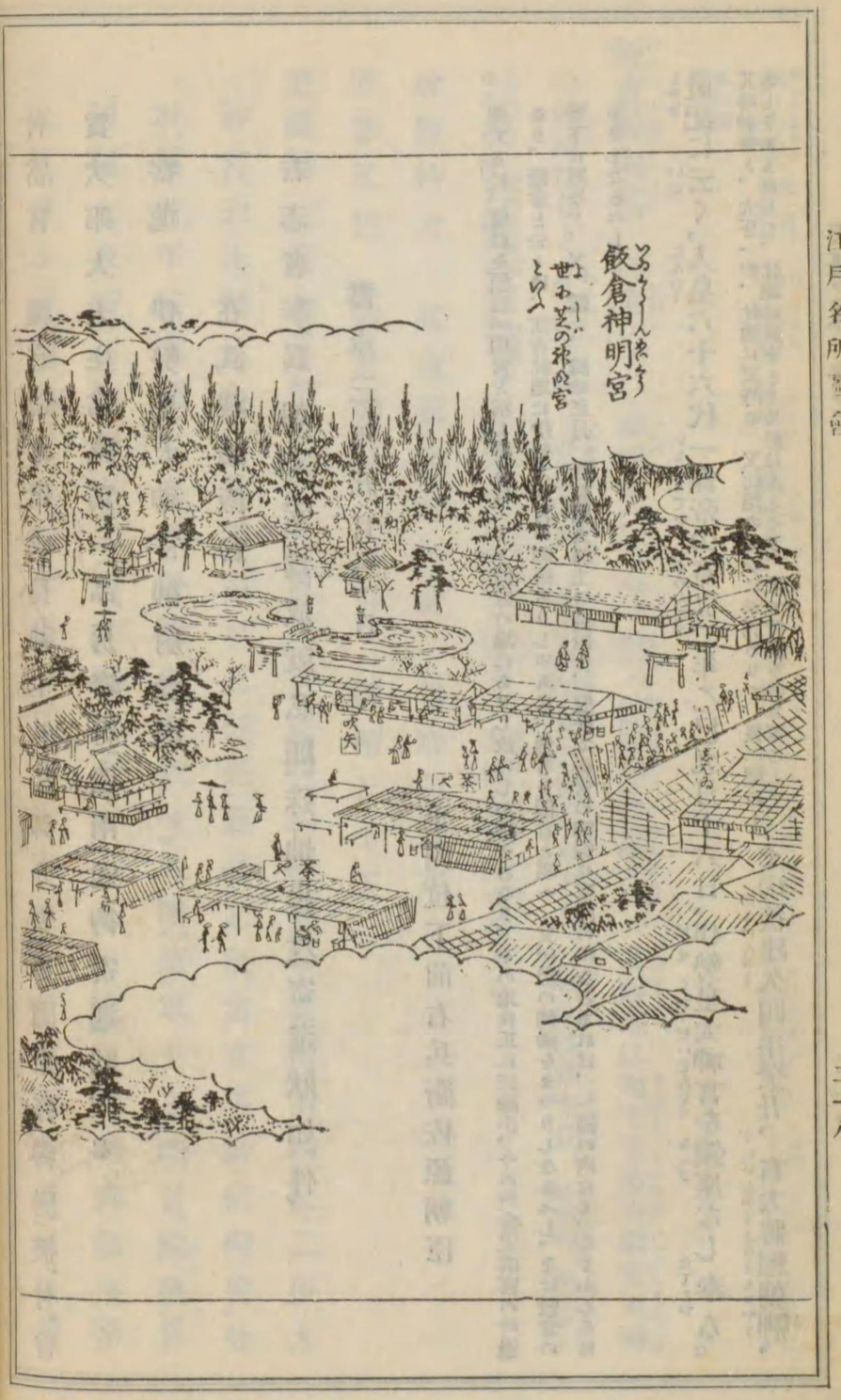
在武藏國飯倉

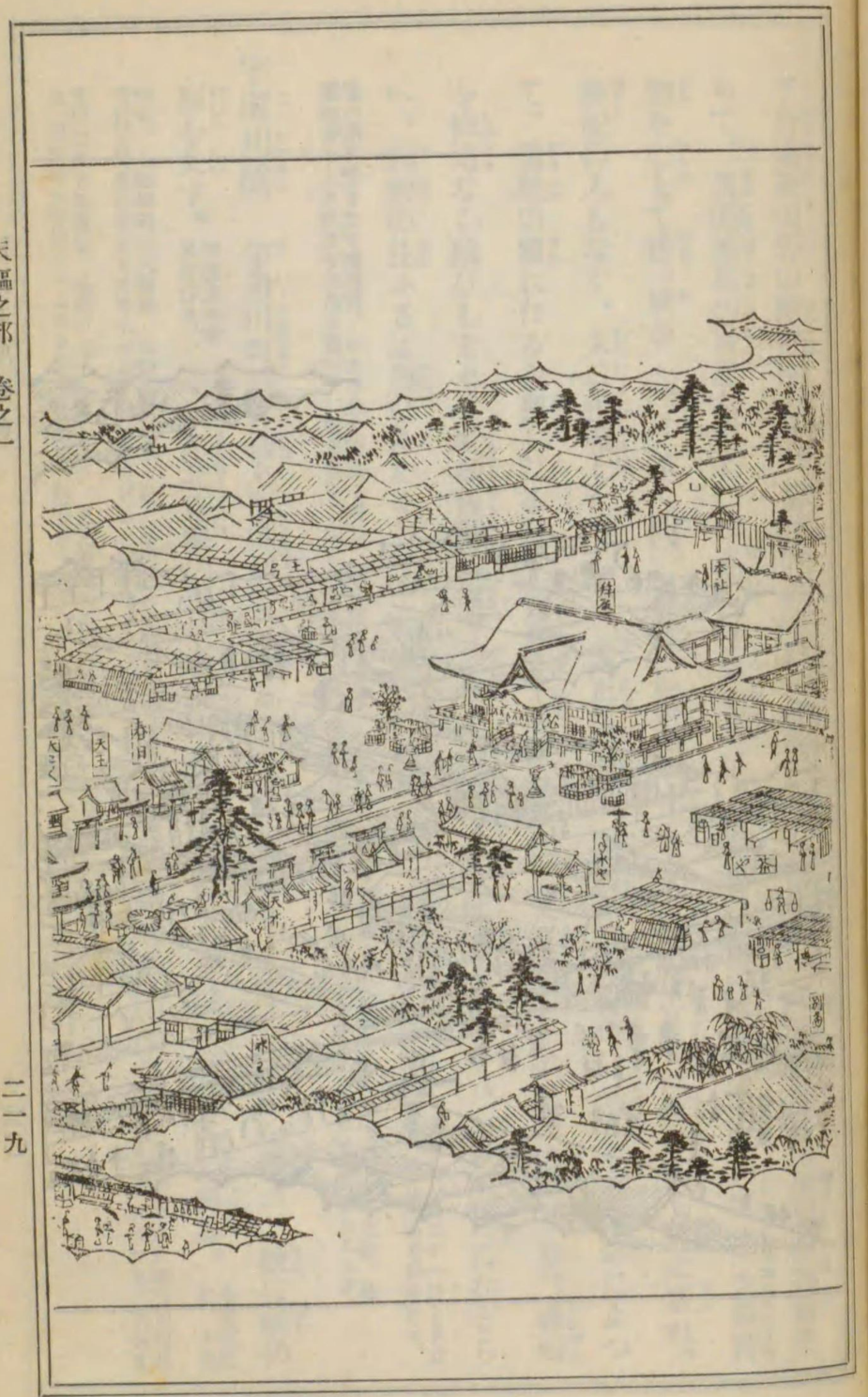
右志者奉爲朝家安。爲成就私願。殊抽忠丹。寄進狀如件。

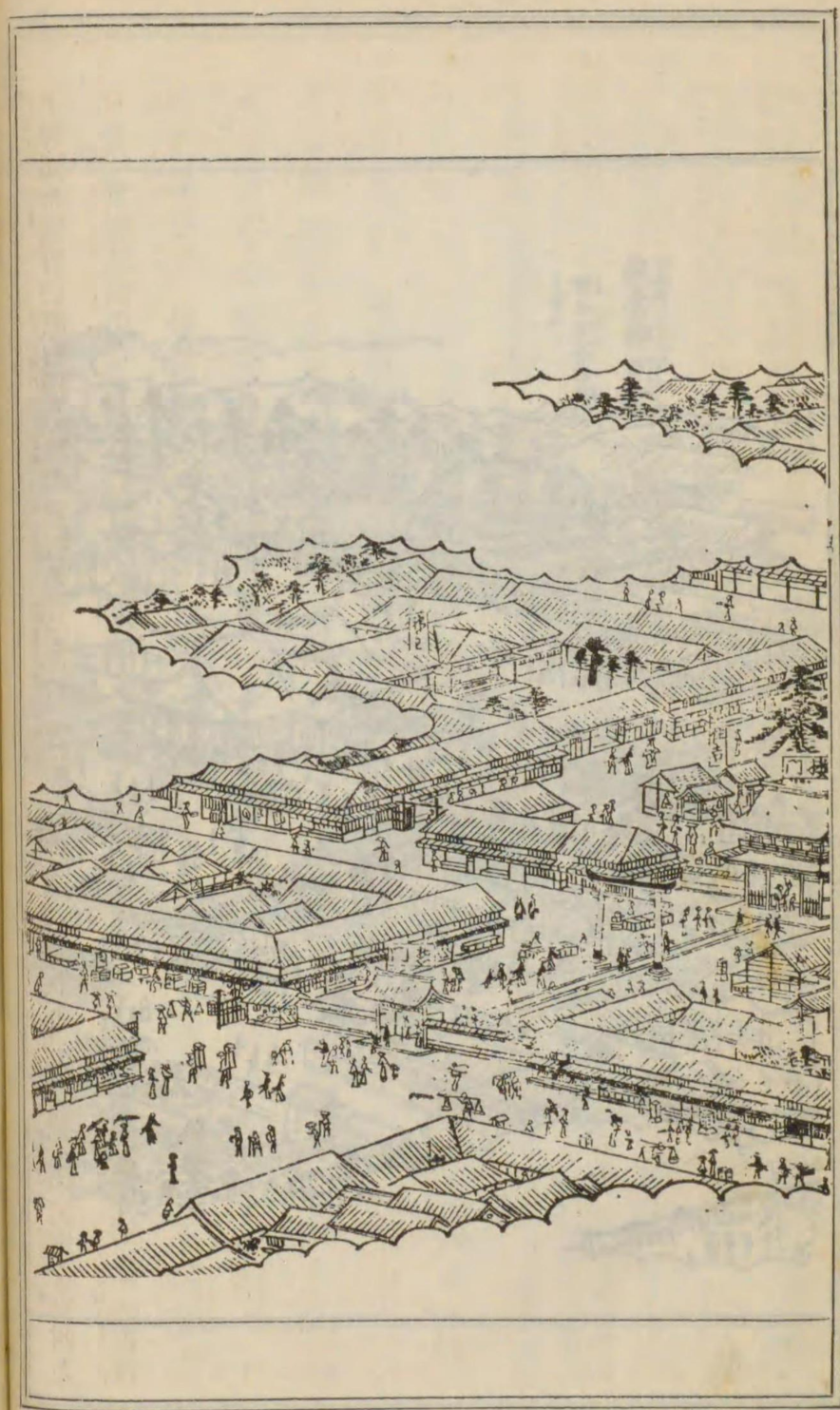
壽永三年五月三日　　正四位下前右兵衞佐源朝臣

按ずるに、當社を飯倉神明宮と稱し奉るは、もと飯倉の地にありし故にしか稱するなり。その地は正に三緣山、今の飯倉天滿宮の社邊なり。飯倉と云ふは、往古此地に伊勢太神宮の御厨ありしゆゑに、地名を飯倉と唱へ　又伊勢の御神をまつりしなるべし。なほ飯倉の條下に詳なり。又東鑑に、同年正月、武藏國大河土の御厨を、豐受太神宮の御領に寄附の事などあれば、一國の內にも、こゝかしこにありしなるべし。

社記に云く、人皇六十六代一條帝の寬弘二年乙巳九月十六日、伊勢皇太神宮を鎭座なし奉る。其時神幣と、大牙一枚、此地に天降る。又此地の童女に神託ありて、彼二種のしるしをあらはして、此地に跡をとゞめ給はんとなり。依て當社を營み奉るとぞ。その後建久四年癸丑、右大將賴朝卿、


飯倉神明宮
世俗芝の神明宮
とゝ





下野國奈須野の原狩獵の時、當社の神殿に、寶劍一振を納め、一千三百餘貫の美田を寄附ありて、其頃繁昌の宮居たりしに、遙に後明應三年、伊勢新九郎氏茂、小田原の城主大森實頼を亡して後、威を逞うせし頃、是が爲に神領を掠とらる。依て宮社は霧に朽ち風に破れ、奉祀の人もなく、大に荒廢したりしを、天正に至り、四海昌平の御時、忝くも台命によつて、當社の廢れたるを興したまひ、神領若干を附せられ、又寛永十一年甲戌にいたり、神殿を修造なし給ひしより、社頭舊觀に復す。依て神燈の光りは赫々として、和光の月になぞらへ、利物の花ふさは匂ひふかくして、神威昔に倍せり。

當社の祭例は、九月十六日なり。同じ十一日より廿一日に至るの間參詣群集す。商ひ物多きが中にも、籐の花を畫きたる檜割籠、および土生姜殊に緻し、故に世俗生姜市、又生姜祭とも唱へたり。江戸名所ばなしに、白杵、木鉢、鮓菓物多しとあれど今は是を鬻がず。檜割籠を、俗にちぎと名づく。また生姜を賣る事は、尤も久しきよりの事にて、其據をしらず。

宇田川橋

宇田川町の大通りを横切て、流るゝ小溝に架せり。今は上に土を覆ふ。故に橋の形を失す。宇田或は宇多に作る。小田原北條家の臣、宇多川和泉守といへる人、架せしと云傳ふ。小田原記に、大永四年、上杉修理太夫朝興、北條氏綱に攻られ、品川表にて戰ふと云ふ條下に、氏綱朝興を亡し、首も實檢ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降參の者ども申しつけ、普請ねんごろに沙汰すとあり。東道廻路記に、長祿元年丁丑四月八日、太田道灌江戸にうつる、其後宇多川和泉守長清は、品川の館に住むとあり。又元祿開板の江戸鹿子といへる草紙に、昔此所へ宇田といふ刀を墮しける故に此名ありといへり。證とするにたらず。

九月十六日
飯倉神明宮祭礼
十一日より廿一日迄
氏子中
屋
手客
萬来

太好庵
八歳巳貴次九月吉辰
神宮御祭禮
御門前
氏子中

日比谷稲荷祠　芝口三丁目西の裏通にあり。此所町巾至て狹し。故に土人日隆町と字す。本山方の修驗、寂靜院別當たり。萬治の頃、藍屋五兵衛といへる者、託宣によつて、花洛藤森の稲荷を勸請なせしといへり。日比谷、昔は比々谷に作る。小田原北條家の所領役帳にも比々谷に作り、此地を大胡宮内少輔所領の中に加ふ。

烏森稲荷社　幸橋より二丁ばかり南の方、酒井下野侯邸の北の横通にあり。往古よりの鎭座といへども、年歷來由共に詳ならず。元祿開板の江戸鹿子といへる草紙に、天慶年間、藤原秀卿將門退治の時の勸請なりといへども、信としがたし。又如何なる故ありてや、當社の神寶に、古き鰐口一口を納む。表に元歷元甲辰年正月、下河邊庄司行平建立と彫付てあり。江戸名所ばなしに、日比谷稲荷の條下に云く、此宮地は借地にてありしに、既に斷絶におよぶべき頃、稲荷の神宮守に告て、古來よりの證據なりとて鰐口ひとつを與へ給ふ。宮守公へ訴へ、此證によつて、宮居つゝがなしとあるは、當社の事を誤りていふなちん歟。或人云く、明暦の回祿に、奇瑞ありしかば、其後社の邊除地となるぞ。社司山田氏は柳營御連歌の御連衆たり。別當は快長院と號して、本山方の修驗なり。祭禮毎年二月初午に執行す。幸橋御門に假屋をしつらひて、神輿を移す。參詣群集して賑へり。

古河御所足利成氏願書一通　當社に藏す。

稲荷大明神願書事

今度發向所願。悉於成就者。當社可遂修造。願書之狀如件。

享徳四年正月五日　左兵衛督源朝臣　成氏判

藪小路　愛宕の下通り、加藤侯の邸の北の通を云ふ。同町艮の隅、裏門の傍に、少ばかりの竹叢あり。故にしかいへり。されどその來由詳ならず。傳説あれども證としがたし。

慶長より寛永の頃に至り、細川三齊侯、此地に住せられ、その庭中の小池を三齊堀と號くといふ。

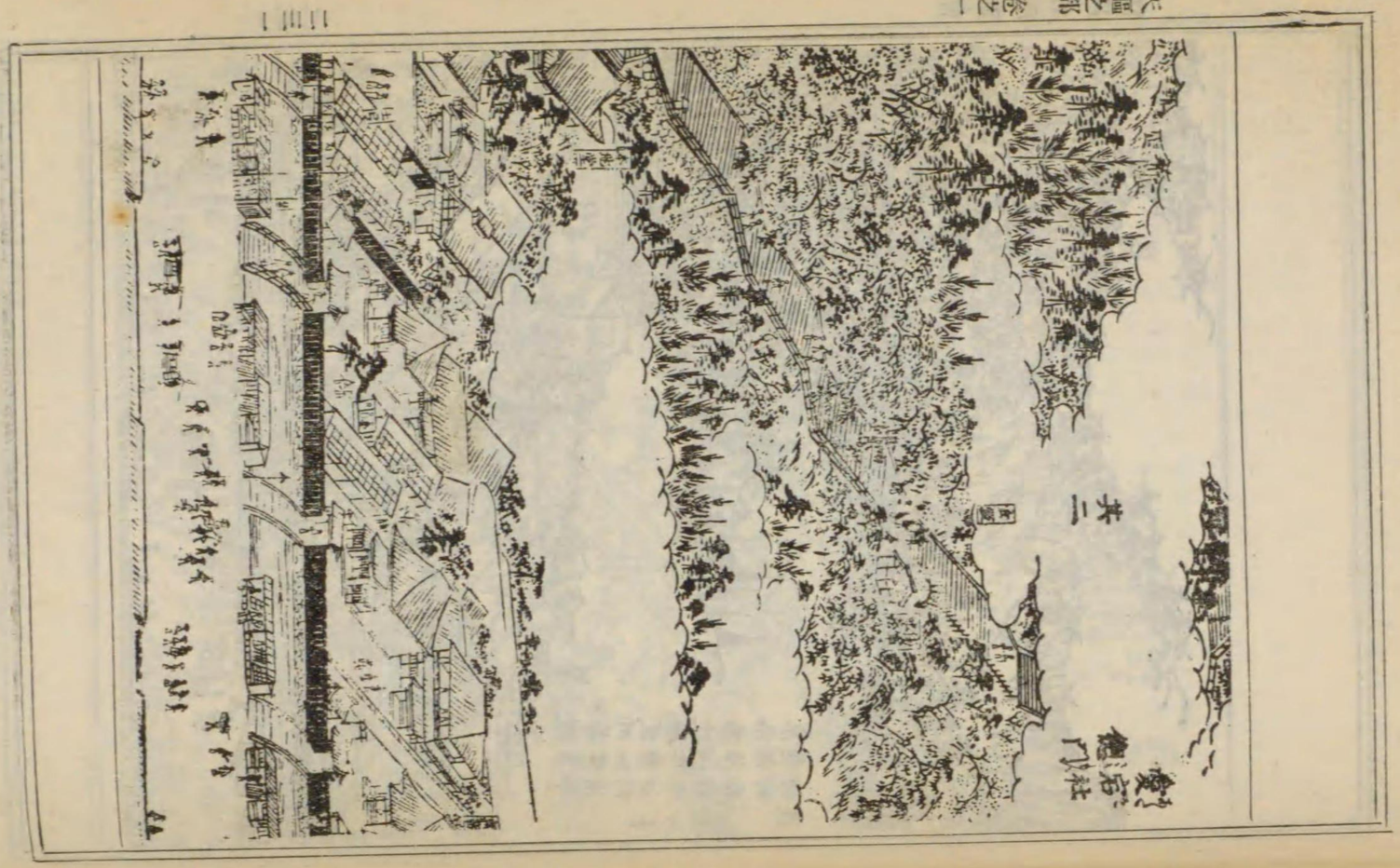
櫻川　同所愛宕の麓を、東南へ流るゝ溝川をしか名く。新著聞集に、昔虎の門の邊より、愛宕の邊まで、悉く田畑にて、畔に櫻樹幾株ともなくありし、其中を流るゝ故、櫻川といひしとあり。下流は、宇田川橋の方へ流れ、又三緣山に傍うて、金杉の川へ〻落會へり。

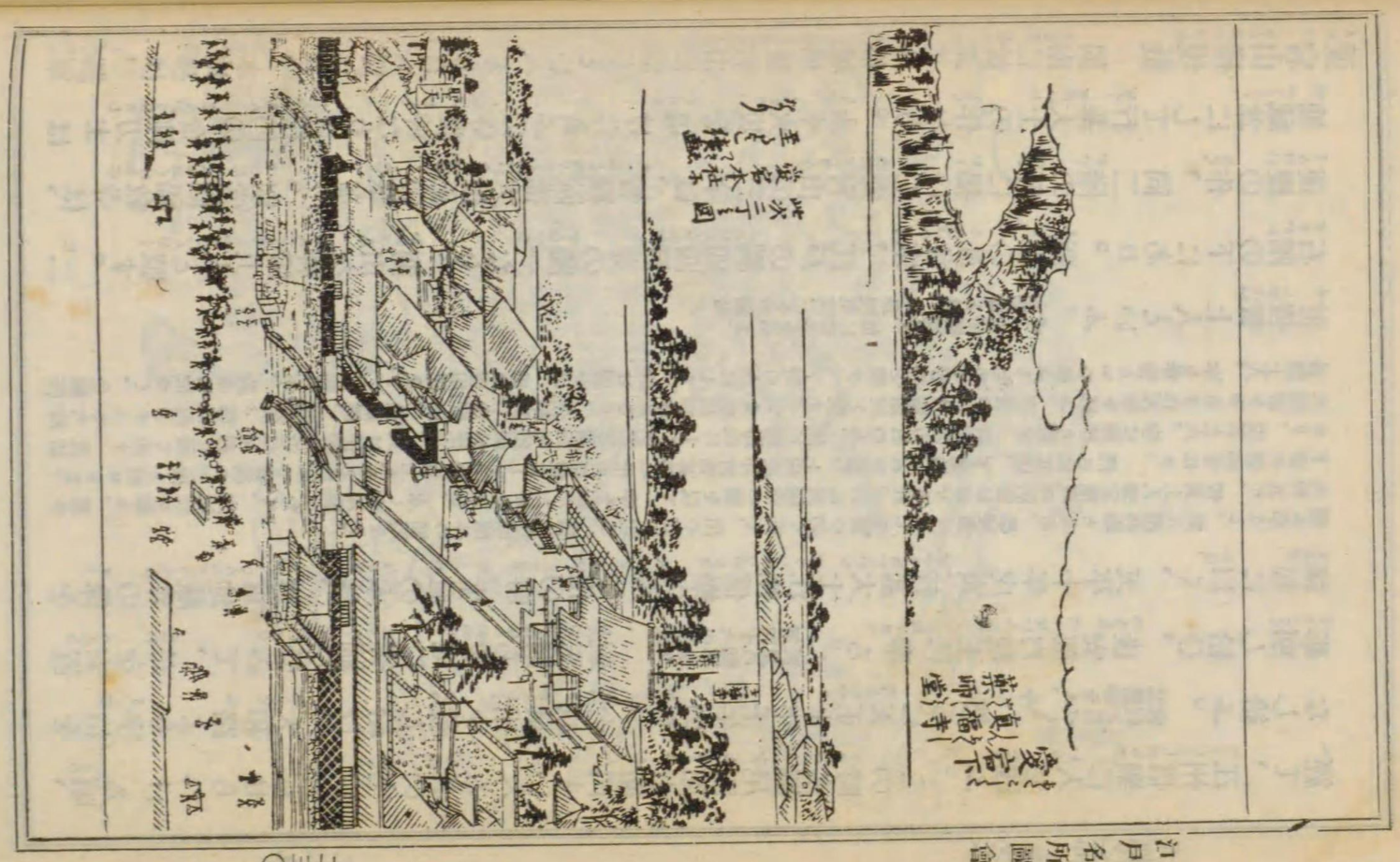
摩尼珠山眞福寺　櫻川の西岸に傍ひてあり。新義の眞言宗にして、江戸四箇寺の一員、智積院の觸頭なり。當寺本尊、藥師如來の靈像は、弘法大師の作なり。慶長の頃、甲州の領主淺野長政、當寺中興照海上人をして、自らの等身に、藥師佛の像を手刻せしめ、件の靈佛をば、其胎中に籠奉るといへり。毎月八日十二日は、緣日にして參詣多し。

愛宕山權現社　同南に竝ぶ。世俗城州愛宕山に同じといへども自ら別なり。本地佛は、勝軍地藏尊にして行基大士の作なり。永く火災を退けたまふの守護神なり。樓門の金剛力士は運慶の作、同二階の軒に掲げし愛宕山の三字は、智積院權大僧正の筆なり。別當圓福教寺は、石階の下にあり。新義の眞言宗、江戸の觸頭四箇寺の隨一なり。開山を神證上人と號す。二世俊賀上人といふ。四箇寺とは、湯島根生院、本所彌勒寺、當所眞福寺、並に當寺をいふ。

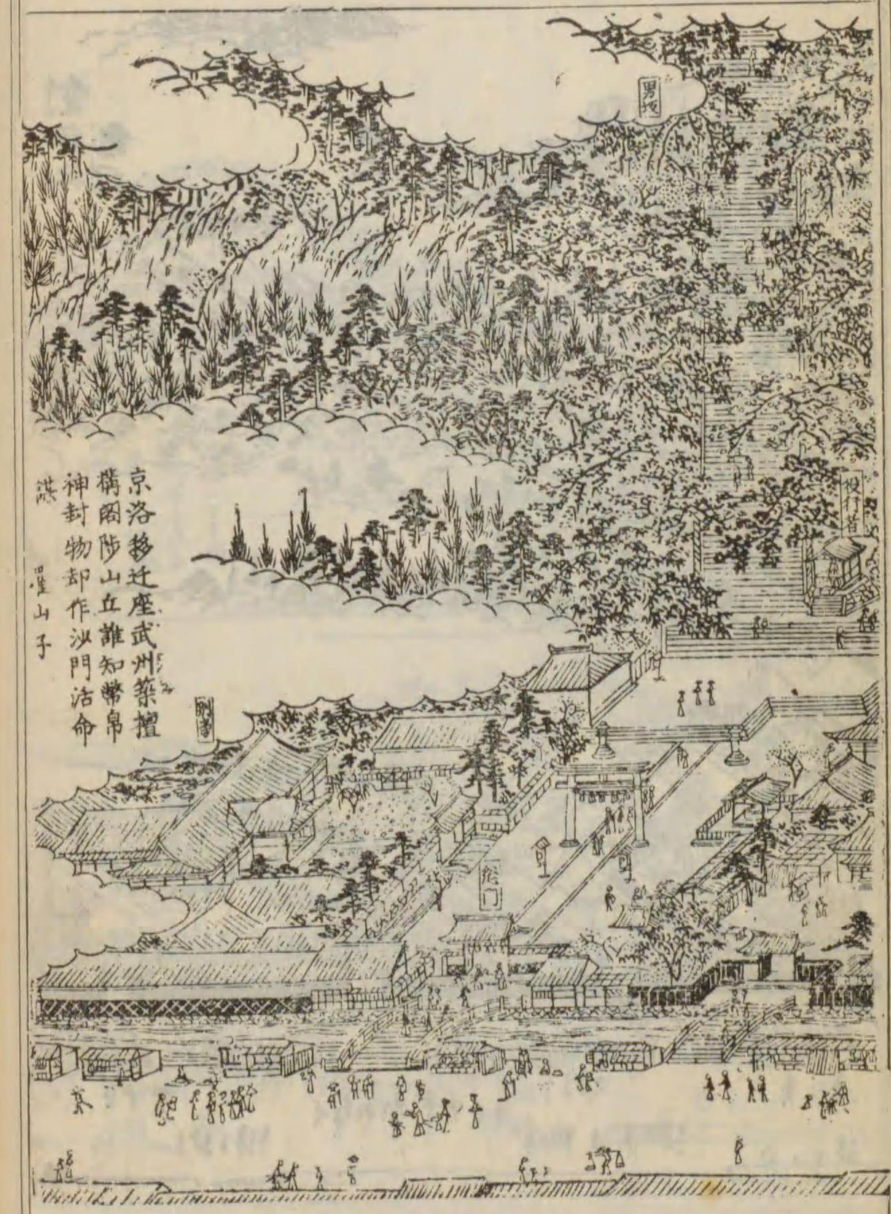
神證上人、字を春音といひ後あらためて春香と號す。下野の人にして、姓は黒谷氏、母は皆川氏なり。元和五年、鈞命に依つて、金剛院に退居をゆるされ天年を終ふ。春音の坊は遍照院と號す。いまの圓福寺是なり。金剛院、普賢院、滿藏院、鏡照院、壽桂院等すべて大院あり。俊賀上人、字は圓精と號す。野州西方邑の人、姓は越路氏にして宇都宮彌三郎頼綱が後裔、父は伊勢守近律神祠に祈て産す。其始下妻の圓福寺にす。然るに其頃、下總結城の元壽、上州松井田秀算等一世の豪俊にして、俊賀上人をあはせて新義の三傑と稱せらる。元和五年、俊賀上人愛宕權現の別當に命ぜられ、共に圓福寺の號を以て一字を闢かしめたまひ、永く大法幢をたて、大法鼓を擊ち、夏冬變る事なし。終に檀林職となる。學徒業々として雲の如く屯し、川の如く起る。實に江城檀林の權與なり。

緣起に曰く、天平十年戊寅、行基大士江州信樂の邊行化の時、當社の本地、將軍地藏尊の像を彫刻し給ひ、後安部内親王に奉る。第四十六代孝謙天皇の御事なり。親王則ち彼地に寶祠を營みて、是を安置なし給ふ。其舊跡をも、今宮村と名づく。然るに天正十年壬午の夏、台旗泉州を發し給ひ、大和路より宇治を經て、江州信樂に入せ賜ふ。この時多羅尾四郎右衛門といへる者の宅に舍らせられける頃、





江戸名所圖會



其三

山上愛宕山權現本社圖

あるじ此像を獻ず。多羅尾家譜にいふ、左京進光俊初て多羅尾と號す。其子常陸介綱知、三好若江の三人衆といふ。其子四郎兵衛光綱、江州信樂を領すと云々。多羅尾は四郎左衛門にあらず、四郎兵衛光綱入道道賀の事なるべし。其節同國磯尾村の沙門神證といふを供せられ、この靈像を持して東國に赴き給ふ。爾しより御出陣毎に、神證をしてこの勝軍地藏尊を祈念せしめらる。遂に慶長八年癸卯の夏、台命によつて同庚子年、石川六郎左衛門尉當山を闢き、假に堂宇を造建したまひ、其後同十五年庚戌、本社を始め悉く御建立有り、元和三年丁巳、同國豐島郡王子邑に於て百石の社領を附し給ふとなり。惣鹿子といへる冊子に、此地は元櫻田の村民、内藤六郎といへる人の宅地なりしを、沙門春音慶長庚子の御出陣に、勝軍の法を修せし地にて、凶徒御征伐ありしによりて、當社を御建立ありしと云々、又同書に慶長八年九月廿四日、貴賤の參詣を許さるゝとあり。江戸名勝志同名所ばなし等に、始め山城の愛宕を遠州鳴子坂に勸請し、夫より駿州宇津屋に移し、後又爰に安置す。慶長の頃本多美濃守の家臣、都築某といへる人の勸請なりとあり、此說圓福寺に云ひ傳ふる事なく、證とすべからず。按ずるに、此山の地主神は毘沙門天なりとて、今も本社の相殿に安置す。毎歲正月三日毘沙門の使と稱する舊禮の式あり。其式畫上に詳なり。按ずるに、當寺開山俊賀師は、始め野州にあり。野州邊ことゝくこの強飯の式ありて、世に所謂日光の古式に准ろて、當寺に行ふものも、恐らくは俊賀上人より始るならん歟。

抑當山は懸岸壁立して空を凌ぎ、六十八級の石階は、疊々として雲を挿むが如く聳然たり。山頂は松柏鬱茂し、夏日といへどもこゝに登れば、涼風凛々としてさながら炎暑をわする。見落せば三條九陌の萬戸千門は、蔓をつらねてところせく、海水は渺焉とひらけて、

愛宕山田福寺毘沙門の使八毎歳正月三日ハ修行に女坂の上愛宕やしきに居る若肆のあるゝ日例ゆえこれを勤むこの日寺主を始とし一支院ゆゑも出頭して其次第ゆゑ座を儲け強飯を餐も半ハ至る頃此毘沙門の使と称する者麻上下を着し長き太刀を佩雷槌を差添又大なる飯びつを杖ハ突祝春の飾り物みて兆を造り是を冠る相随よりの三人共ハ本殿より男坂を下り田福寺ハ入て此席ハ至り組机ゆゑりて行飯びつをりて三度魚板をつきゆゑ

一ハ曰、

まろり出る者ハ毘沙門天の使院家役者ハをしめ寺中の面〻長屋の所化も勝手の

諸役人ハ至る迄新参ハ九杯甘参ハ七杯此飯ハ

もゝ〻

おのゝ

らんハ

もつて八此

杓子を以て

返盃いたゞく

時其一膳ゝ

りの巻て曰吉

のゆゑりまゝ

もゝ

云〻ゝ八

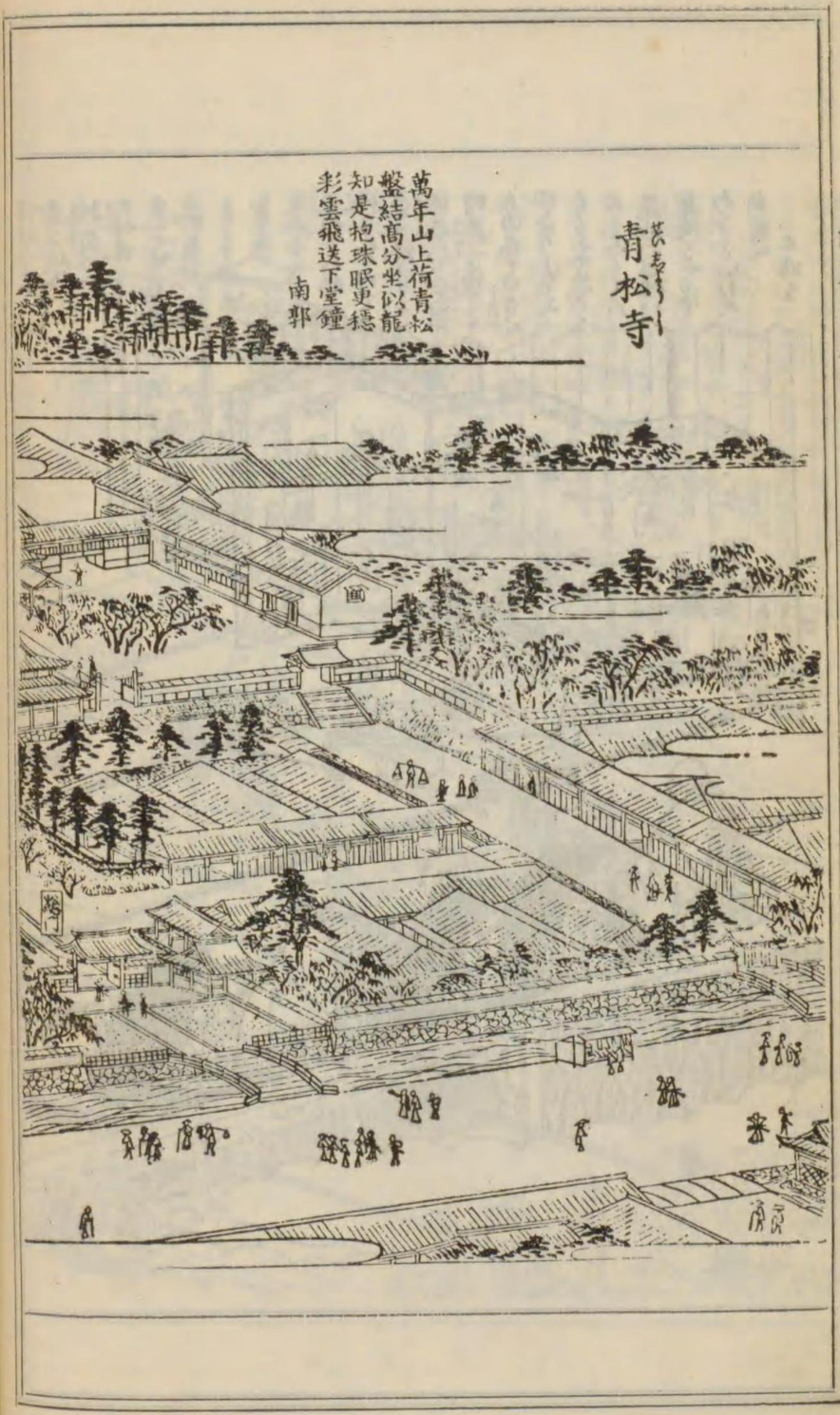
毘沙門の使ハ

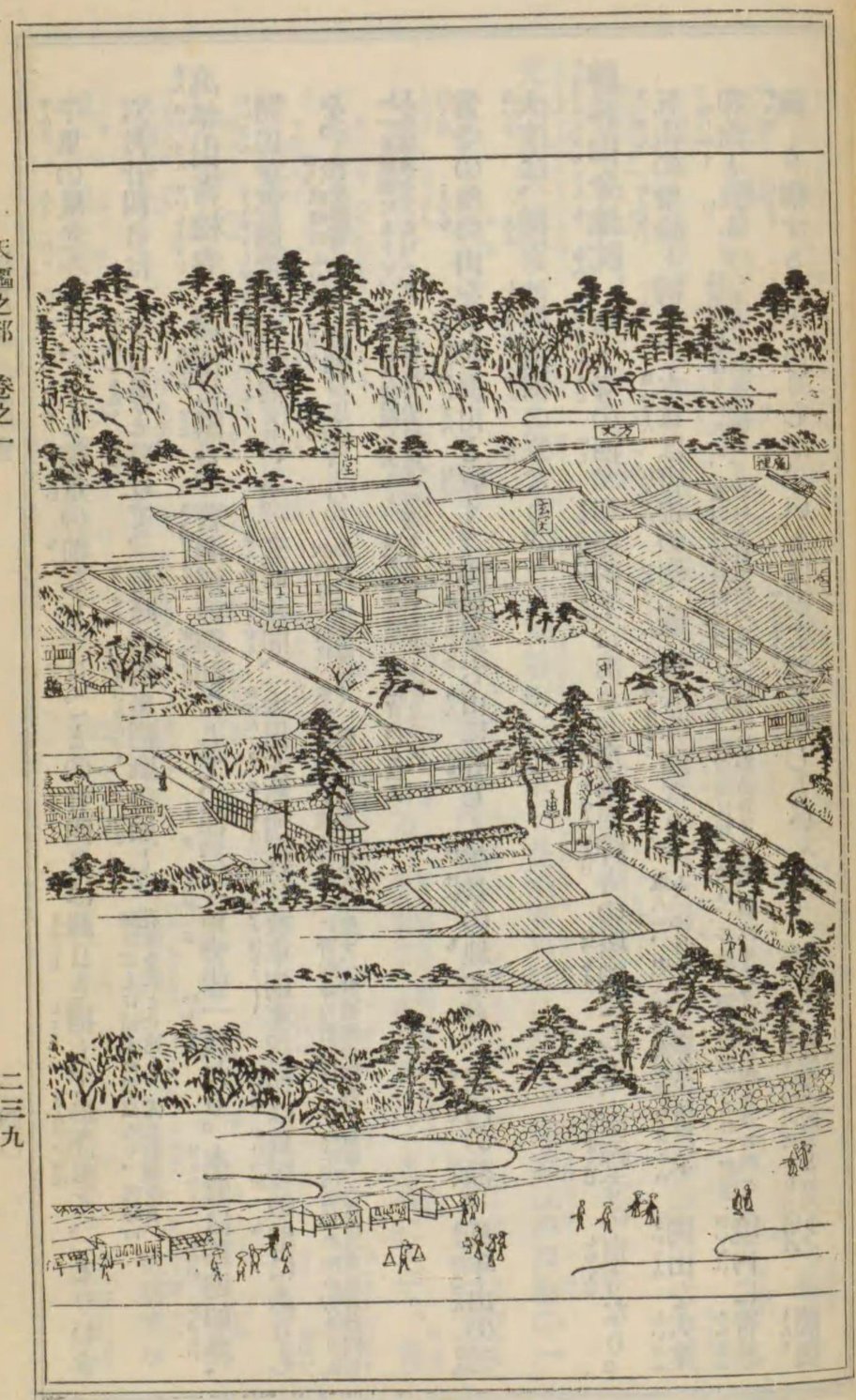
あゝといひて

立ゆる

青松寺

萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭





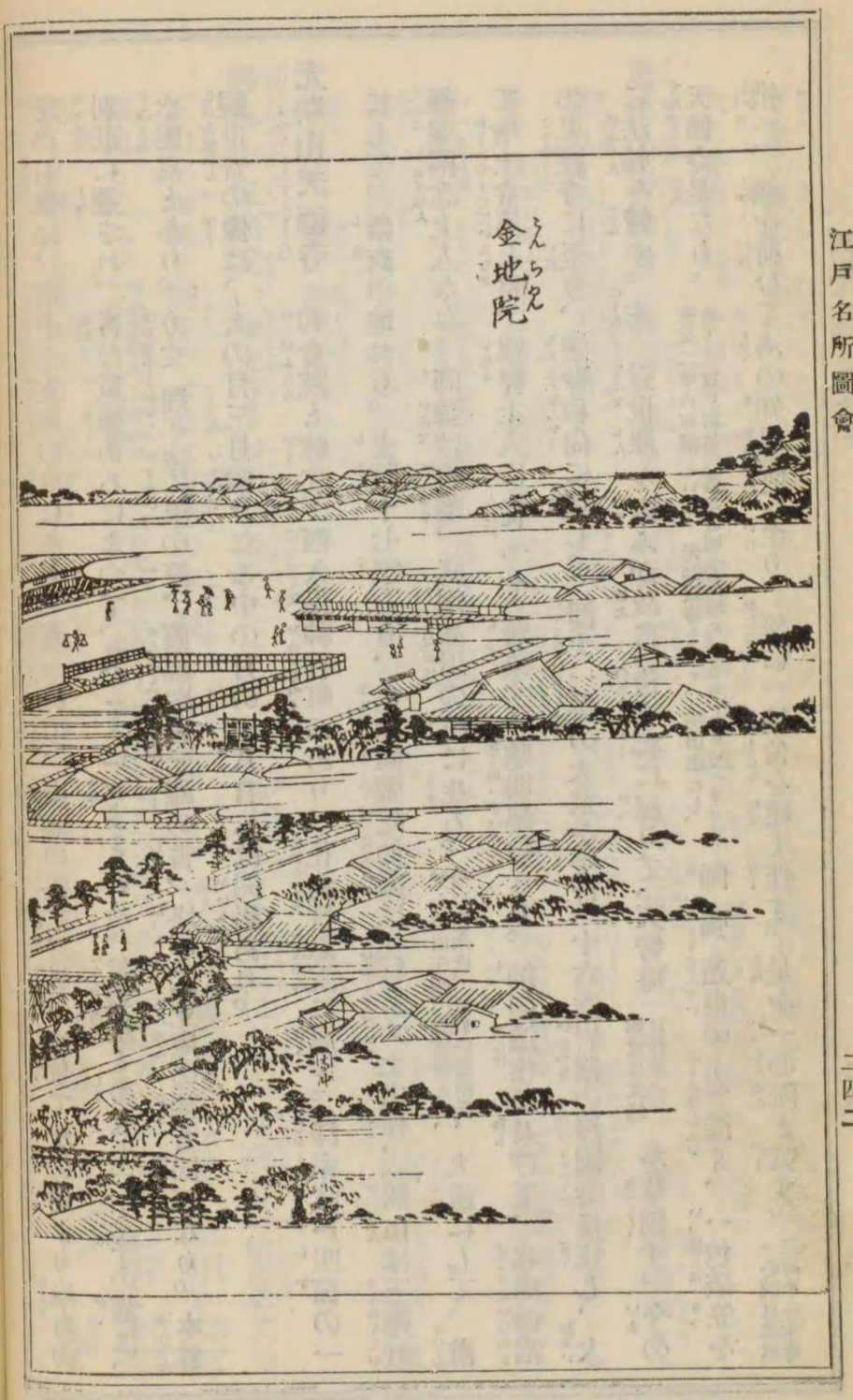
千里の風光を貯へ、尤も美景の地なり。月ごとの廿四日は緣日と稱して參詣多く、とりわき六月廿四日は、千日參と號けて、貴賤の群參稻麻の如し。緣日ごとに植木の市立ちて、四時の花木をこゝに出す。尤も壯觀なり。

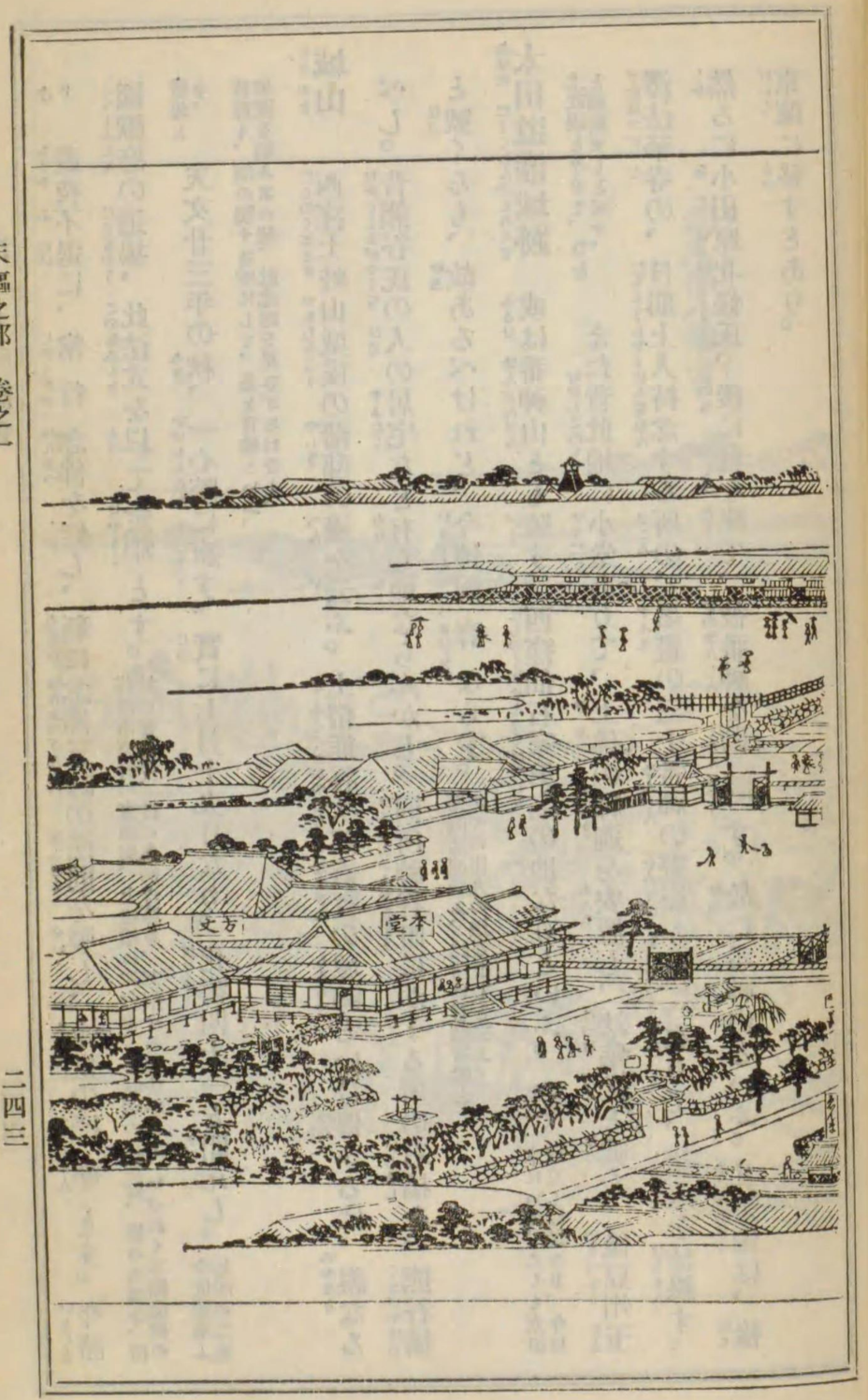
萬年山青松寺　同南に隣る。曹洞派の禪刹にして、江戸三箇寺の一員たり。本尊は釋迦如來、開山を雲崗俊德大和尚といふ。文明年間、太田左衞門佐持資草創す。初は貝塚の地にありしを、後或は云ふ天正　此地に遷さる。故に今も俗に、貝塚青松寺と稱せり。一に青松寺の舊地は、今の平川馬場の南の方なりと云々。南向亭云く、青松甲斐と云ふ人草創す。其舊跡は糀町の貝塚、當持玉虫八右衞門といへる屋舗にありて、彼墓を甲斐塚と云ふと。菊岡沾凉は、青松官内と云ふ人の建立なりといへり。又當寺に太田道灌の塚ありといへども詳ならず。

當寺の後の山を、含海山と號く。眺望愛宕山に等しく美景の地なり。惣門の額、萬年山の三大字は、閭の沙門道霈の筆なり。

勝林山金地院　增上寺の西、切通の上にあり。京師南禪寺の塔頭にして、南禪寺の宿寺なり。五山の僧錄と稱す。本尊は唐佛の聖觀世音菩薩なり。或人云、宋人陳和卿が作なりといふ。毎月十八日、觀音懺法修行す。開山を大業和尚と云ふ。其頃碩學なりければ、五山の僧祿司に命ぜられ、評定衆に加へ給ひ、寺社の訴を決斷せしむ。都留の毛衣と云ふ草紙に、古は寺社裁許の事、金地院はかちひけるが、寶永中より武家の職となる云々。境内に青葉楓と稱する古木ありしが、いまは燒亡びてなしといへり。此木も昔當寺御城内にありし頃の物にて、後此地へ栽るといへり。閻魔王の石像は、塔中二玄庵の前にあり。寶永の頃、南部の領主、靈示に依てかの地より麻布の別莊に遷され、再び威靈あるによつて、又こゝに安ずといふ。金地院と書せし三大字の額は、水雲寫とあり。方丈同く滓冥の筆、薦福殿岩元雄の書、塔中二玄庵の額も同筆なり。本尊觀世音の像は、大の月三月續きたる中の月の十八日には開帳あり。

光明山天德寺　和合院と號す。西久保神谷町にあり。花洛智恩院に屬す。淨家江戸四箇の一にして、紫衣の地たり。支院十七宇あり、本尊阿彌陀如來は、行基大士の作、開山は三蓮社緣譽稱念上人なり。師諱は吟翁、武州品川の邑に生る。父を藤田左衞門尉道昭と云、母は富永氏、或は云富田氏、九歲にして、甫て增上寺第七世、親譽上人に從つて薙染す。聰明絕倫なり。師の遷化に及びて、北總飯沼の弘經寺に至り、鎭譽和尚に謁して、淨土一乘の大戒を受け、十六歲岩附の淨國寺に住し、大に法輪を轉ず。志猶世塵を厭ふが故に、後古鄕に歸りて、天智庵　知或は又地に作る。を草創す。今の天德寺是なり。天文二年の草創といふ。先師親譽を以て、開山祖とし、自ら二世に居る。舊地は西丸御城の邊なりしといへり。師彌遁世の志深く、一包破笠を携へ、錫を荷ひて洛の知恩院に至り、傍に一精舍を建て住す。是を一心院と號す。一心院は念佛三時の一本寺


金地院


本堂
文方

り。晝夜不退に、常行念佛を修し、新に念佛三昧の法則を製し、永世の標準とす。今諸國厭悠の道場、此法式を以て定矩とす。（花洛市原野の專稱庵、上嵯峨の稱念寺、下嵯峨の正定院、桂の福樂寺、田井の會念寺、淀の念佛寺等を、草創する事少かちず。いづれも不斷念佛の道場とす。）天文廿三年の秋、一心院に寂す。實に七月十九日なり。化壽四十一と聞えし。（今世間用ふる所の二連數珠も、師の製する所にして、是を貫輪といふ、佛號を唱ふるの徒、此念珠を用ひざるはなし。）

城山　西窪土岐山城侯の藩邸の邊を云ふ。土俗熊谷次郎直實の城跡といひ傳ふるは、誤なるべし。昔熊谷氏の人の居宅など有し地ならんかし。同所神谷町にかゝる所の石橋を、熊谷橋と號くるも、故あるべけれど、今傳說詳ならず。（菊岡沾凉云ふ、此所は昔麻布殿とかやの出丸の地なりしと云ふ。）

太田道灌城跡　或は番神山とも號す。西窪仙石家第宅の地なりといふ。（紫の一本にいふ、こゝも太田道灌、取立し城地なり。今は土取場となりて、ひたと堀崩せしと云々。）また昔此地に小堂ありて、土佛の釋迦を安置し、法華堂と號く。後豆州玉澤法華寺の、日朗上人持念する所の、墨畫の三十番神の畫影を携へ來りて、諸人を結緣す。然るに小田原北條氏、後に社を建て、彼番神を勸請す。故に番神山といふ。其畫像は、後京師に移すとあり。

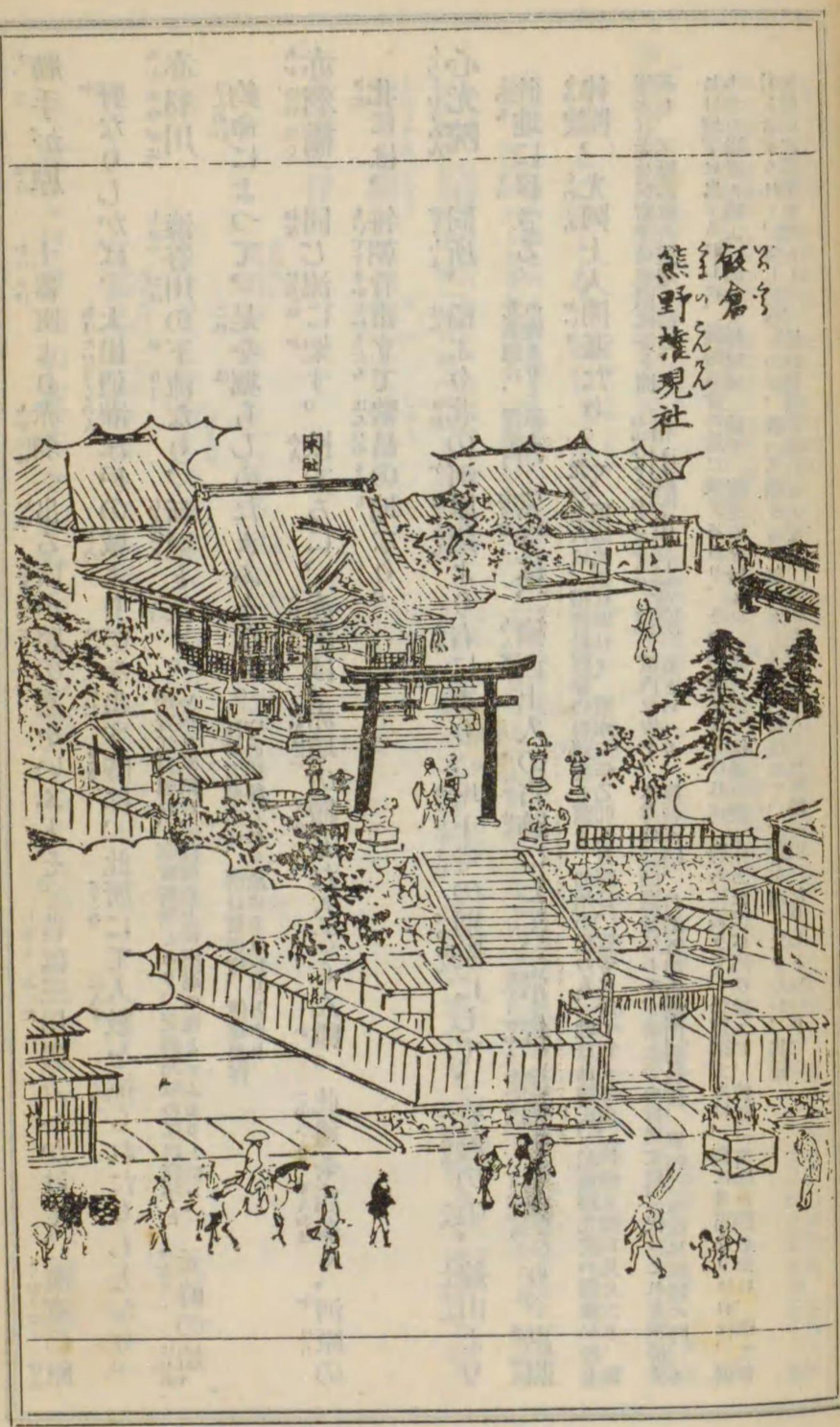
西窪八幡宮　同所天德寺裏門より、南の方三町程、飯倉町一丁目にあり。別當は天台宗にして、東叡山の末八幡山普門院と號す。西窪の鎭守にして、旅所は小山にあり。相傳ふ、當社八幡宮は、寛弘年間の鎭座なりといへり。慶長五年關原御一戰の時、崇源院殿より、其軍御勝利と、御安全との御願書をこめられ、別當秀圓御祈禱修行はたして其奇特ありければ、寛永十一年甲戌二月、終に宮社御建立ありしといへり。祭禮は毎歲八月十五日なり。

飯倉　西窪の南を云ふ。此地は往古伊勢太神宮の神厨の地たりし故に、其御饌料の稻を、收めし倉を飯倉と唱へ、いつしか地名に呼けるなるべし。

條家の所領役帳に見えたり。同書に、飯倉の內櫻田とあれば、往古飯倉の地の廣かりし事しるべし。また駒込吉祥寺に、藏する所の北條家人、遠山左衞門太夫政景、元龜二年、江戸にて五十五貫六百八十五文の地を、彼寺に寄附する狀に、飯倉の地名ありて、此中三貫三百文は、以前より鉦輪太藏が寄附せし地なりとあり。猶前の芝神明宮の條下にも、神鳳抄、東鑑等の書を引き、據とす。照合せて見るべし。

熊野權現宮　飯倉町にあり。或人云ふ、養老年間芝の海濱に、勸請ありしを、遙の後今の地に移さるとぞ。別當は、三集山正宮寺といふ。天台宗にして東叡山に屬せり。

永祿の頃、小田原北條家の臣、大草左近太夫、飯倉彈正忠、太田新六郎、島津孫四郎等、此地を領せしよし、北禮を執行す。毎年六月朔日より、三日まで祭



勝手が原　土器町より赤羽へ出る廣小路の邊をいふとぞ。昔は三田の方へかけて、廣寞の原野なりしかば、太田道灌江戸の城より勢を出す時は、此所にて人數を揃られたりしとなり。

赤羽川　澁谷川の下流なり、新堀と號く。延寶江戸圖に、麻布新堀とあり。元祿開板の江戸鹿子といへる草紙に、此河の上に赤羽の池と云ふありと云々。元祿の始、江戸名勝志に、溝口信濃守、伊達美作守の兩侯これを承はられたりとあり。鈞命によつて、是を堀らしめたまふとなり。

赤羽橋　同じ流に架す。按ずるに、赤羽は、赤埴の轉じたるならん歟。此邊茶店多く、河原の北には、毎朝肴市立て繁昌の地なり。

心光院　同所、橋より北の河原道より右にあり。增上寺の別院にして、寶曆の頃、緣山より此地に移さる。其舊地は、涅槃門の邊なりと云ふ。當寺は、鎭西上人の古跡にして、常行念佛の道場なり。惠照律院、光阿上人開基たり。光阿上人は、横運社縱譽心岩頑夢と號す。加州小松の人、姓は加波氏、越前淨光院の隨流に投じて、剃染流頓に嗣法す。寶永三年乙卯八月晦日、當寺に於て寂する由、傳燈系圖に見えたり。加州大日寺及び當寺頓惠照院等を開基し、不斷念佛の道場を刱む。

布引觀世音菩薩　境內に安ず。本尊は馬頭觀音にして、增上寺の行者文周、代々これを奉持する日城下に出でられしに、熊野直者の馬に乘ずるあり。その馬駿足なりければ、農人に乞うて、長重乘ずるに、實に名馬なりければ、則ち名を道者と唱ふ。終に大將軍家へ獻ず。駈を追せ給ふに、布一端を後輪の鑣に兩方に結び附け給ふに、彼布一文字に飜る故に、改て布引と命ぜられて、愛し給ひしかば、彼の馬斃するの後、增上寺境內に埋めて、石塔を建てたりしが、其後又件の石塔を本尊として、馬頭觀音に崇むるとなり。寶曆の頃、寺と共に當地へ引れたりしといへり。

竹女水盤　新著聞集に云ふ、江戸大傳馬町佐久間勘解由が召仕の下女たけは、天性仁慈の志深く、朝夕の飯米、已が分は、乞丐人に施し、其身は水盤の角に、綱を置て、洗ひ流しの飯をうけ、其溜りしものを、自らの食料とす。常に稱名怠る事なく、終に大井に掛けてありとみゆ。件の水盤より、光明を放ちたりし事は、當寺の緣起の中に詳なり。

芝浦　本芝町の東の海濱をいふ。芝口新橋より、南田町の邊迄の惣名なり。上古は芝を竹柴の郷といひしを、後世上略して、柴とのみ呼來れり。又文字も芝に書改めたりとぞ。更級日記に、竹柴の郷といふ事を擧げたり。猶三田濟海寺の條下に詳なり。南向亭云く、芝といふは、彼地の古老の說に、海岸近き所に、柴を建て、海苔のかゝるをとる故に、木の小枝を柴といふより、地名によびしが、後芝に改め作る歟と云々。按ずるに、此說是ならず。海苔をとるは、元淺草の邊のみにて、昔は今の如く品川にはなかりしなれば、古へにいはんは理なきに似たり。此地を雜魚場と號け、漁獵の地たり。此海より產するを、芝肴と稱して、都下に賞せり。

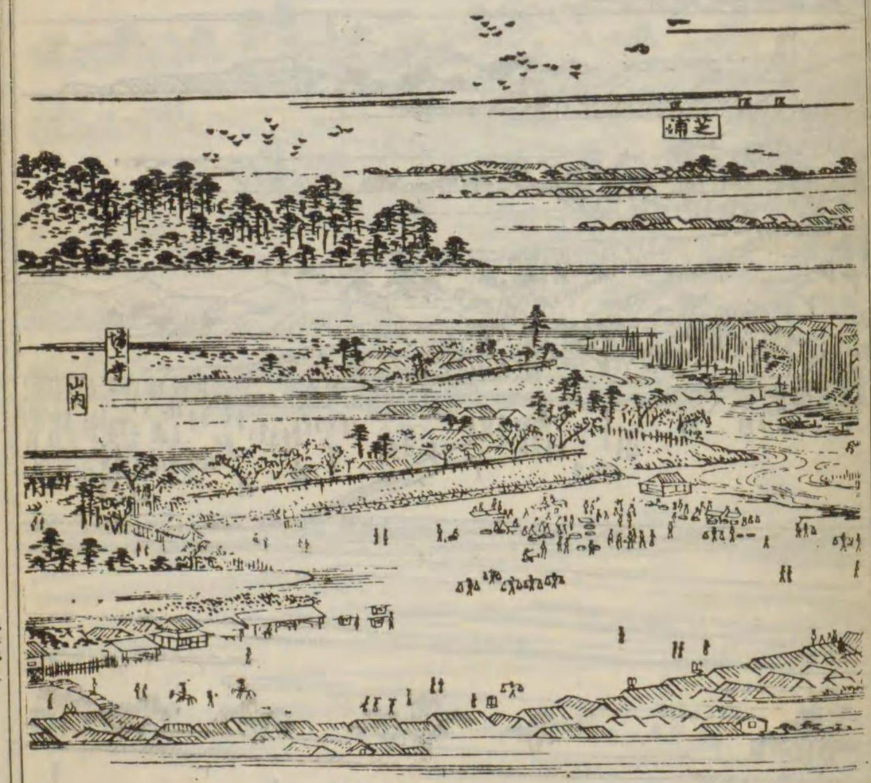
平安記行

文明十あまり二年の頃水無月のはじめつかた土さへ
さけてとか旅人のぬしのものせし避暑の床をはなれ
て都にまうのぼりぬ　中略　芝といふ所を過るとて
露しげき道の芝生を蹈みちらし駒に任するあけくれの空

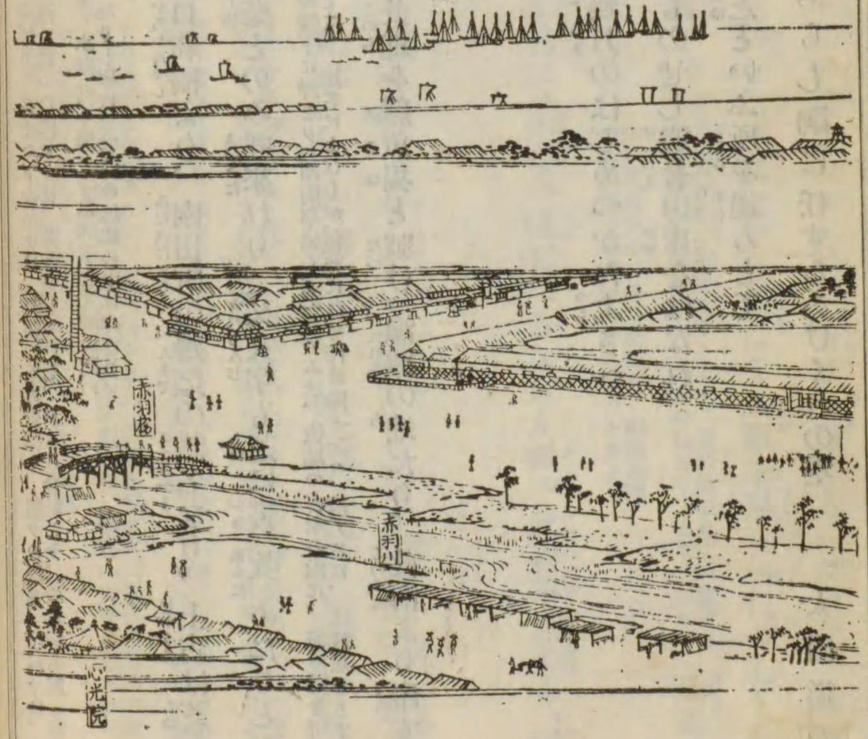
太田道灌

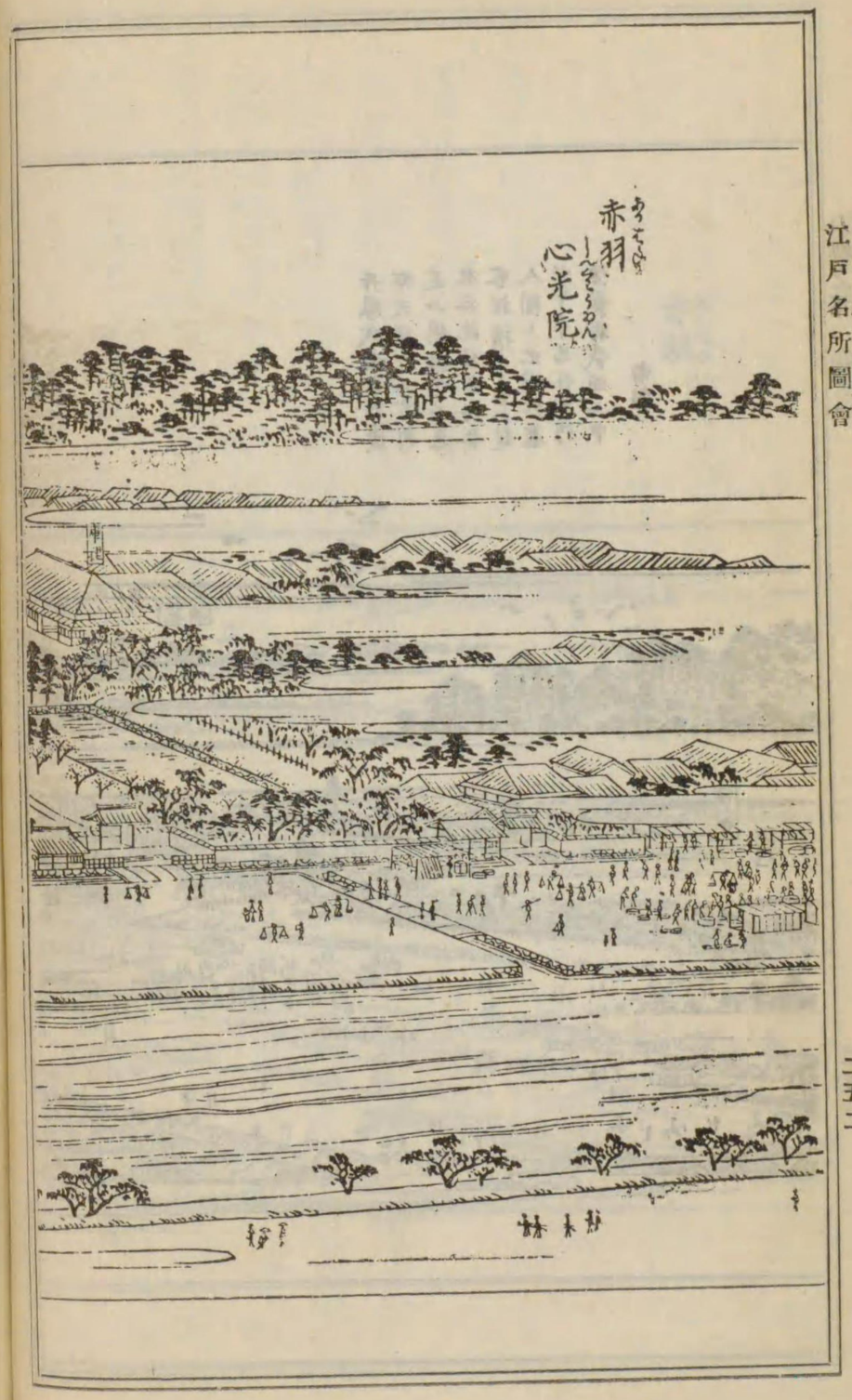
丹鳳城南赤羽濱
郊天晴近五雲新
芝山樹擁銀臺色
麻谷流侵碧海春
客裡攜家羨白髮
人間ト地避紅塵
少年車馬休相汚
沐罷聊戴頭上巾

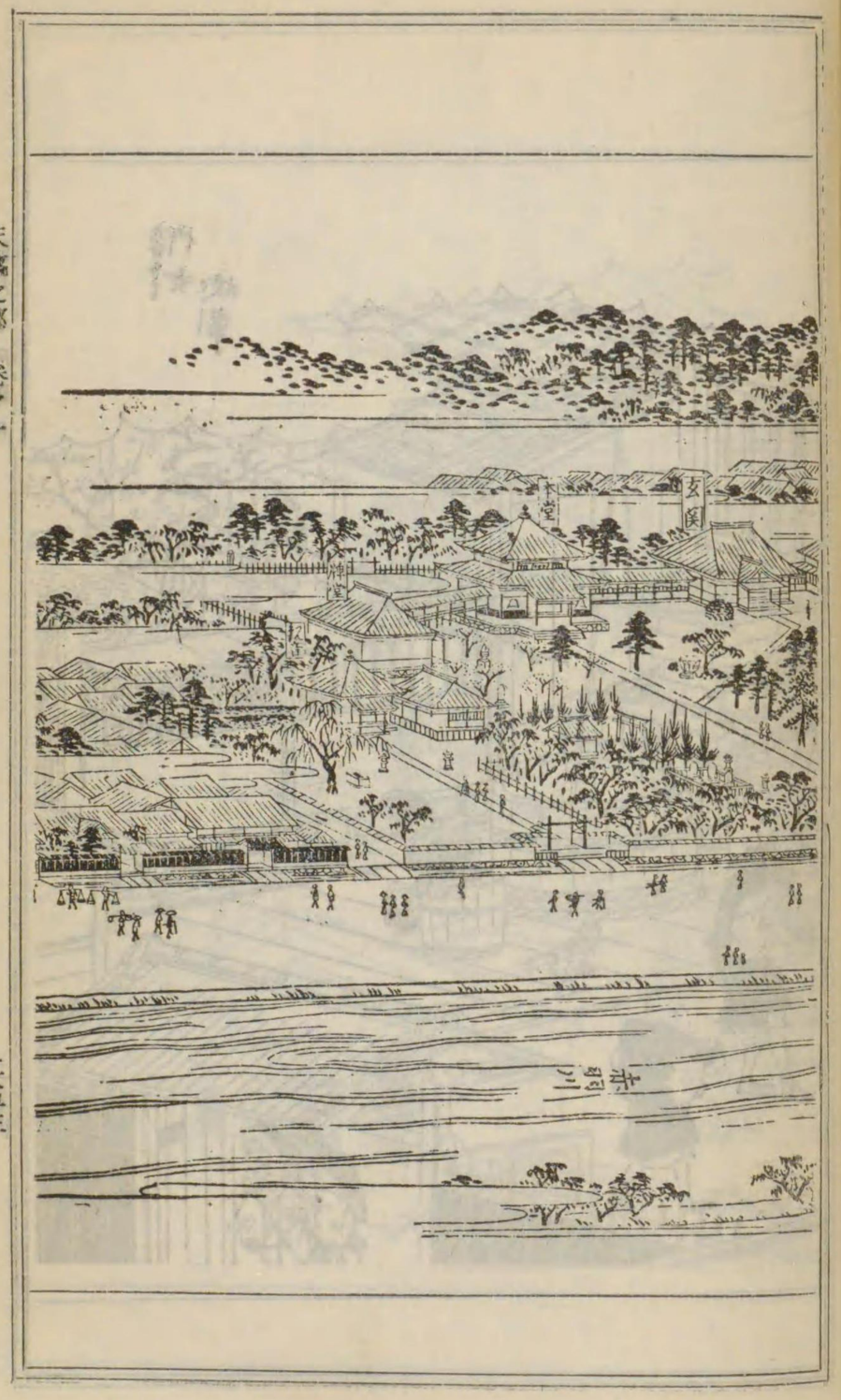
南部

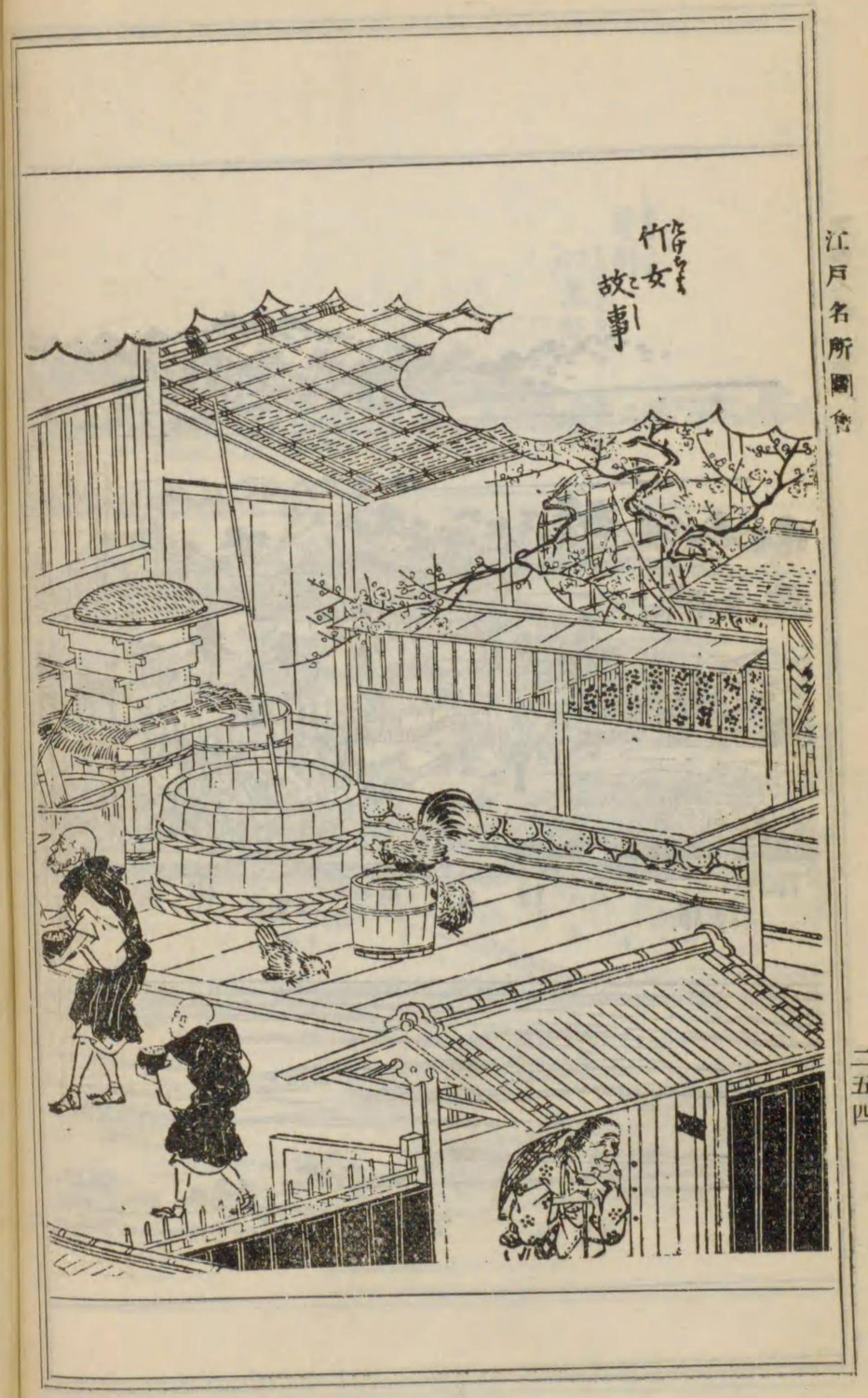


赤羽




赤羽
心光院


本堂
玄関


修行者と女の故事

回國雜記

芝の浦といへる所にいたりければ、鹽屋のけぶりうち靡きて物淋しきに鹽木はこぶ舟どもを見て

やかぬより藻汐の煙名にぞ立つ舟にこりつむ芝の浦人　道興准后

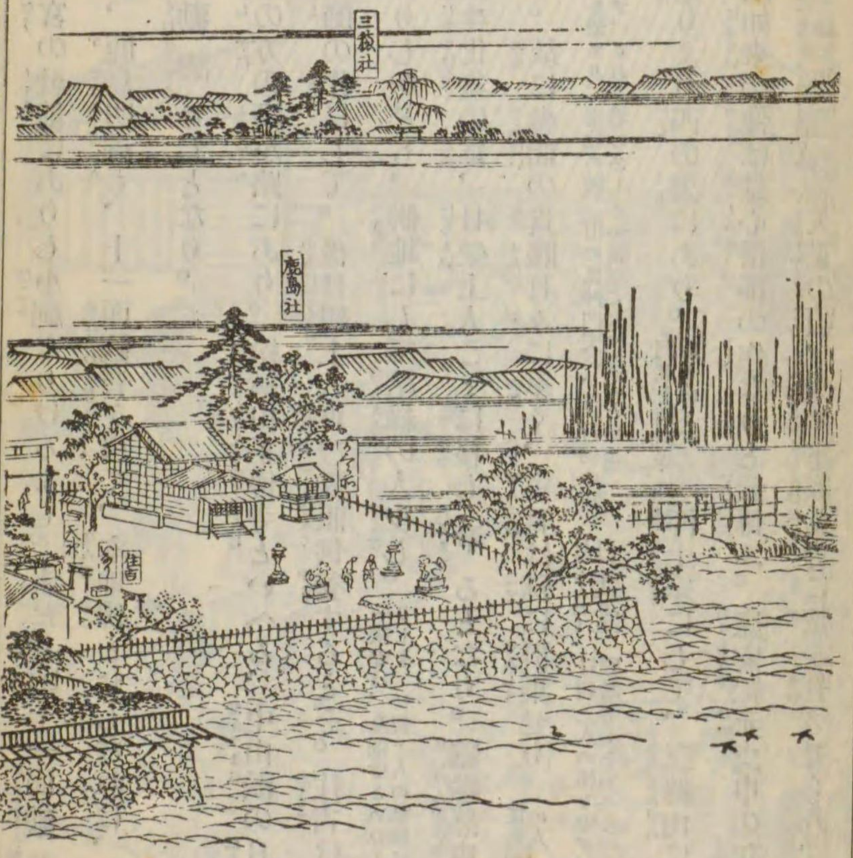
此浦を過てあら井といへる所にて云々

江戸にて

芝といふものゝ候ふ夏ざしき　梅翁

御穗神社　同所本芝通りより、西の横町にあり。本芝の産土神にして、祭禮は三月十五日なり。別當は正福寺と號す。天台宗にして、東叡山に屬す。傳へ云ふ、往古駿河國三穗の海人、此浦に來り住す。故に古鄕の御神なればとて、文明十一年庚子のとし、こゝに當社を勸請せしとなり。祭神御穗津彦、御穗津媛等の二神なりといへり。土俗當社を以て、痘瘡の守護神とし、祈願するもの多し。

鹿島神社　同所海濱にあり。別當は御穗神社に相同じ。祭禮も又同じく三月十五日なり。土人傳へ云ふ、寛永年間、此浦に一の小祠漂流して汀に止るあり。漁人これを揚て、其本所



を尋るに、常州鹿島大神宮の社地にありし小祠なりけるよし。また其頃十一面觀音の木像、同じ海汀に流よりしかば、鹿島明神も、十一面觀音を以て、本地佛とせしなれば、是にもとづきて、當社の御神を、勸請せしとなり。

毘沙門堂　金杉の通り東の方の横小路にあり。松林山正傳寺といへる、中山派の日蓮宗の寺境にあり。本尊は傳教大師の作にして、後日親上人再び點眼供養するとぞ。往古は攝州梶折邑一乘寺といへる寺にありしかども、僻地にして結緣の人少し。一乘寺は、全仙寺といひし眞言の密場なりしを、日親上人の弘教に歸して、本化の宗に改む。依て寛文の頃、衆生化益の爲、日榮上人こゝに移し奉るとなり。靈驗感應の著しき事は、寺記に詳なり。故に參詣の貴賤日々に多く、寅日は殊に群集せり。正月初の寅日、參詣の人、大方は芝の神明宮の門前にて、燧石をもとめて歸る輩あり。洛北の鞍馬山の毘沙門天へ、正月初の寅日、詣する輩燧石を買て、家土産とす。これなを奇おろしといふ。これに準ふといふ。

田中山西應寺　金杉の通りより西の裏にあり。門前を西應寺町と呼ぶ。日親堂　日親上人の像を安ず。靈驗著しといへり。

院三宇あり。本尊阿彌陀如來の像は慧心僧都の作なりと云傳ふ。應安紀元戊申の年、明賢上人草創す。明賢上人は應永五年戊寅、黃鐘十日に遷化す。年八十六歳といへり。天正の頃、大將軍家當寺に駕を枉させられ、寺領御寄

毎月寅の日賣買繁盛

金杉

毘沙門堂

奉獻毘沙門天王

附ありしかば、學徒朝夕の助寛にして、學道盛なり。又當寺十六世存問和尚、一宗の碩學にして、當時法門の龍象、學道の麟鶴なりければ、大將軍家深く崇敬ましましけるにより、台命に依て、一夏の間法幢を建て、一百餘人の衆僧に、宗風の法意を示す。すべて念佛三昧、他力往生のをしへ、日々に大いに弘れり。

三田　或は御田及び箕多に作ると。古神領に寄せられし地を、御田と書きたるよし、古老の說なり。

和名類聚鈔云　荏原郡御田云々。

武藏國風土記殘篇云　荏原郡御田郷。或箕多。

公穀三百六十七束。假粟百三十九丸。貢松竹蕨□等。亦有諸禽。允大膳或木工寮。云々。

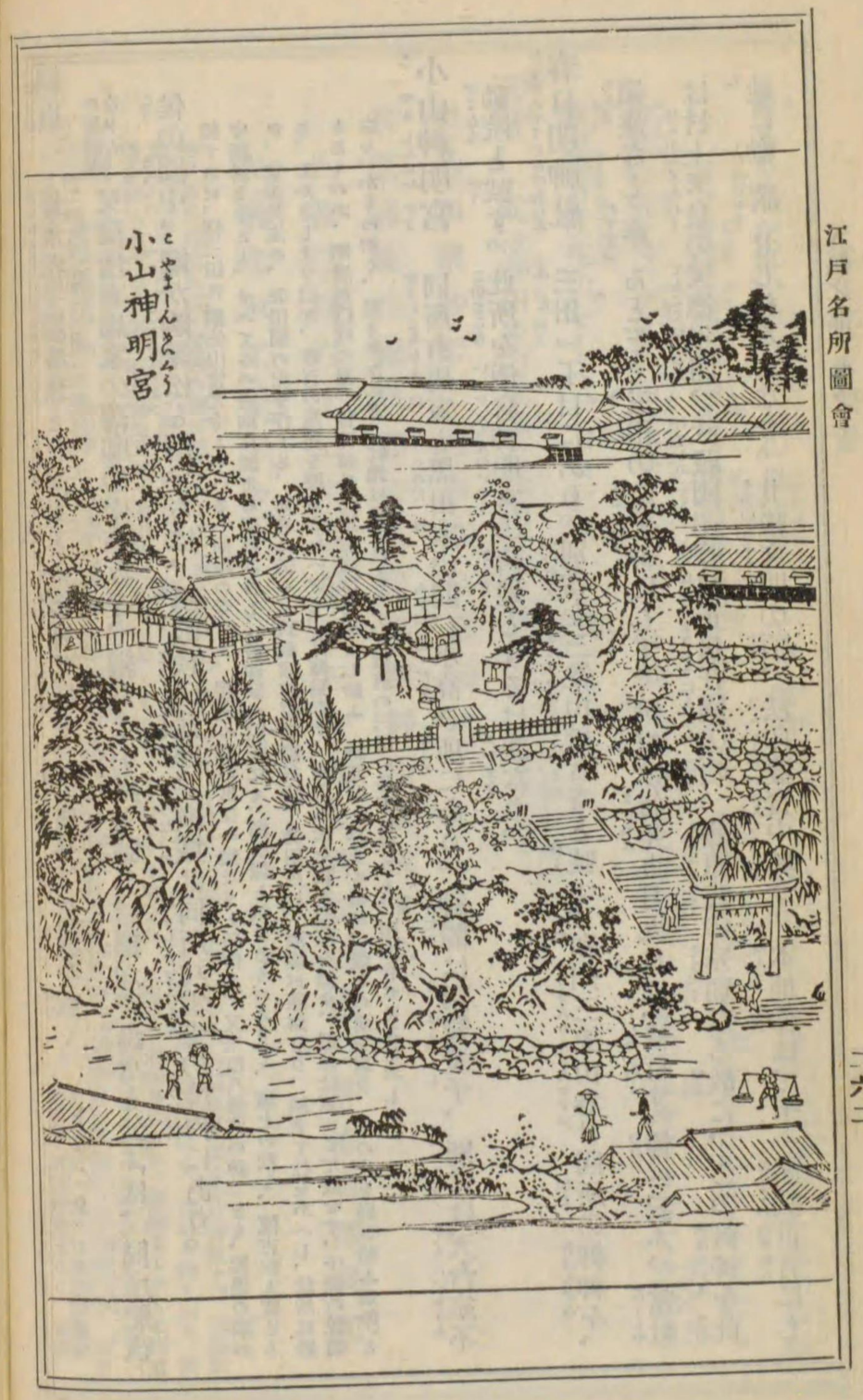
按ずるに、此地を以て渡邊の綱が舊跡とするは誤なるべし。或人云ふ、此地は三田家の舊領にして、三田氏累世こゝに居住す。三田家譜に、三田三河守其子駿河守綱勝、武州三田に住す。代々綱といふ字を名とす。依て後人渡邊の綱と混じ交へて、誤れる歟と云々。渡邊系圖に云ふ、「源次充武藏國足立郡、笠田郷に配せらる」とありて、三田とする事なし。三田笠田同訓なる故に、混雜してかゝる附會の說をはまうけたりしなるべし。鵞峯文集に、笠田園の記と號するものありて、此地を渡邊綱が舊跡とせらる。其文はこゝに畧せり。永祿二年小田原北條家の所領役帳に、太田新六郎知行の内に、三田内壽樂寺分、同笠輪寺屋分。又島津彌七郎知行、三田坂間分、及中村平次左衛門知行三田高福寺分。本住坊寺領に、同所にて惣領分の地等を配すと見えたり。

綱坂　同所松平隱岐侯と會津家との藩邸の間を、寺町へ下る坂を號く。惣鹿子に渡邊坂とあり。菊岡沾凉云ふ、此所は笠田武藏守の居城跡なりと。又同所有馬家の藩邸の南の坂を、綱が手引坂と號く。綱が產湯水と云ふは、同所肥後侯の園中、綱が駒繋松と稱するは、隱岐侯の藩邸、綱塚は同所功雲寺の境内にあり。

按ずるに、笹三田に、綱生山當光寺といへる一向派の寺あり。渡邊の綱が出生の地なりと云傳ふ。又三田八幡宮の神祠をも、渡邊の綱が守護神なりとし、すべてこの邊綱に緣ある事のみ多し。會津家の別莊にも、綱が塚と稱するものありて、塚上の松を、懷古松と號けられ、鵞峯先生の、笠田園の記を作らる。其畧に云く、「武藏國荏原郡澁谷莊、笠田邑は、源綱が陳跡なり。綱老て仕をかへし、此所に終る。しかりしより已來、數百の星霜を歷るといへども、其塚猶存す。塚上に松を栽て遺蹤を標す。則是壯氣いまだ散ぜず、千歲の餘情あるものか。明暦四戊戌の夏、會津源公此地を賜ひ別莊とし給ふ。猶其塚を存する事は、蓋その勇を取り　古の士を尚び給ふ儀歟」と云々。かくの如く、記されたれど、此地は笠田にあらず。猶前の三田の條下に詳なり。照し合せてみるべし。

小山神明宮　同所有馬家と黑田家の間、小高き所にあり。神體は雨寶童子、別當は天台宗不動院と號す。此所を飯倉神明宮の舊地とするは誤なり。

春日明神社　三田一丁目にあり。別當を三笠山神宮寺と號す。和州三笠山春日四所の御神を、鎭座なし奉るとぞ。三田の產土神にして、例祭は毎年九月九日に、修行す。傳へ云ふ、當社は村上天皇の天德年間、武藏國司藤原正房任國の頃、藤原氏の宗廟たる故に、この御神を此地に勸請せしむるとなり。其後文明の頃、法印慶賢中興す。本地佛は、十一面觀世音にし



て、弘法大師の彫造なりといふ。慶賢瑞夢によりて感得の靈佛なりといひ傳ふ。

月波樓　同所、松平主殿侯別莊の看樓の號なり。此地の眺望、實に洞庭の風景を縮たるが如く、岳陽の大觀を模すに似たり。依て城南の勝地とす。羅山先生の東明集に詳なり。

三田八幡宮　芝田町七丁目にあり。三田の惣鎮守にして、祭る所山城男山八幡宮と同じくして、後一條帝の寛仁年間、草創すと云傳ふ。舊地は窪三田にあり。土人云ふ、當社は延喜式の神名記、及び武藏風土記等の書に、載る所の稗田神社是なり。今も其舊地に一社あり。窪三田八幡宮と稱す。正保年間、今の地へ移し奉るといへり。此地後は山林にして、前は東海に臨む。故に風光秀美なり。別當は天台宗にして、眺海山無量院と號す。祭禮は隔年八月十五日に修行す。放生會あり。

延喜式神名帳云　武藏國荏原郡御田鄕。

稗田八幡。

武藏國風土記殘篇云　荏原郡御田卿稗田八幡。

圭田五十八束三字田。

三田春日明神社

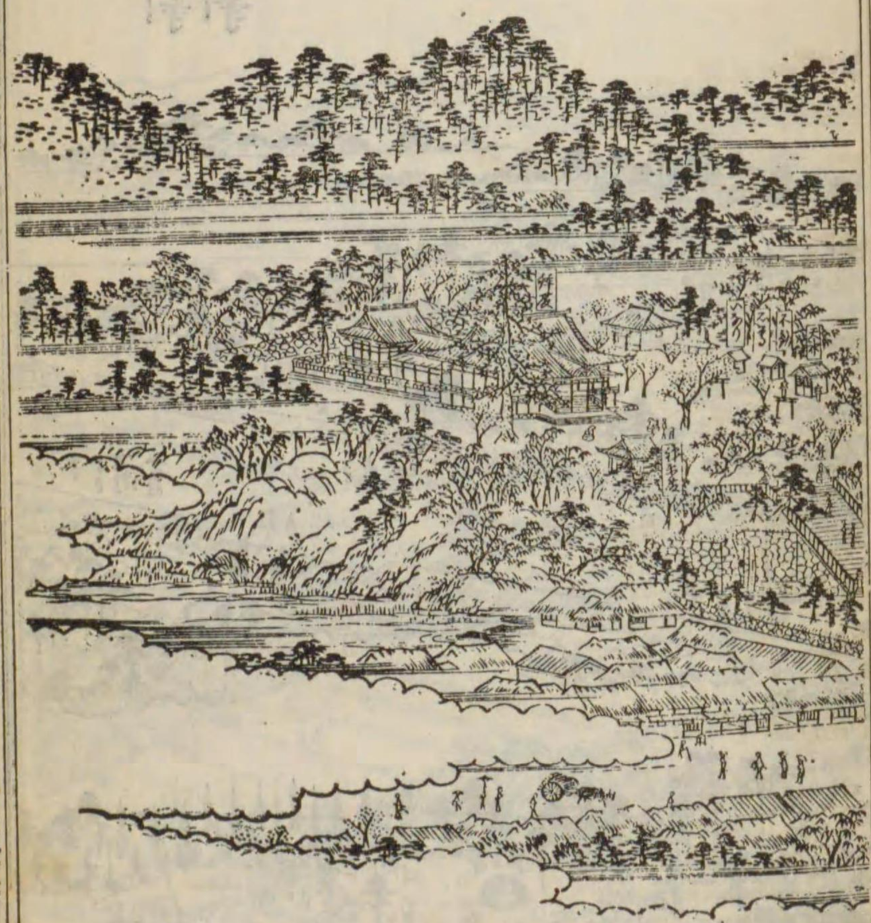
所祭應神天皇也。武内宿禰荒木田襲津彦等也。和銅二年己酉八月十五日。始行神禮。有神戸巫戸等。

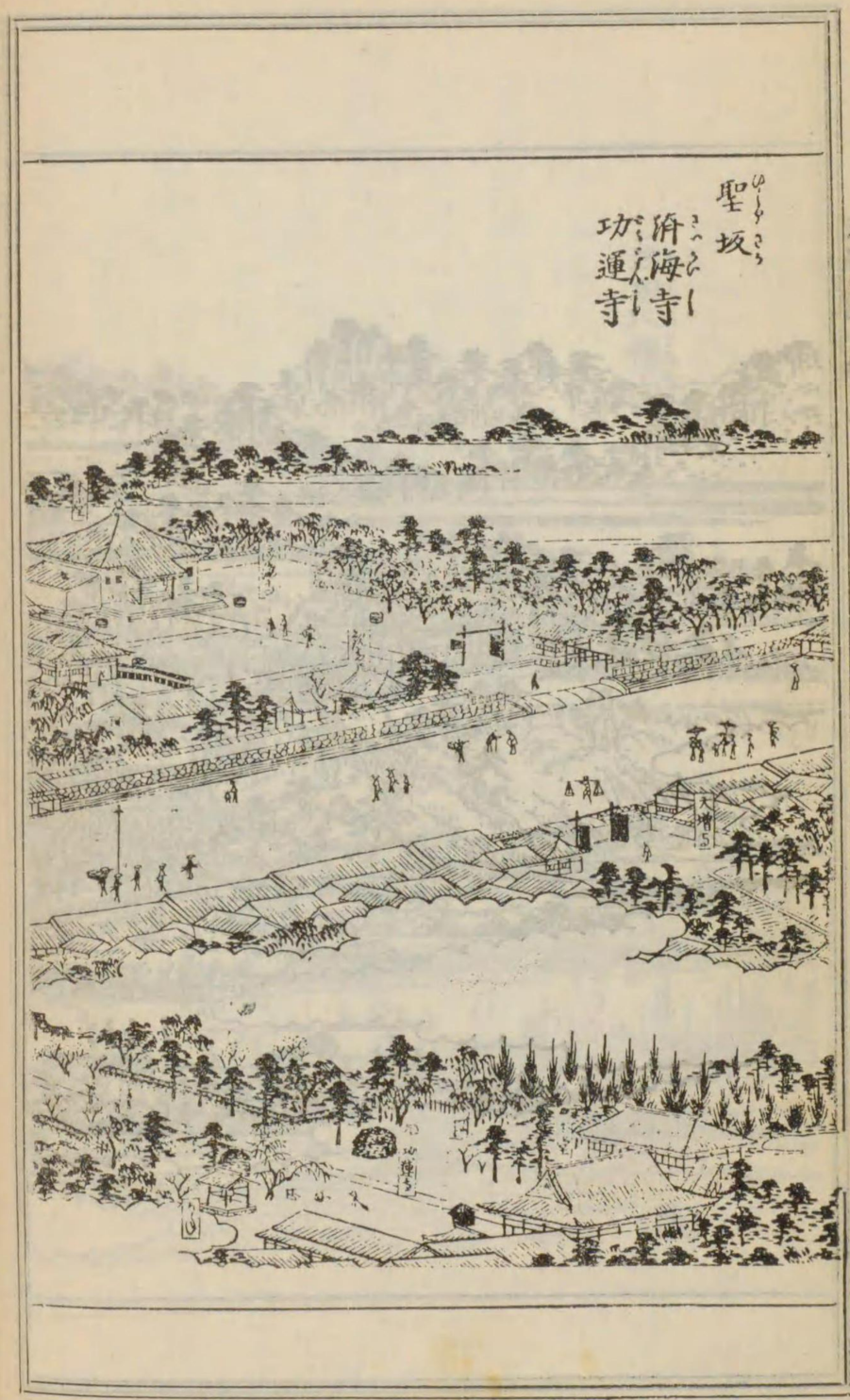
龍谷山功運寺 同所聖坂にあり。聖坂とは、むかし此地に、高野聖多く住みて、開きたりし坂なればかく云ふとぞ。曹洞派の禪窟にして、三州龍門寺に屬す。開山を默室天周和尚といふ。支院三ケ寺あり。當時は定會地にして、所化衆あり。當寺境内に綱塚と稱するものあり。綱が事は、前の三田及び綱坂の條下に、詳なり。

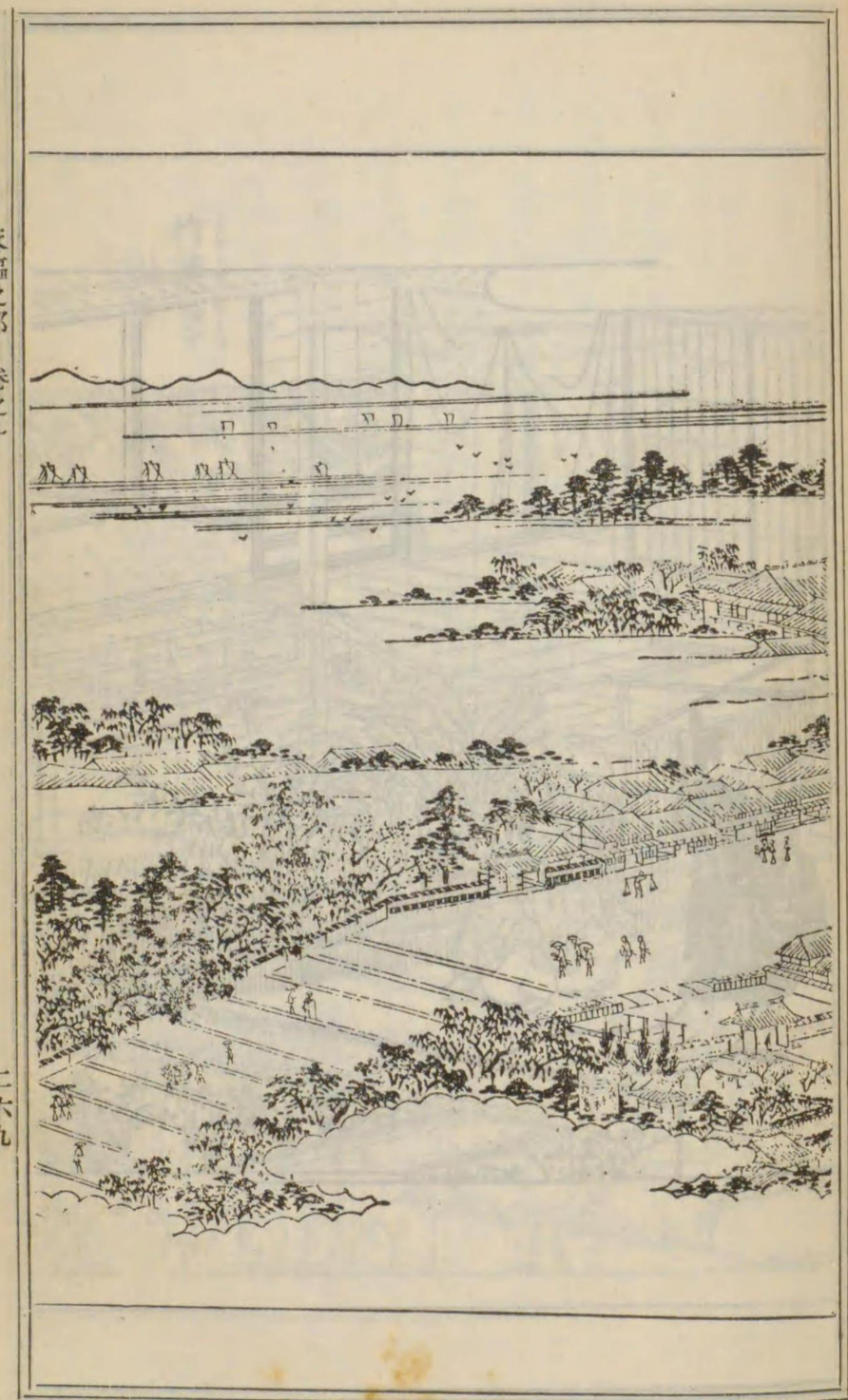
周光山濟海寺 聖坂の上道より、左側にあり。淨土宗にして、京師智恩院に屬す。上古は竹柴寺と號して、巍々たる眞言の古刹なりしが、中古荒廢に逮ぶ。依て法譽上人念無和尚中興す。その庭、海岸に臨んで、沖より目當の燈籠あり。當寺庭中の眺望は、實に絶景なり。房總の群山眼下にありて、雅趣すくなからず。朝夕に漂ふ釣舟は、沖に小く暮て、數點の漁火、波を燒かと疑はる。羣芳發して綠陰深く、風露爽にして、氷霜潔し。四時に觀をあらためて、風人の眼を凝しむる一勝地なり。月の岬といふも、此邊の惣名なり。

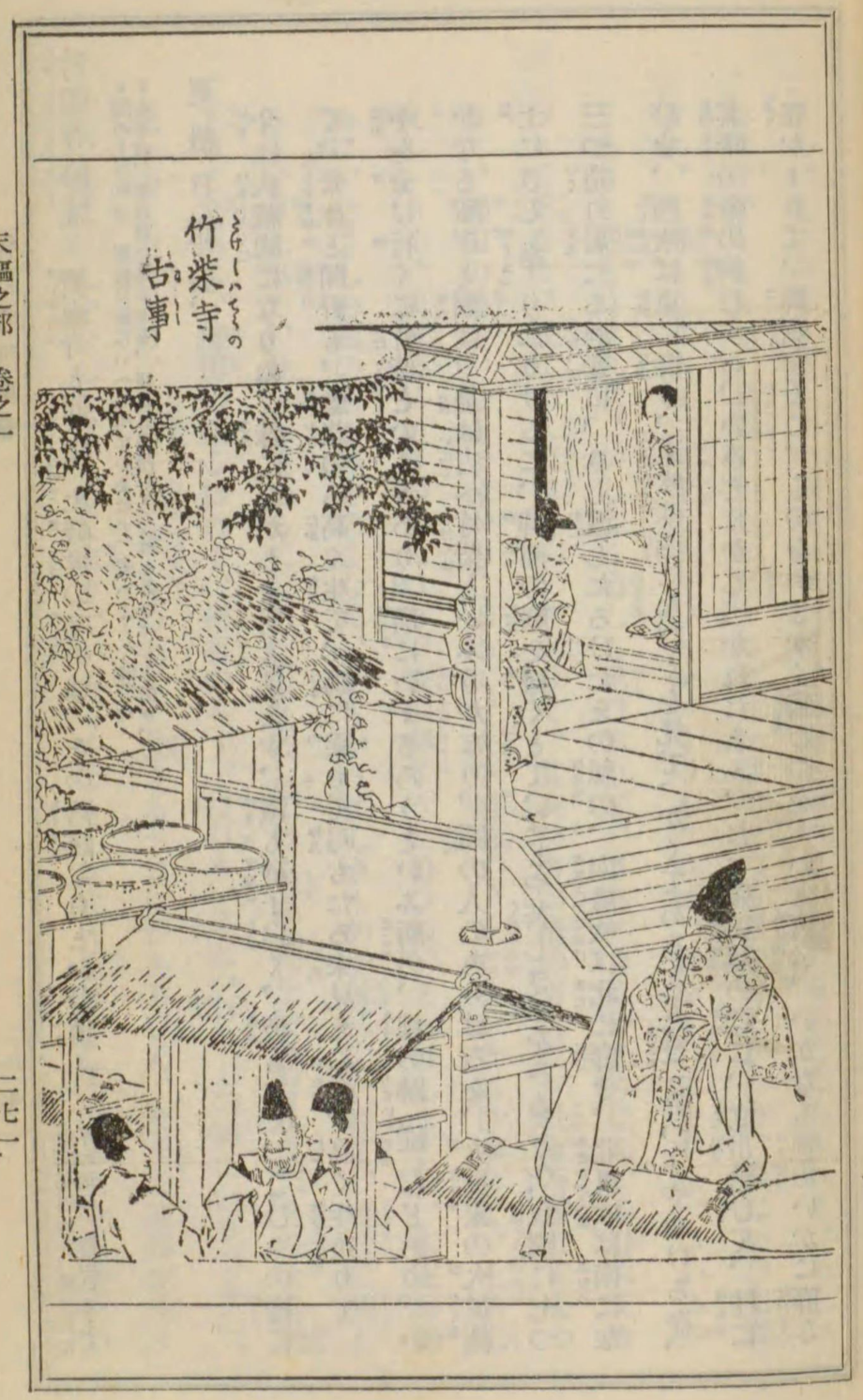
三田八幡宮

海辺




聖坂
浜海寺
功運寺




竹柴寺古事

竹柴寺舊址　濟海寺と同隣土岐侯の邸の地、その舊跡なりといひ傳ふ。山岡明阿云ふ、按ずるに今の地は、海邊にてしかも岡の上なれば、更級日記にいへる所にかなはず。若いよ〳〵此寺にてあらば、昔は外にありしを、後にこの所へうつせしるなべしと云々。

更級日記云、

今は武藏國になりぬ、殊にをかしき所も見えず、濱も砂子白く、波もなく、こひちの樣にて、紫生と聞野も、蘆荻のみ高く生て、馬に乘りて弓もたる末見えぬ迄、高く生茂りて中を分け行くに竹柴といふ寺あり。遙にいゝさろうといふ所の、樓の跡礎などあり。いかなる所ぞと問ば、是は古へ竹柴といふさかなり。國の人のありけるを、火焚家の火焚衛士にさし奉りたりけるに、御前の庭を掃くとて、などや苦しきめをみるらん、我國に七つ三つ造り居たる酒壺に、さし渡したるひたえの瓢の、南風吹ば北に靡き、北風吹ば南にな びき、西吹ば東に靡き、東吹ば西になびくを見で、かくてあるよと獨ごちつぶやきけるを、其時の帝の御むすめ、いみじうかしづかれたまふ、たゞ獨御簾の際に、立出給ひて、柱に寄かゝりて、御覽ずるに、このをのこかく獨ごつを、いと哀に、いかなる瓢のいかに靡な

らん、といみじう床しくおぼされければ、御簾を押明て、あのをのここちよれと、めしければ、かしこまりて高欄のつらに參りたりければ、云つる事今ひとかへり、我にいひて聞せよ、と仰られければ、酒壺の事今ひとかへり申しければ、我ゐて行て見せよ、さいふやうありと仰られければ、かしこく恐しと思ひたれど、さるべきにやありけん、おひたてまつりて下るに、便なく人追來らんと思ひて、其夜勢多の橋のもとに、此宮を居たてまつりて、瀨田の橋を、ひとまばかりこぼちて、夫を飛越て、此宮をかきおひ奉りて、七日七夜といふに、武藏國にいきつきにけり。帝后御子うせ給ひぬ、とおぼしまどひ、もとめ給ふに、むさしの國の衛士のをのこなん、いとかうばしきものを首に引かけて、飛樣に逃たると、申し出て、此男を尋ぬるに、なかりけり。論なく本の國にこそ行くらめ、と公より使下りて追ふに、勢田の橋こぼれて、得行やらず。三月といふに、むさしの國にいきつきて、此をのこを尋るに、此御子公使をめして、我さるべきにやありけん、此男の家ゆかしくて、ゐて行といひしかば、ゐて來り。いみじくこゝあかよく覺ゆ。この男罪しきうせられ

ば、我はいかであれと、是も前世に、此國に跡をたるべきすくせとありけめ。はや歸りて公に此よしを奏せよ、と仰られければ、いはんかたなくて、のぼりて御門にかくなんありつる、と奏しければ、云かひなし。其男を罪しても、今は此宮をとりかへし、都にかへし奉るべきにもあらず。竹柴のをのこに、いけらん世の限り、むさしの國を、預とらせて、公事もなさせじ、たゞ宮に其國あづけ奉らせ賜ふよしの、宣旨下りければ、此家を内裡のごとく造りて、住せたてまつりたる家を、宮などうせ給ひにければ、寺になしたるを、竹柴寺といふなり云々。

龜塚　濟海寺の北に隣りて、隱岐家の別莊の地にあり。昔は竹柴寺の境内なりしを、御開國の頃、地を割て、隱岐家の別莊に給ふ。故に此時龜塚は、隱岐家邸の内に入れたりとぞ。其塚のかたはらに、其主の建てられたる龜塚の碑と稱するものあり。相傳ふ、往古竹柴の衛士の宅地に酒壺あり。其もとに一つの靈龜栖り。後土人崇めて神に祀れり。いつの頃にやありけん、或時夜もすがら風雨あり、其翌日彼酒壺、一堆の石に化せりと云ふ。又文明中、太田道灌此地に斥候を置き、其龜の靈あるをもつて、これを河圖と號くるといへり。濟海寺の山號を、昔は龜塚山と唱へしとなり。今も猶、土人は龜塚の濟海寺と呼べり。

徂徠先生墓　三田寺町長松寺といへる淨家の境内にあり。碑文は猗蘭侯撰す。

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道鄒魯博究物理立言修辭德崇名垂不朽莫大焉嗚呼先生出也如日之升也乃影之及無所不照其朦焉嗚呼實出先生天意可知也其爲人其行狀弟子識矣享保戊申正月十九日六十有三卒姓物部茂卿以字行銘曰洋洋聖謨世用惑久天降文運斯人云受乃化乃弘徽猷維厚大業已成日新富有瑕其不壽天奪斯人匪天維奪有司列辰嘻我小信瑕能孚神盛德不朽永于牖民

先生は荻生氏、本姓は物部、名は雙松、字は茂卿、字を以て行はる。一號は蘐園、通稱は惣右衛門と云ふ。父は方庵と號して官醫たり。先生父に從つて南總に住す。五歲にして文字を識る。十五歲よく文を屬す、家極めて貧しく、東都に出て力學す。業成りて柳澤侯の擧ぐるに遇ひ、食祿五百石を賜はり、編修總裁となる。享保十三年戊申正月十九日に卒す。著述の書八十餘部といふ。

魚籃觀音堂　同所淨閑寺といへる淨刹に安置す。本尊は木像にして六寸ばかりあり。面相唐女のごとくにして、右の御手に魚籃を携へ、左の御手には、天衣を持したまへり。

魚籃観音堂

緣起に曰く、唐の元和年間、靈宗の年號なり。金沙灘といへる地に、一人の美婦の籃を持して魚を鬻ぐあり、見る人其容貌の麗しきを競ふ。女の云く、我性佛經を悅ぶ、若夫に通ぜむ人あらば、夫とせんと云ふ。其中に馬氏なる人あり、是をよくす。依て此女をむかへけるに程なく死せり。馬氏悲に堪ず、日を經て後、異僧來りて、馬氏と共に塚を見るに、靈骨ことゞく金鎖となりて、光を放つ。是より其國こぞりて、三寶を崇ぶとなん。初め金沙灘に應化まします妙相をあがめて、魚籃觀音とはなづけたてまつる。爰に當寺の開山稱譽上人、自の師法譽上人、肥州長崎に遊化の頃、一老婦より此靈像を感得し、元和三年丁巳、豐前國中津といふ地に、假に淨舍を營み、御座を構へて、魚籃院と號す。竟に寛永七年庚午、三田の地に奉安せしを、稱譽上人其地の所せきを歎き、承應元年壬辰正に今の地に移し、當寺を建立す。爾より緇素ます〳〵渴仰し、衆人打群て歩を運ぶにより、靈應いやまし、香煙常に風に靡き、梵唄うたゝ林にこたふ。

潮見坂　聖坂の南、伊皿子臺町より、田町九丁目へ下る坂をいふ。或人云ふ、潮見坂舊名潮見崎と呼びたりしといふ。古はすべて此邊に七崎ありしと云ふ。按ずるに、潮見崎、月岬、袖が崎、大崎、荒崎、千代が崎、長南が崎、是等を合せて七崎といひしか。

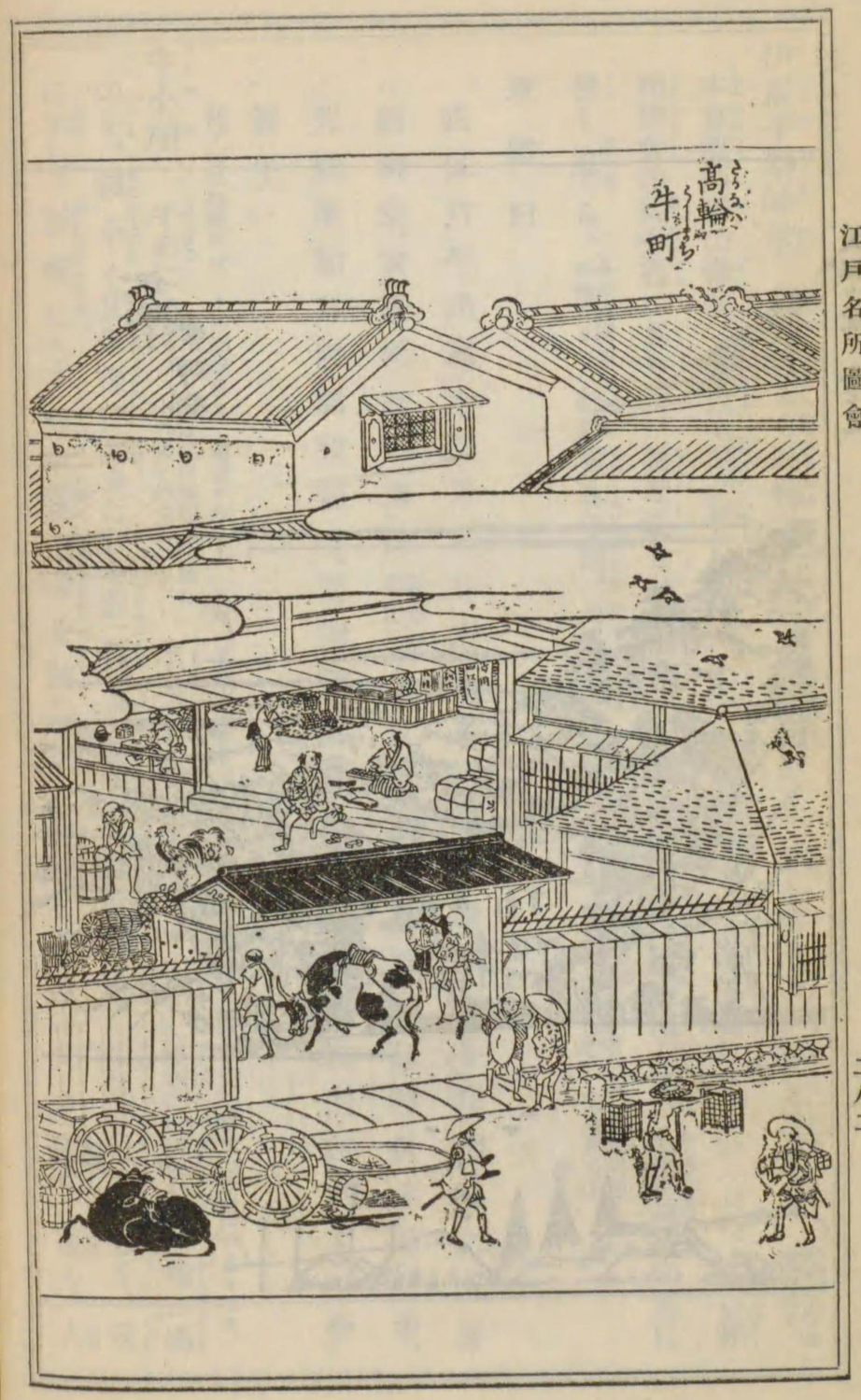
伊皿子藥師堂 潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあり。寺を醫王山福昌寺と號す。天臺宗城琳寺に屬す。本尊藥師佛の像は、智證大師の作にして、右大將賴朝卿の、念持佛なりしといへり。往古相州鎌倉の佐介谷にありて、藥師堂といふ。其のち騷亂の時、住僧護持して、當國品川の地に移し奉る。今の細殿山の地なり。終に寛永年間、今の地に安置すといふ。今鎌倉佐介谷に、藥師堂跡と、字する地あり。其舊跡なり。

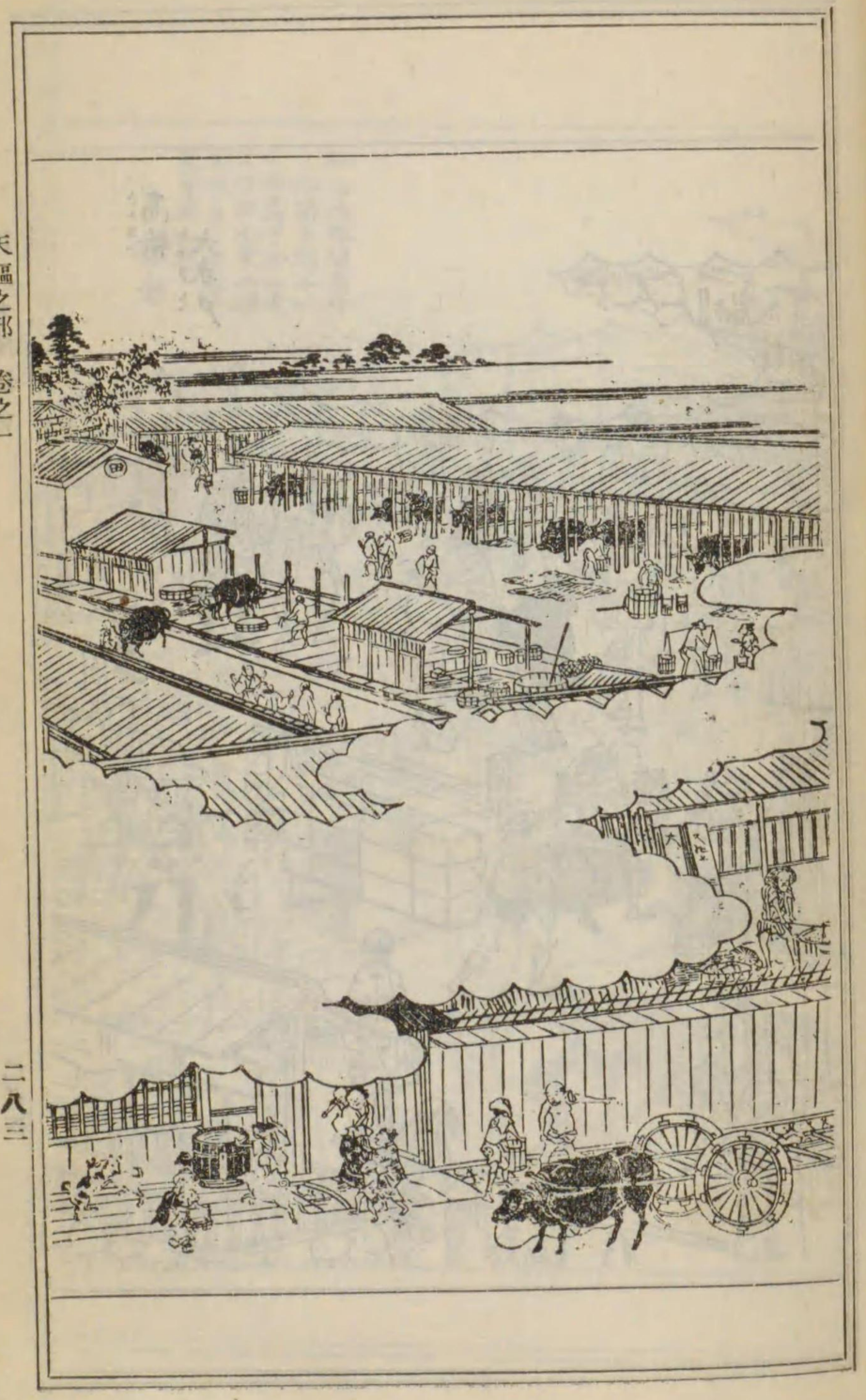
東鑑曰

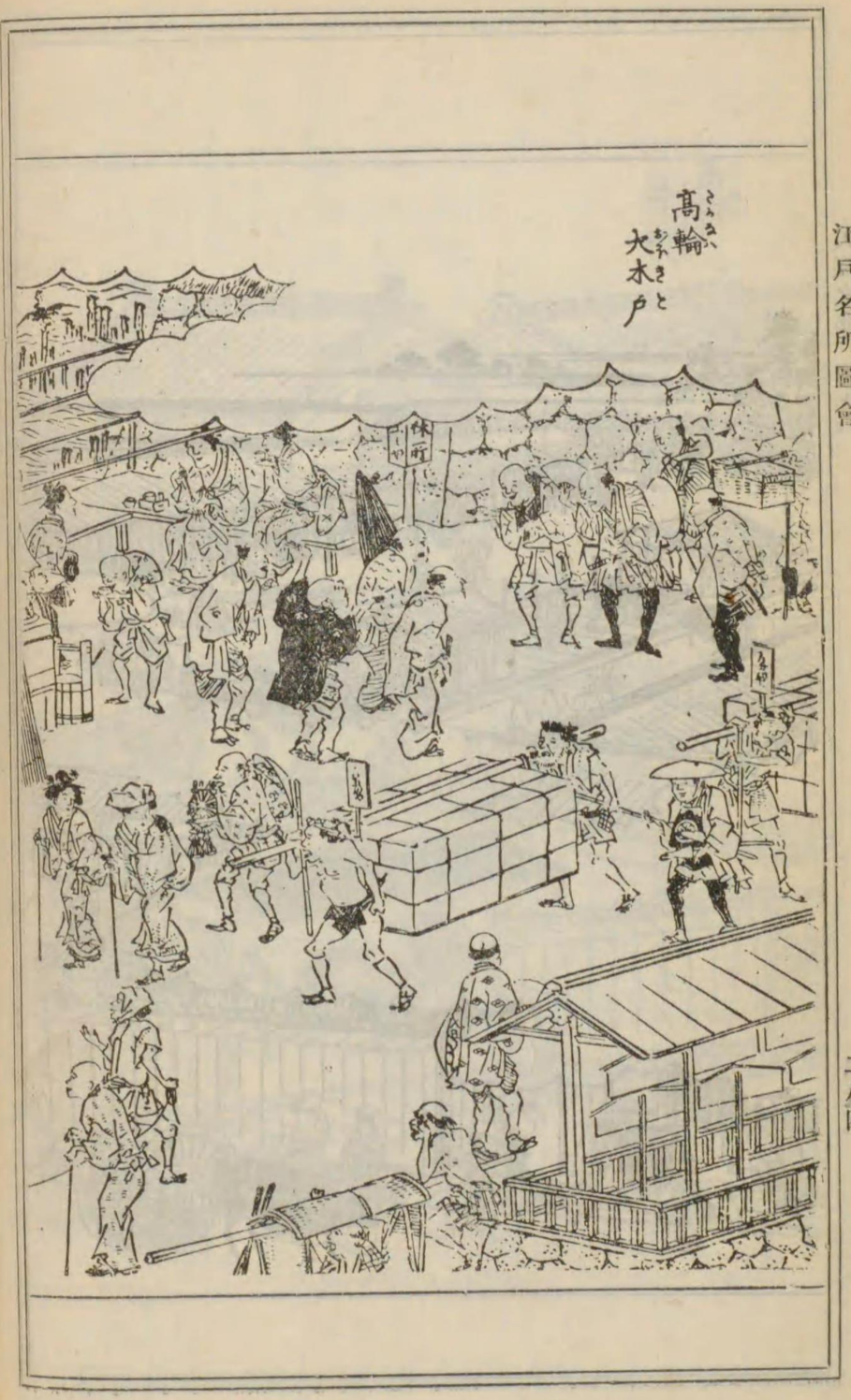
建保六年戊寅十二月二日庚子。右京兆依靈夢所令草創給之大倉新御堂。安置藥師如來像。雲慶奉造之今日被遂供養。導師莊嚴房律師行勇。咒願圓如房阿闍梨遍曜。堂達頓覺房良喜若宮供僧也。施主竝室家等坐簾中。

按ずるに東鑑には、この藥師佛を、運慶の作とし、寺傳、智證大師とす。また東鑑に右京兆とあるは、北條右京太夫義時のことなり。

牛小屋 牛町にあり。延寶江戸圖に、此地を牛の尻と云ふとあり。牛を畜する家多く、牛の數一千疋に餘れり。養ふ處の牛、額小く其角後に靡きたるを藪覆と號けて、上品なり。都て牛は、行事正しく、殊に早し。形婉にして精氣撓ず、力量勝たるに、軛をかけ、重を乘せて遠きに運ぶ。人

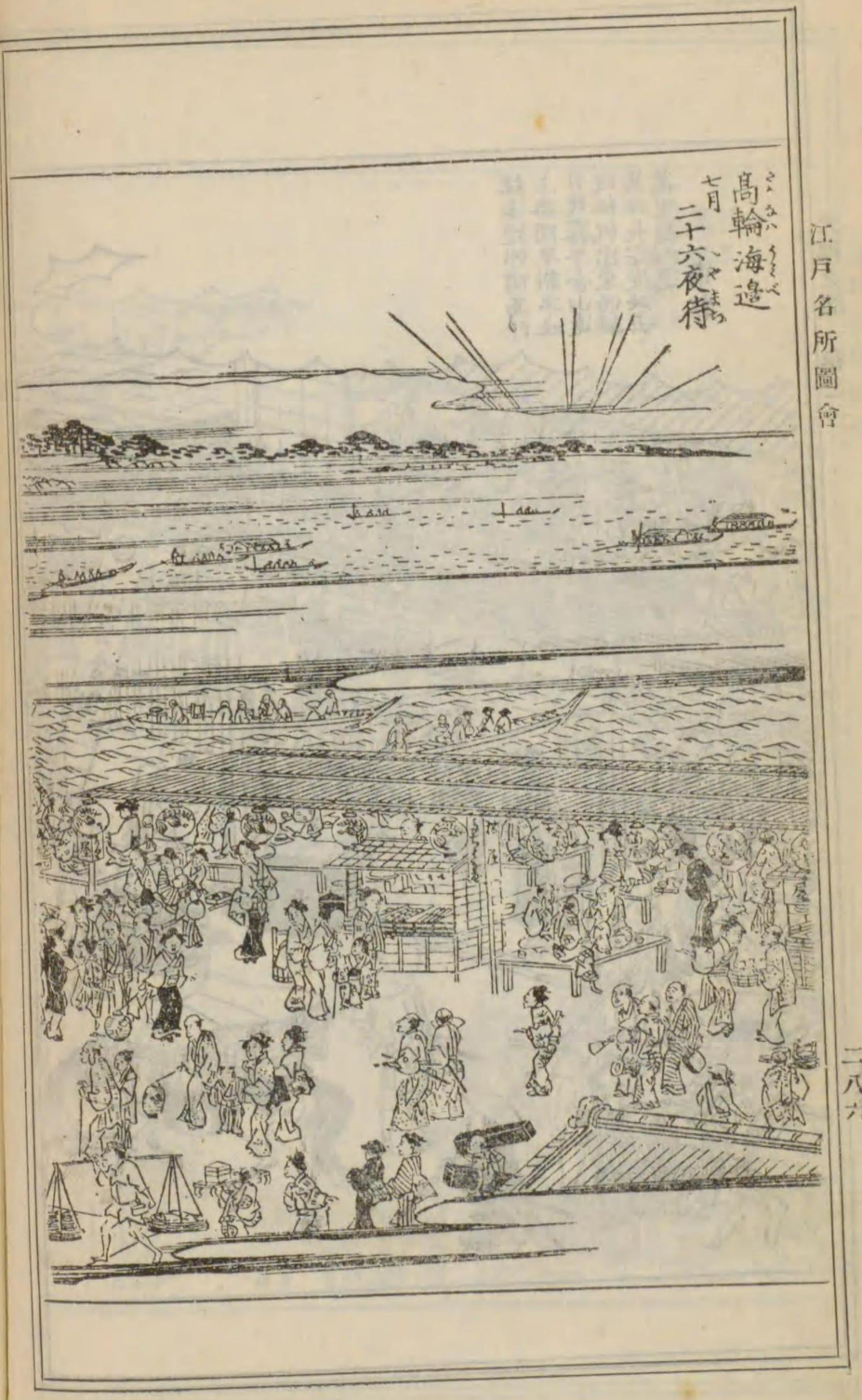

高輪牛町

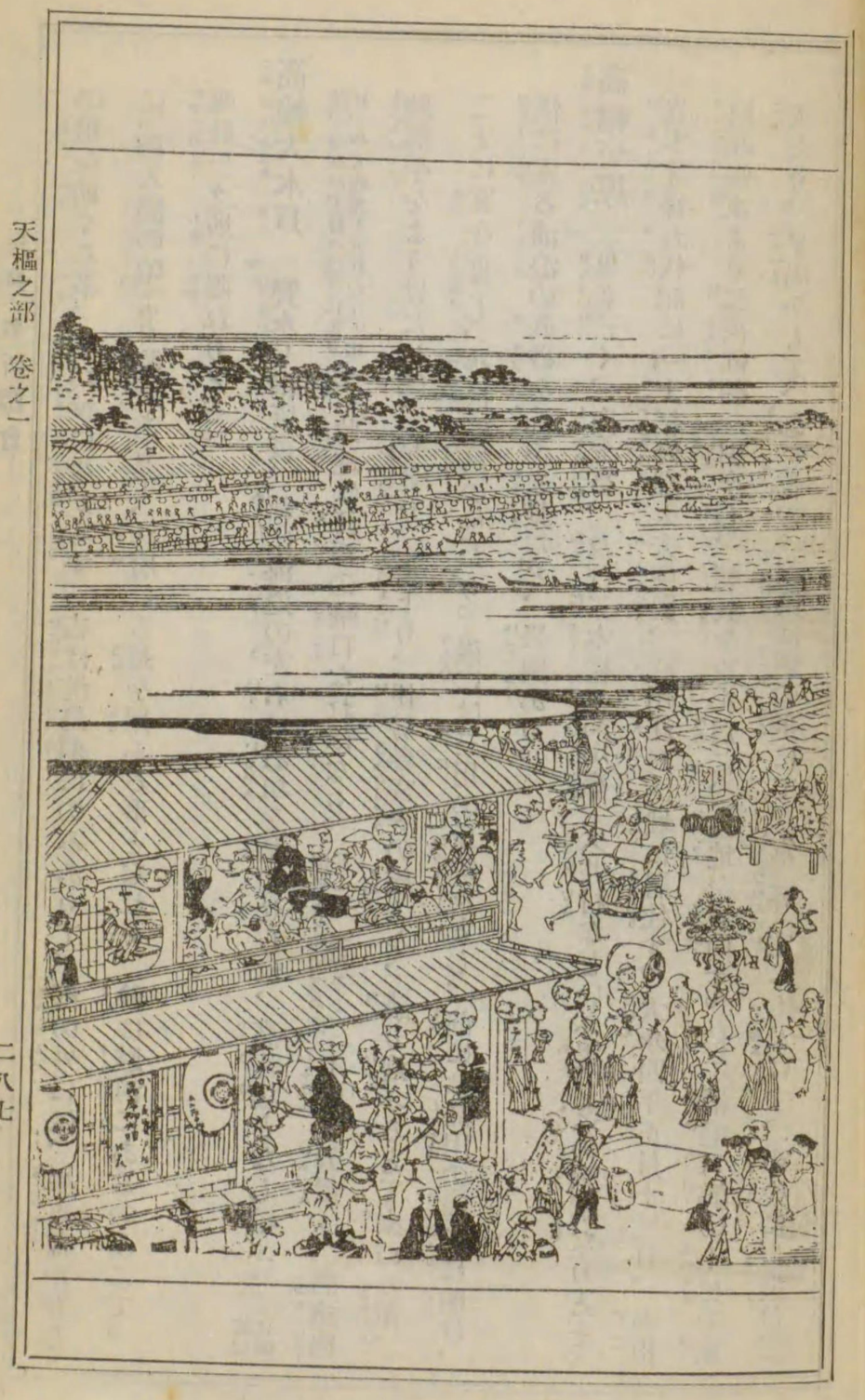



高輪
大木戸

緑海旋郊闕高阡
上路聞早朝平吐
日殘霧半含山遠
近征帆出東西驛
馬班長安從此去
萬里幾人還
南郭

高輪海邊
七月二十六夜待





の用を助くる事、其功誠に少からず。古は淀烏羽にのみありて、都の外には、牛車なかりしに、御入國の頃より許宥ありて、江府にも是を用ふる事となれり。餘は駿河にあるのみにて、唯此三ヶ所に限れりとぞ。

高輪大木戸　寶永七年庚寅、新に海道の左右に石垣を築かせられ、高札場となし給ふ。其初は同所、田町四丁目の三辻にありし故に、今も彼地を元札の辻と唱ふ。此地は江戸の喉口なればなり。田町より品川迄の間にして、海岸なり。七軒と云邊は、酒旗肉肆海亭をまうけたれば、京登り、東下り、伊勢參宮等の旅人を、餞り迎ふるとて來ぬる輩、こゝに宴を催し、常に繁昌の地たり。後には三田の丘綿々とし、前には品川の海遙に開け、渚に寄る浦浪の眞砂を洗ふ光景など、最興あり。

高輪が原　里老云く、白金臺、及び二本榎、品川臺、大井村などいふ邊り迄の惣稱なりとぞ。異本北條五代記に、「上杉修理太夫朝興、武州江戸の城に居住す。大永四年正月十三日、小田原北條家より二萬餘騎を引卒し、朝興を攻ん爲に、彼地を發向す。依て稻毛六郷の上杉の家人より、早馬をもて、急を告る。朝興は俄の事にて、軍評定にも及ばず、中途に出迎ひて勝負を決すべし、と討て出で、小田原の先陣と、品川高輪が原にて渡合ふとあり。小田原記に、永祿、信玄小田原を攻めんとする條下に、一手は江戸品川の繩島の邊を燒きて、民屋を追捕すとあり。又江戸咄に、高繩手とあり、然る時は高輪は其繩手なり。按ずるに今の海道は、後世に開けしものにて、古は丘の上通りを通路せしなれば、さもありなんかし。

萬松山泉岳寺　海道の右にあり、野州富田の大中寺に屬す。曹洞宗江戸三箇寺の一員たり。橋場、總泉寺、芝青松寺、此寺等也。坊舍三宇、學寮九宇あり。當寺は往古慶長年間、台命を奉じて、門庵宗關和尚、外櫻田の地に、創建する所の禪刹なり。後寛永十八年辛巳、再命ありて、寺を今の地に移したりといふ。本尊釋迦如來は、座像二尺計あり。脇士は文殊普賢なり。總門の額萬松山の三大字は、華僧闃の沙門道霈の書にして、康熙辛酉孟冬上浣と記せり。當寺は淺野家の香花院にして、其家累代の兆域あり。又淺野内匠頭長矩及び義士四十七人の石塔あり。方丈より南の丘の半腹にあり。傍に當寺住僧建る所の石碑あり。其旨趣を注す。二月三月の四日、及び正月七月の十六日等には、英名を追慕して、こゝに集ふ人少からず。又當寺に義士等の遺物を收藏する事多し。元祿十四年三月十四日、淺野内匠頭長矩、吉良上野介義英を刃傷に及ぶにより、長矩に死を

給ふ。後其家の長臣大石内藏助良雄、本國播州赤穗に在て、君の讐にはともに天を戴べからずといふの義により、血盟を以て、同志の者をかたらひ、終に元祿十五年十二月十四日、讐家に至り、義士四十七人、義英の所在を搜して、其首級を得、當寺に至つて、亡君の墓前に祭るの後、誅を待て、翌十六年二月四日自殺せし事は、諸書に詳なるを以てこれを省く。

歸命山如來寺　大日院と號す。泉岳寺の南に隣る、天台宗にして東叡山に屬せり。本尊五智如來は、座像各一丈あり。俗に芝の大佛と稱す。木食但唱師の彫造なり。但唱は佛工にして、もとより佛體を作るに妙を得たり。故に奇妙佛と號せり。京都鳴瀧の五智山に安ずる所の石像の五智如來十三佛等は、但唱の作にして、並に自らの像をも作れり。彼所に、靈龜山興勝寺と云ふ古刹ありしを、再興して、本尊に釋迦如來及び自らの像をも彫刻し安置せり。其母有馬藥師に祈請してこれを設く。三歲にして、魚肉を食せず、九歲初て出家す。年十五に至り木食、但善の弟子となり、夫より後信州擅特山に籠り、百日の中に念佛三昧を修得し、向の峯に三尊の影向を拜す。同國淺間嶽及び南紀の那智山等に籠ること、各〳〵百日宛、又南海北溟の間を嘗く回り、諸の奇特を見る事多し。終に江戸に下り、寛永十二年、當寺を開創し、五智如來の像を作るといふ。三時念佛の勸めは、但善但唱二代にして絶えたり。

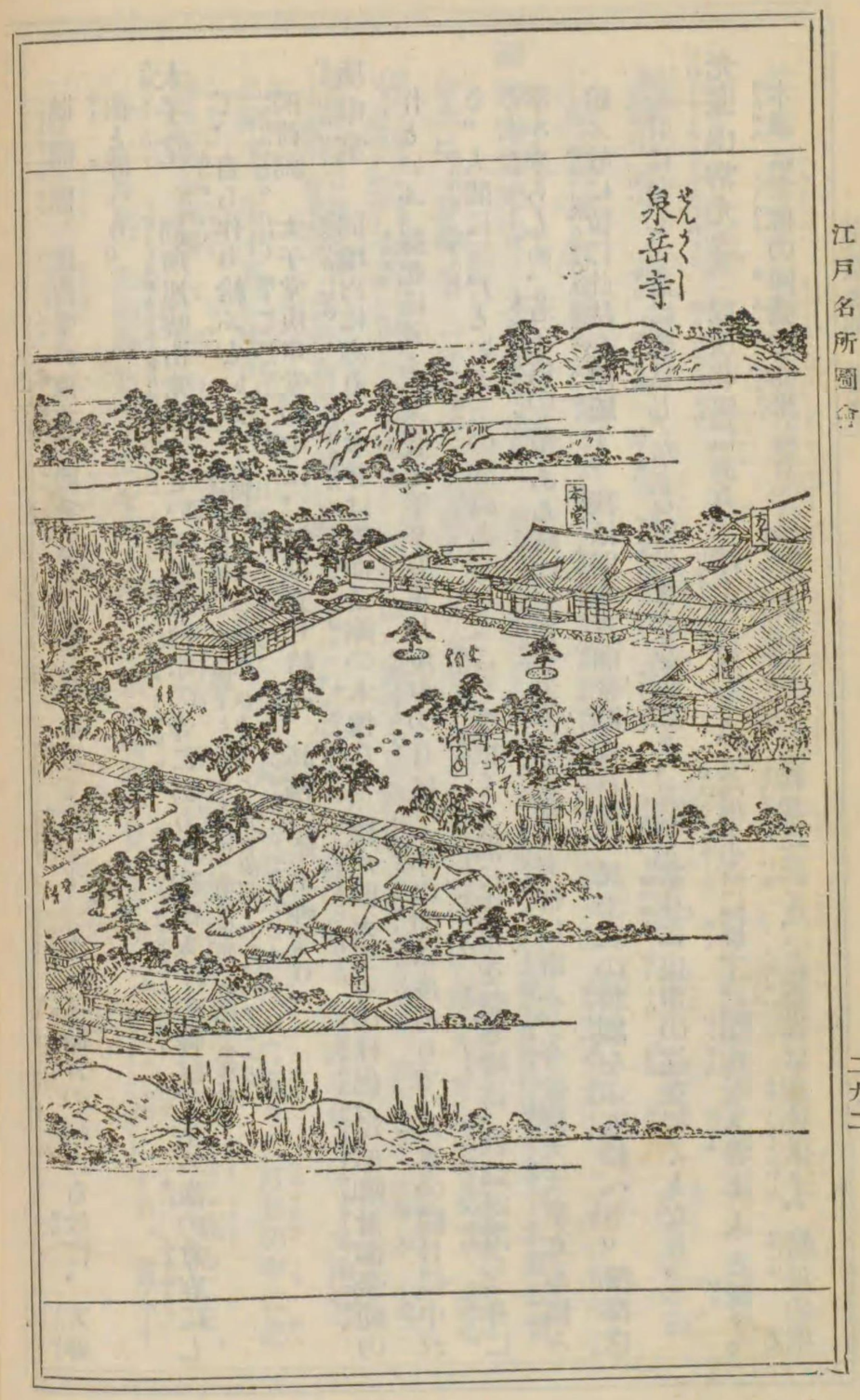
臥龍岡　境内堂の前北の岡を云ふ。形狀を以て號とす。上に天滿宮の祠ある故に、天神山と呼べり。

太子堂　同所旭曜山常照寺といへる天台宗の寺にあり。聖德太子の像は、十六歲の尊容にして、自ら作り給ふといふ。元祿年間開板の、江戸鹿子といへるものに、明暦年間、越後守光長卿の陪臣、川木八兵衛某、故ありてこの所に安置したてまつるとあり。

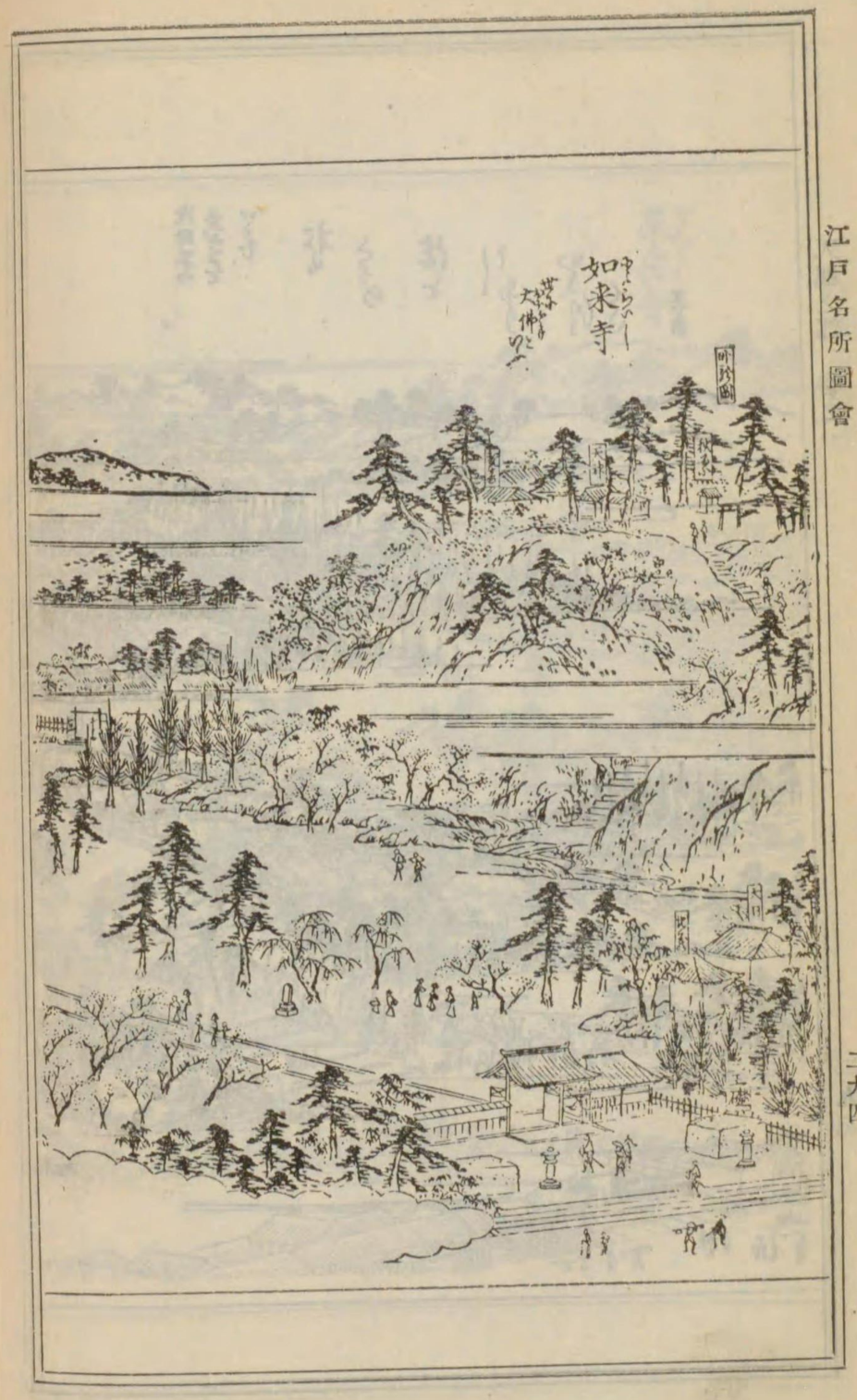
稻荷祠　太子堂庚申堂の中に、竝び立せ給ふ。高輪の產土神なり。

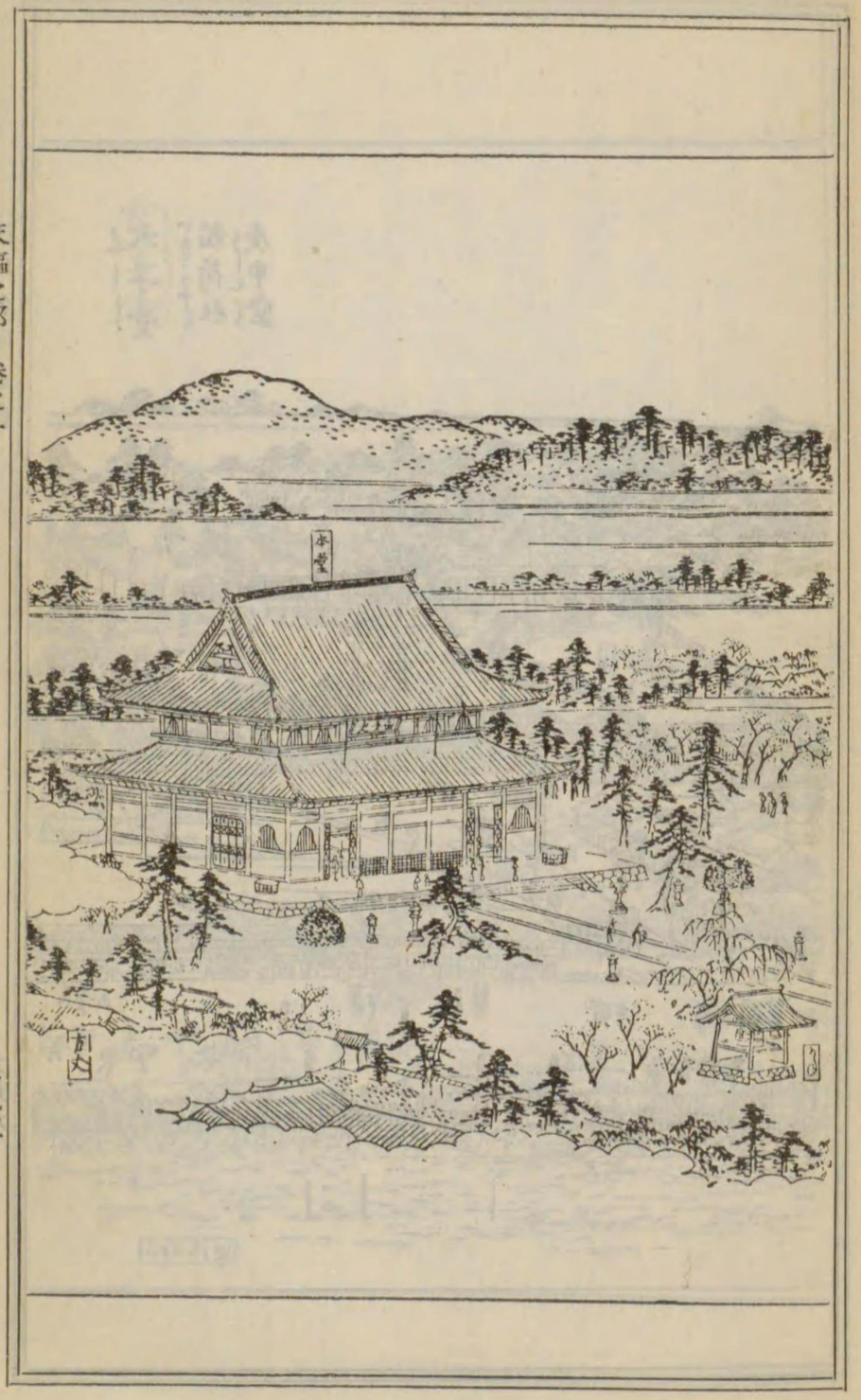
庚申堂　同境内にあり。本尊は青面金剛の木像なり。攝州四天王寺の住侶、民部卿僧都豪範の作といふ。緣起に云ふ、大寶元年辛丑正月庚申の日は、一年の間六度ありて、八專の間日に中れり。人間に三尸といふ三の惡蟲ありて、災を招く。然に庚申を祭る時は、此蟲退散し、身に幸を來らしめ、若不信の輩ある時は、命根を吸ひ惡業を天帝に訴ふ。今帝釋天王衆生を憐み給ふ故に汝に此法を附屬す。我は則ち靑面金剛なりと。又十二の誓願を示し給へり。僧都信心肝に命じ、直に感見し奉る所の尊容を彫刻し、嘗く衆生に庚申の法を授くとなり。

光照山常光寺　同所北町にあり。淨土宗にして、芝增上寺に屬す。開山を大譽上人と號す。本尊は金像の阿彌陀如來なり。世に、信州善光寺分身の彌陀如來と稱す。緣起に云く、此靈像は聖德太子、難波の堀

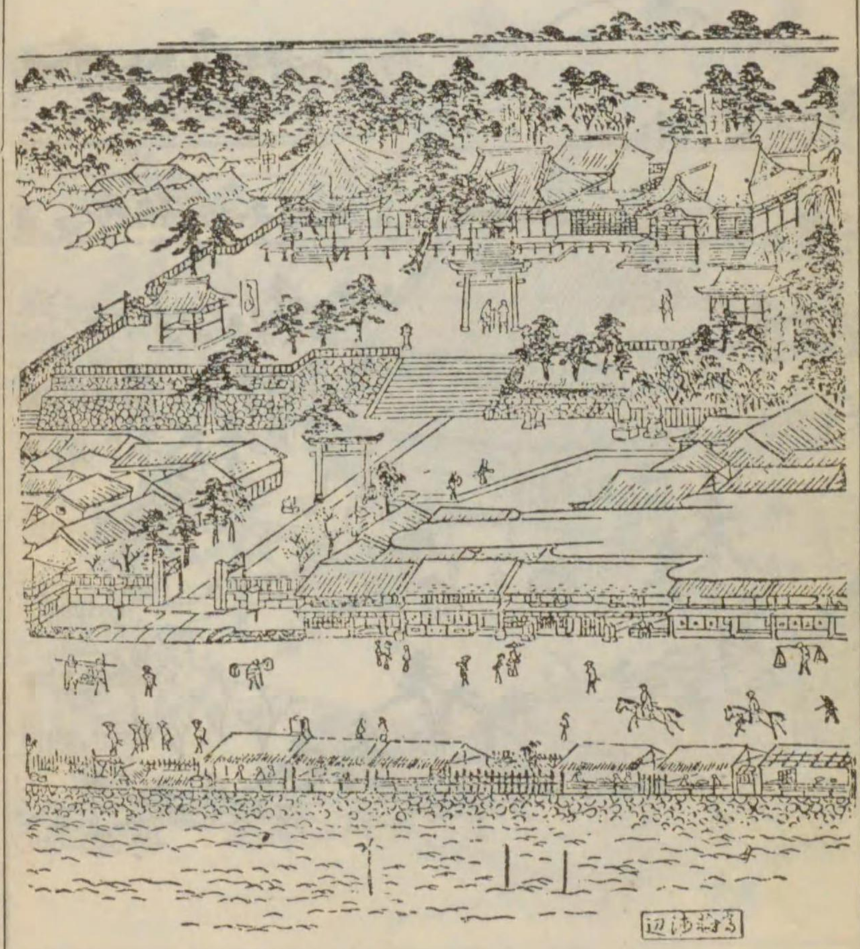

泉岳寺
本堂

浅野家の
義士墓を
いとむ
其角

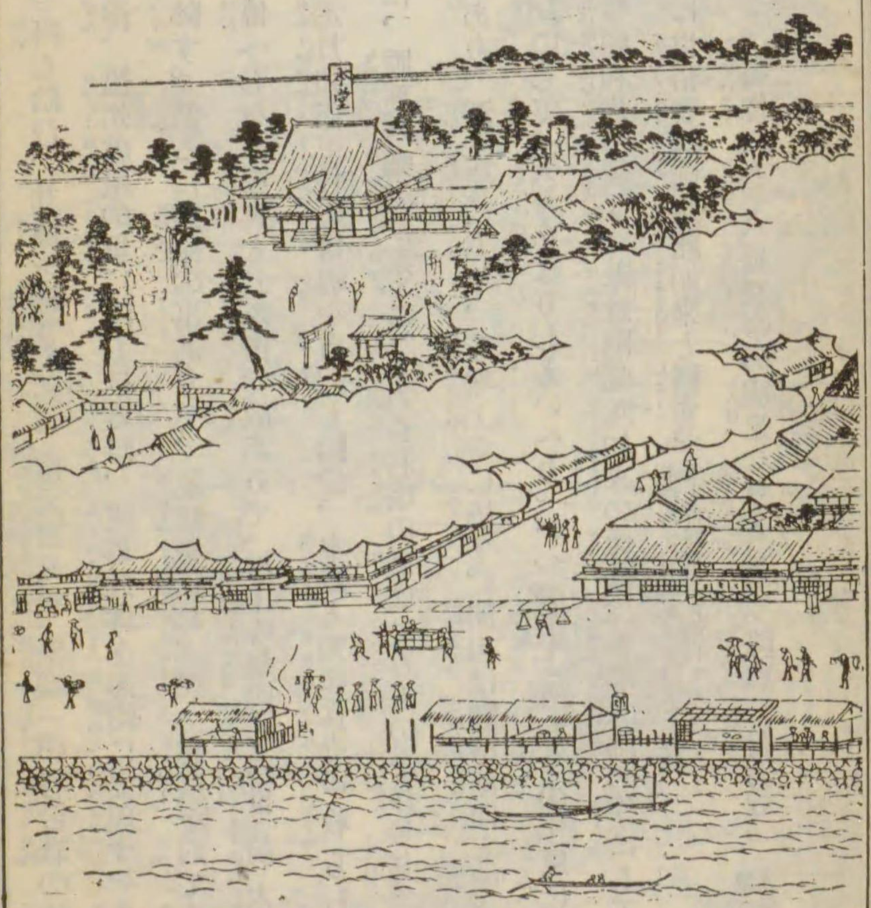

如來寺
大佛


本堂
方丈

太子堂
稲荷社
庚申堂



常光寺



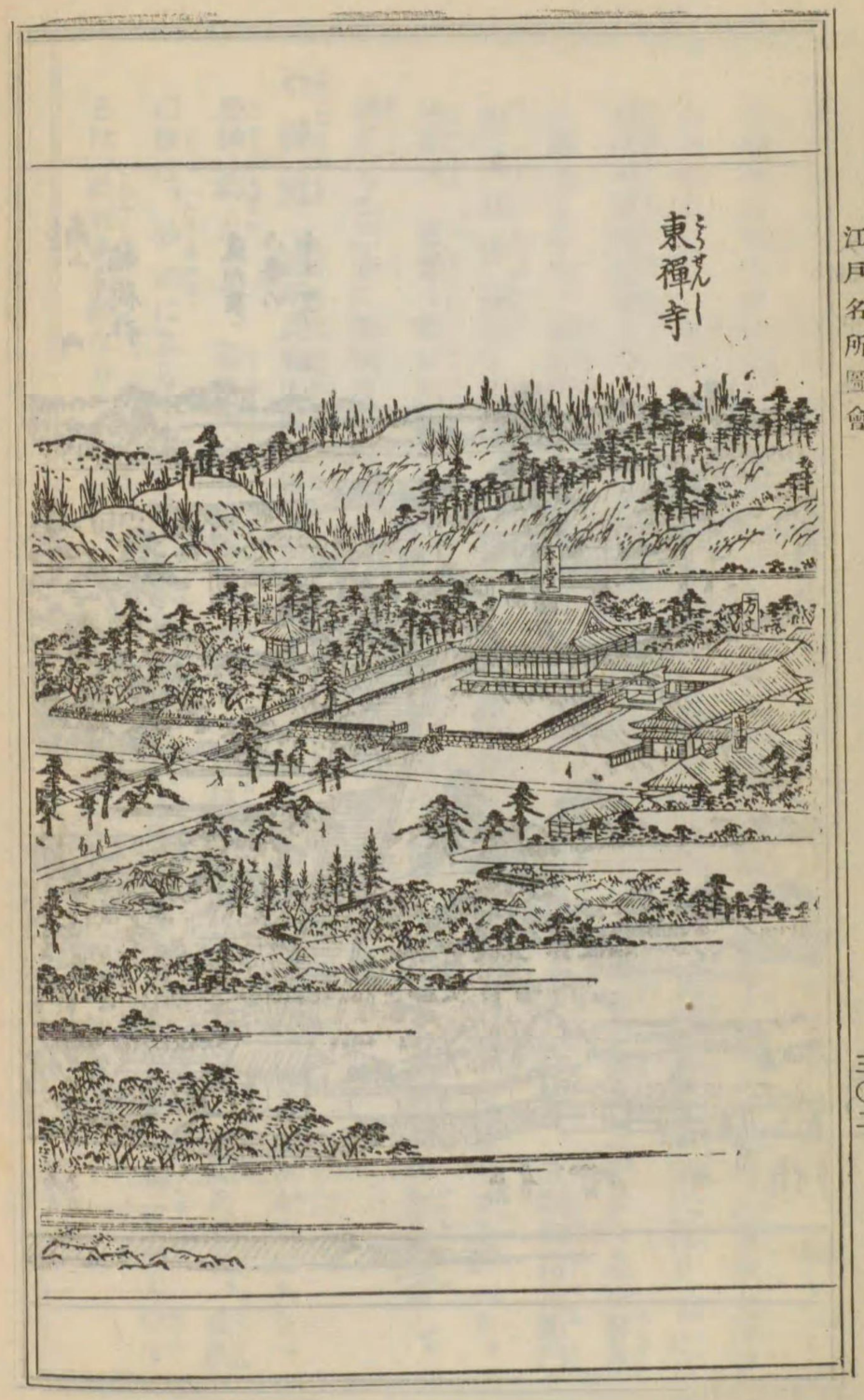
江の水面にして、尊容を拜し給ひ、其像を鑄さしむ。後元暦元年、播州一の谷合戰の時、武藏國の住人岡部六彌太忠澄、攝州蘆屋の里に陣しける時、或翁此像を忠澄に受與す。忠澄大に歡喜し、鎧櫃に收め出陣す。然るに靈威の事ありて、危難を除れ、剩へ忠度を討て武名を顯せり。依て代々其家に傳へしを、獨夜と云ふ僧、故ありて、增上寺第四十六世前大僧正定月和尚へ奉る。遂に定月和尚、件の旨趣を自記し給ひ、本尊と共に當寺に收られしといふ。此故にや當寺境内に、岡部六彌太が墓と呼ぶ古き石塔の破壞せるものを存せり。

珠玉山寶藏寺　同所にあり。淨土宗にして、芝增上寺に屬す。開山は順淸法印と號す。往古は、慈覺大師開創の梵刹にして、天台宗なりしといへり。いつの頃よりか今の宗風に轉じて、七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興す。本尊阿彌陀如來の像は、善導大師の作にして、御手に寶珠を持し給ふ。故に世俗寶珠阿彌陀如來と稱す。本尊の背面に、永祿元年十一月十七日彫刻、と銘刻してあり。子安觀世音　當寺に安ず。畫像にして、延喜帝の宸筆なりと云ふ。緣起一卷あり。靈緣起は、土佐光信と云ふ。略緣起は、和田義盛撰する所といふ。

緣起略に云く、建久元年十一月、右大將頼朝卿上洛す。其途中一人の婦ありて、告て云く、此靈像は梁の武帝未だ皇太子ましまさどりし時、常に觀音を新念し給ふ。或時此靈像を感得なし給ひしに、程なく太子降誕ましませり。昭明太子是なり。其後此靈像本朝に渡りしに、欽明天皇御崇敬あり。又醍醐天皇も尊信なし給ひ、宸翰を注ぎ、緣起を作らせ給うて、是を將軍に賜ふとなり。頼朝卿之を得給ひ、鎌倉に安置し、尊信淺からざるにより、其頃和田左衞門尉義盛再緣起を書添たりしとなり。此靈像鎌倉兵亂の後當寺に遷しまゐらすといへり。

辨財天　慈覺大師江州竹生島に詣で給ひし頃、海中波間に影現ありし宇賀神の形を摸擬し、御長七寸三分に彫刻なし給ひしを、當寺に安置し奉るとなり。

石神社　同所高輪南町、鹿兒島久留米兩侯の間の小路を入て、西の方二丁ばかりにあり。祭神詳ならず。同所天台宗安泰寺の持なり。昔は遮軍神に作るとなり。寄願ある者、成就の後は、必何によらず樹木を携へ來り、社地に栽て賽すといふ。此地を石神横町と字するは、此社ある故なり。土人誤りて、おしやもじ横町と唱ふ。


東禪寺

佛日山東禪寺　同所高輪中町にあり。妙心派の禪宗、江戸四箇寺の一なり。本尊は釋迦如來、開山は嶺南和尚と號す。寶鑑國師と謚す。和尚は日向國飫肥の人、守永氏、肥前守祐良の五男なり。幼より佛門に入て、後宗門の大德たり。寛永二十年癸未七月廿七日寂す、歳六十二。慶長の頃、江戸に來り、阿左布に一宇を闢く。當寺是なり。其地を今も靈南坂と云ふ。寛永年間、今の地に移さる。總門は海に臨む。此門の額、海上禪林の四大字は、朝鮮國雪峯の筆なり。頗る世に稱せり。

寶鑑錄云

敕謚大夫法鑑禪師嶺南和尚。大心中興主盟。東禪開闢始祖。得法洛西之地。撥轉向上機關。盛化海東之邊。云々

有喜壽八幡宮　寺外右の方にあり。安泰寺奉祀す。此地を有喜壽の森と號く。或人云ふ、古へ老鶏の栖一株ありて、鶏の塒ありしかば、鶏岡巢とも、書くといへり。

谷山　今云所は品川の入口にありて、海に臨む丘をさして、しかよべり。昔は大日山と號けるとぞ。紫の一本といへる草紙に、昔此地に出崎ありしとも、或は諸侯八人のやしきありし故に、しか唱ふるといへども、證とするにたらず。谷山は邑名にして、目黑の南より袖が崎、仙臺侯別莊の地の邊へかけて、都て谷山村なり。此地に限るの號にはあらず。大日山とよびしは、昔此地に石像の大日如來立たせ給ひし故なりとぞ。後世其堂宇破壞せし頃、谷山稻荷の地にうつし、又品川北馬場の光嚴寺へ收むるといへど、今は其石像の所在をしらず。

江戸名所圖會　卷之二

天璇之部目錄

〔原本四より六まで三冊〕

東海寺　佛殿　山門　中門　鐘樓　要津橋　千歲杉　浴風池　釣玄室　蓁蹬井　萬年石　法寶堂　方丈　閑山澤庵和尚墨
縣居大人墓　廬郭先生墓　鎌倉權五郎景政靈祠　牛頭天王社　同祭禮の圖　坂稻荷　人麻呂の碑

御殿山　鐘鑄の松

光嚴寺

貴船明神社

天龍寺　總門　鐘樓

梶原景時石塔　北條時宗石塔　境內楓樹　千貫牡丹　千貫松　龍淵　兩溪橋　蓬萊山　梶原尾敷　石地藏　權現御手洗池　延命水　明神森　山王社　八幡宮

上古海道

來福寺　本尊經讀地藏尊　梶原塚　梶原松　延命櫻

問答河岸

長德寺

寄木明神社　兜島

海龍寺

品川寺　水月觀音

千體荒神堂

磯の清水

中の橋

本光寺　閑山日什上人墓

常行三昧寺

品川驛　同汐干の圖

洲崎辨財天

大龍寺

妙國寺　本堂　五層塔　多寶塔　諏訪明神社　二王門

海晏寺　鮫頭觀音　北條時賴朝臣石塔　二階堂出羽守石塔

鮫頭明神社

納經塚

西光寺
鈴森八幡宮 鈴石 鳥石
鎧懸松
木原山 相摸街道 熊野辨天
長榮山本門寺 祖師堂 釋迦堂 輪藏 鐘樓 題目堂 白「子母神祠 妙見堂 櫻門 五層塔 七面堂 寶藏 檀所 祖師茶毘所 探幽筆印墓碑 祖師終焉舊跡 祖師鏡御影 同滅に臨て錫給ふ柱 硯井 旅立御影 日蓮大士石塔 池上宗仲墓 坊舍略記 惣門 寺寶 祖師略傳
馬込八幡宮
羅開山善導大師像 善導上人略傳
十騎社 日本武尊祠
大森 名産海苔 和中散店 同麥藁細工
圓頓寺
六郷八幡宮 八幡塚 杉古屋敷 塚立
光福寺
笠島
八景坂 俗やげん坂といふ
桃雲寺
了海上人産湯井
磯馴松
行慶寺
蓮華寺
千束池 日蓮上人腰掛松
梶原氏宅地
光明寺の池
古川藥師堂 銀杏古樹 五智堂 杉本靈泉
貴船明神社
蒲田八幡宮
六郷渡
鹿島明神
荒蘭崎
戸越八幡宮
女塚
中延八幡宮
鳳來寺峰の藥師堂
萬福寺 梶原景時墓 寺寶
鵜木村光明寺 功德水 觀音堂 當麻曼荼羅
矢口村新田明神社 河崎に同社あり 矢口古事 古碑 祕掛榎
蒲田梅林
妙安寺
羽田辨才天社
高畑村光明寺
行方彈正忠明連宅地
長照寺
河崎 奈良茶店

河崎高重宅地
池上氏所藏蜂龍盃 慶安中酒徒略傳
石觀音堂
亘新左衛門尉早勝塚
栗生左衛門尉忠良塚
佐々木明神社
末吉不動堂
白旗八幡宮
義高入道墓
浦島塚
能滿院
瀧の橋 瀧の川
堀内山王宮
河崎新田明神社
勝福寺舊址
秋田城介義景舊館地
子安觀音堂
觀福壽寺 世に浦島寺といふ 菩提樹 浦島墓
松隱寺
神奈川驛 同總圖 三寶寺 本覺寺 平「物見の松 金毘羅 羅漢 飯綱社 人穴社 人穴 神奈川臺貢食店
北條上杉合戰圖
宗興寺
洲河原桃林
末廣松
成就院
同居住舊址
宗參寺
市場觀音堂
洲崎明神祠
觀音山
厄除大師堂 六字名號碑
鹽濱
御靈權現社
姥が森
養光寺
鶴見川 鶴見橋
成願寺
慈眼堂 目黃燈籠
上無川
熊野權現社
熊野權現山 古戰場

慶雲寺
師岡熊野權現宮
本覺寺切通
飯綱權現社
姥島
帷子里
太神宮
蒔田城跡
青木明神社
杉田梅園
擲筆松
金澤文庫舊址
雲松院
折本淡島明神社　櫻爵神祠碑
本覺禪寺
袖が浦
本牧十二天宮
帷子川
品野坂　一名權太坂
乘蓮寺
弘妙寺　天滿宮　熊野祠　鐘樓　七ツ石　二王門　麻耳山
同海鼠を製する圖
稱名寺　鐘樓　今澤願時墓　普賢象　文殊樓
御所が谷
小机城跡
多目周防守宅地
陽光院
富士淺間祠
吾妻明神社　天神の森
程ヶ谷新町
古町街道
二位禪尼影堂
住吉明神社
神明宮
能見堂
泉谷寺
西向寺
道灌山
洲乾辨財天祠
杉山神社
神戸川
界木　地藏堂
金澤　同惣圖
兼好法師閑居舊址
藥王寺

藥師堂
善應寺
瀨戸
瀨戸辨財天　福石
日荷上人加持水
六浦
侍從川
太寧寺　蒲冠者範頼墓
櫻戸湊
裸島
天然寺
野島　土人百軒島と云ふ　金澤原　乙軻の浦
瀨戸橋　旅亭東屋
圓通寺　御宮
能仁寺舊跡
六浦川
光傳寺
筥根權現社
烏帽子島
名産甲香
龍華寺
野島の渡
照天松
金龍院　飛石　九寶亭跡
上行寺　日荷上人石塔
尋光寺
界地藏
雀が浦　一名天神が崎
夏島
浦の郷
洲崎
瀨戸明神社　鐘樓　三本杉　藥師堂　蛇混柏
泥牛菴
嶺松寺
油堤
三艘浦
巾著岩根付岩
猿島

江戸名所圖會

天璇之部

卷之二

萬松山東海禪寺　品川北馬場にあり。花洛大德寺派の禪宗江戸觸頭の一員たり。當寺は輪番にして、年々八月に交代す。寛永十五年戊寅、台命を奉じて、澤庵和尚開創する所の禪園なり。塔頭十七宇あり。

佛殿　釋尊の像を安ず。額　祈禱堂　天倫筆。二重家根の額　世尊寺殿　同筆。山門　樓上に觀音を安ず。額　潮音閣十境の一。大明院宮公辨法親王の眞跡。中門の額　東海禪寺　天倫筆。

鐘樓　本堂の右にあり。鼓樓と號す。十境の一。要津橋　南の方にあり。十境の一。千歳杉　同所橋より南の方の門へ行く道の右にあり。寛永の頃、大寺命ぜられて、千歳杉と云ふとぞ。是も十境の一也。寶暦の頃暴風に吹き折れたりとて、今は其幹わづかに殘れり。浴鳳池　方丈の庭の泉水をいふ。十境の一なり。寺後山下清泉流出師引」之間一池於室之北面一云々。釣玄室、池の北の汀にあり。大寺寛永二十年仲秋のころ、澤庵和尚と、此所

にて、御法問ありしとなり。則ち十境の一なり。東海和尚手賦に云ふ、「寛永十年癸未仲秋之夕。台駕入東海。翫月於山亭。台顏怡怡而田山亭猶乘月明。倚池上小亭。亦侍傍云々。」

蒙龍井（けんりょうせい）　釣玄室の東に並ぶ。寛永の頃、大樹御茶の水に掘せしむ。その水清冷甘美なり。是も十境の一なり。

萬年石（まんねんせき）　池中東の方にあり十境の一なり。寛永二十年癸未三月十四日、大樹當寺へ台駕を移させ給ふ。其時遠州侯小堀政一に命ぜられて、よばせられる所なり。

萬年石之記

今茲寛永癸未三月十四日。偶左相府見移台座於此池沼下。池有島。島有幽石。熟見之無奇形恠狀。不端險挺立。若由醉兮。栗里翁之石乎。或由醒兮。李惠祐之石乎。皆不然。彼防風之朽骨乎。或於蒐之白額乎。共不然。唯突兀而在草裡。痴兀而含德容。是世之求奇者。未曾知此石之所貴。偏得恬淡虛無之趣。而有谷神不死之體。如至虛極也。似守靜篤也。相君命侍臣曰。此石不可無名。各以所思聞焉。於此諸子雖有所思。非無所懼。斟酌相半也。時小堀遠江守政一侍茶爐下。君有旨。政一卽起向石三呼萬年石。石三點頭矣。君下佳言曰。不疑是萬年石也。大度之一言以定天下。況於石乎。嗚呼石乎哉石乎哉。入于台覽。一旦發光。而陟變改其觀。蓋爲萬之言也。未必可以十千而限。凡數者始一而窮十。始十而窮百。始百則窮千。始千則窮萬。以萬算則不知幾十百千萬億兆年。以此無窮爲石之壽量。以石之壽量比君壽山。則累華頂萬八千丈。猶在麓者耶。以世計。則復不知其幾萬世矣。村語以銘曰。

重於九鼎萬年石。　鈞命如驚豈可輕。　和氣一團無盡藏。
以秋送復以春迎

住山老衲澤庵宗彭敬書

法寶堂（ほうだう）　一切經を收藏す。池より北にあり。當寺十境の其一なり。

方丈（はうぢやう）　書院内佛殿下等の杉戸、壁上の畫は、狩野探幽の筆なり。加茂巍巍、南都奠木能、其餘人物花鳥の類なり。

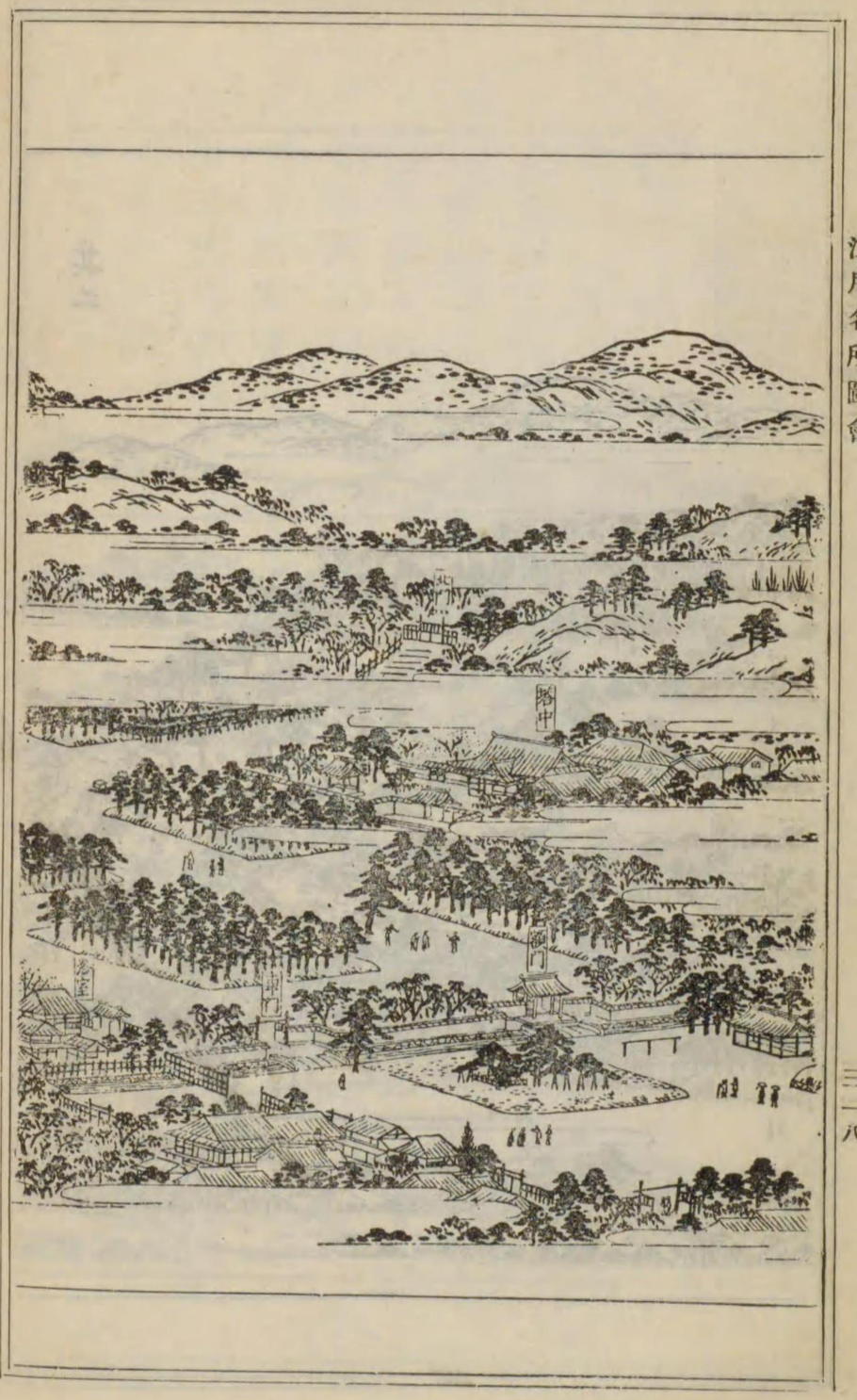
開山澤庵和尚廟（かいさんたくあんをしやうのべう）　方丈の西北の隅丘の上にあり。開山和尚の遺志により、石塔を建てず、たゞ自然の巨石を置く。左右に高さ三四尺程づつの石を、卅十立並べたり。是を羅漢石と號く。すべて廟地の趣は小堀遠州侯の指圖なりといへり。傍に和尚の行實を記せし石碑を建たり。是を慈隱塔と號く。當山十境の一なり。銘文左のごとし。

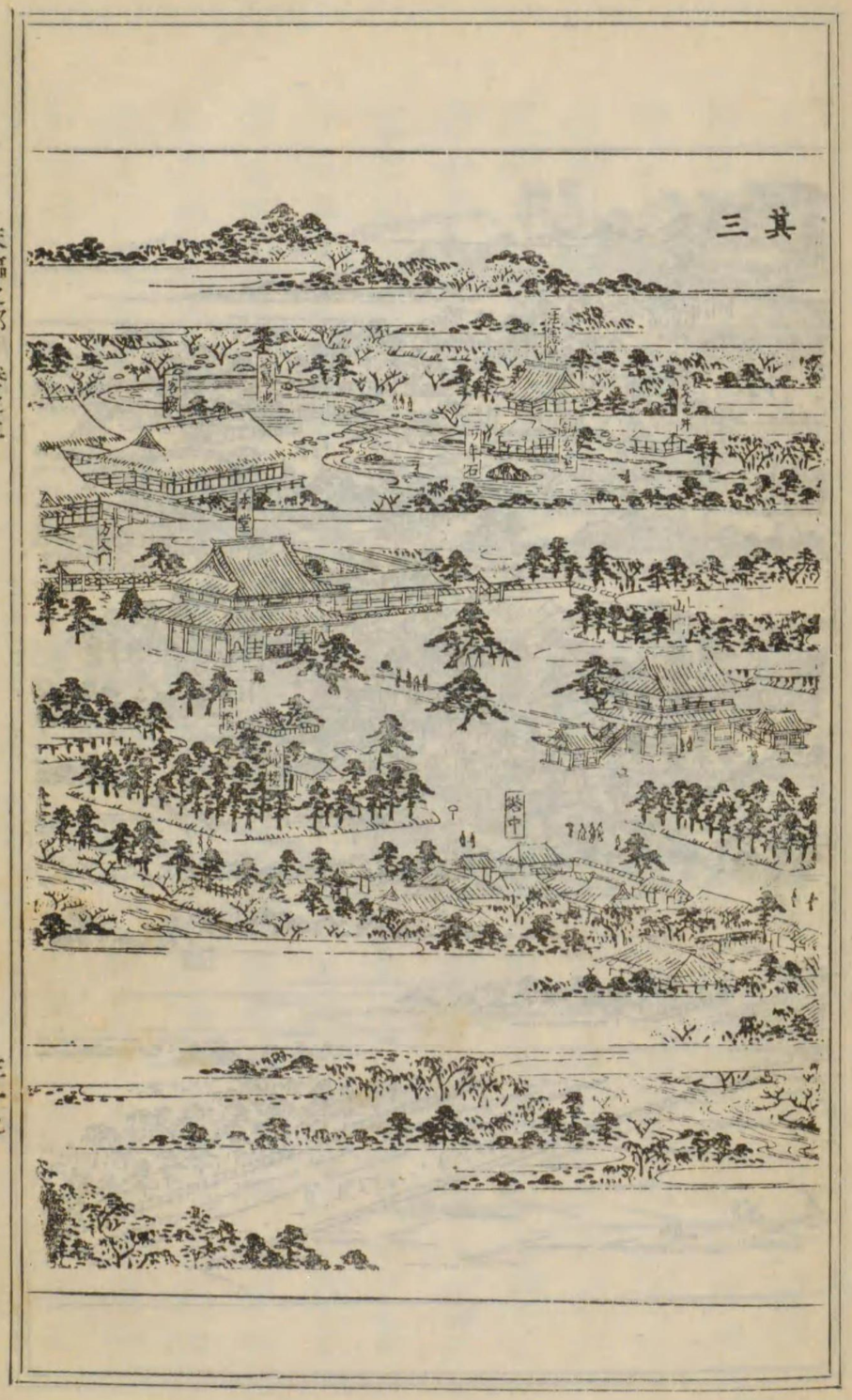
開山澤庵和尚塔銘並序

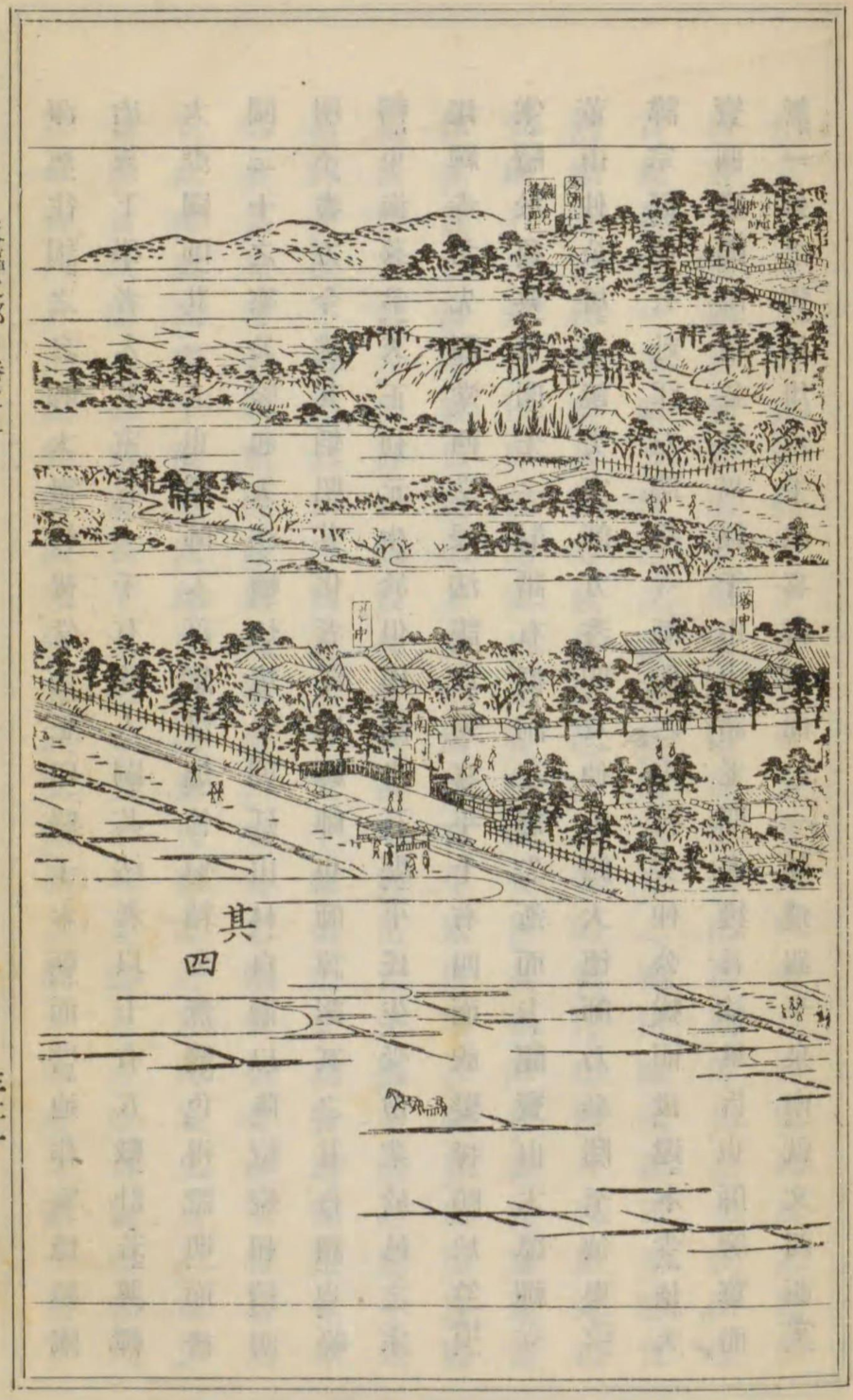
昔者。南浦明公。正元間。艤南遊。棹入大宋國。偏歷諸老。時虛堂祖翁主

牛頭天王社
東海禪寺

其二




其三


其四

淨慈。往謁之。參禪大徹。終提堂之正印。歸于本朝。而啓迪作家。爐鞴陶冶。天下學者入其室者。一千有餘人。嗣其法者。以十有五數計。若興禪大燈國師。其一人也。國師入萬鍛洪爐。恰似精金無變色。得證明。而後閱二十之寒暑。堅起大法幢。炫燿于朝廷山林。自爾以降。燈燈相續。明明不盡。方今挑其焰。昭其化者。澤庵禪師也。師諱彭。冥之其自謂也。晚稱東海暮翁。天正初元。生於但馬州出石縣。平氏。少受僧業於邑之宗鏡禪寺希先西堂。西堂授法諱。曰秀喜。年十有四而祝髮。探頤於竺墳。索隱於魯典。每聞先之酎醑。有徧詢之志。先逝而去龍寶山大德禪寺董甫仲公居宗鏡丈室。師方咨叩。及仲公歸大德。師乃參隨至彼粤。改諱宗彭。仲公赴江左瑞岳寺。師與之東行矣。仲公蛻而後。還本寺。依大寶圓鑒國師請益。亦周旋于山中諸老間。多獲言論風旨也。師穷窶而無一鉢之資。只雋永于法喜禪悅而已。一朝飛錫乎泉南。就文西西堂。

酌文字流。文西是黃龍泐下頭角。而尤老文學者也。西臨終焉之期。以所貯之典籍附師。初雲英偉公。玉甫琮公。以法器期師招之。弗就。明堂古鏡禪師一凍滴公。住邑之陽春菴。師亟見之。機辨縱橫。應答如響。實透網金鱗而頓響青驪也。鏡移同邑南宗寺。師執侍巾瓶。日夜參究。鏡知師有所契悟。授印證語。號曰澤菴。賦祇夜抒其義。師命畫匠。寫鏡壽像。索贊。鏡涉毫。書曰。龜面易描。中眉難寫。平素作略。入魔界而還降魔宗。活機自由。入佛界而能殺佛者。快。拂子突出云。父攘羊隱之底。不是彭禪子歷。予失笑云。何不問起大平天下。師領之珍襲寶護。同邑有宗無者。爲先考齋緇侶。殊請圓鑑國師。入室。師之酬對敏捷。而玉轉珠回也。此時鏡臥病于陽春。聞師勘辨。而驚異嘉謨云。眞跨竈兒也。於鏡歿也。師首衆陽春補席。慶長丁未。師年三十有五。遷本寺。板首繼臨德禪。同年秋八月。主龍興山南宗禪寺。經二年而入院于本寺。大德一香爲

古鏡。供住山。綽有古人風味。亡何告逝。還于泉南。泉南緇素。郊迎驩喜。如見黏佛。同邑有宗印者。創建一菴。名曰祥雲。延師爲開山祖也。師餬法語。慶之讚之。于泉南。于龍峰。視其去留。知其輕重。陽明殿下信尹公一夕入師禪室。問道。詰且馳書謝之。癸丑一新南宗之鐘樓。甲寅再造。大仙之拾雲軒。師禪坐之暇。編大燈年譜。收在雲門菴。乙卯。南宗羅鬱攸之災。師告邑宰。相攸於邑之南。再建南宗。不亟不徐。尋復舊觀。師視名利若塵埃。視聲色若泡幻。有時在泉南天下邑。而愛幽邃深靖。有時寓南京之芳林菴。韜光匿耀。有時入泊瀨勝槩。抱炯霞沈痼。有時僑城州薪之妙勝寺。守空寂生涯。爾後歸山陰之故里。構一把茆於宗鏡主山之下。扁投淵軒。折脚鐺內。煮麻麥粟豆。給日食。而無有飢色。寬永己巳。師有事。與玉室翁同貶于窮鄉遐徼。然師知其行止係數。不變容色。壬申。幕下降鈞命。召還二翁。師抵武陵。於城外民村一牛鳴之地。卓庵

曰撿束。暫寓止焉。幕下徵師於營中。時時問法要。睠遇優渥。耐望愈高。戊寅秋。師之京師。大上皇召入仙院。講原人論。辨瀾激起。如懸江河。皇情大悅。師奏。我山第二世徹翁。唯有禪師號。無國師號也。願下綸旨。上皇允之。圭章寶黑不日而下。謚天應大現國師。有功于曩祖。若此也。幕下於金城南品川創草梵刹。使師住持。山曰萬松。寺曰東海。落成之日。賦賀頌。致聲祝。厥後台輿入山。草木生輝。師奉鈞命。賦和歌一首。祈國基之鞏固。讖新筑之久昌。辛巳歲。降使本寺。出世制法。復舊規之鈞命。蓋是依師之所願也。有功于本寺。其可知也。正保乙酉夏。令畫師劃一圓相。相中親加一點墨。書于贊詞於其上。以爲壽宕。同年仲冬。示疾。預知緣盡。遺誡云。蹤全身於後山。莫誦經設齋。莫受道俗予賻。衆僧著衣喫飯如平日矣。且莫爲求謚號而煩朝奏。莫入木牌於本寺之祖堂。云云。彌月不痊。一日曉天。援筆書夢一字。泊然而逝。實十二月十一日也。

世壽七十有三。僧臘五十有九。瘞于全身於東海之西北岡。唯種松乎其上。不樹塔。蓋依遺命也。門人在泉南者。祥雲樹塔。名曰寂然。曩昔參學弟子武野氏安齋翁。往年昇師行實。求銘其塔。因循未果。今茲賚之不已。講習道義於乃師者。莫若余也。於翁亦然。故不揣蕪陋。聊記蔓乙。遂爲之。銘曰。

虛堂正派　流入日東　疏之鳴者　大應圓通
眞子嫡孫　大燈大現　開漚和門　且要鍛鍊
經過十世　古鏡生輝　圓陀陀地　路絕人稀
師扣其室　覿面相呈　衝樓跨竈　盛大光明
道播四海　眼空諸方　拔濟群有　東海舟航
挈矩疊規　眞履實踐　竪抹橫該　栗棘金圈
一圓相中　爲筆頭點　英姿逸群　纖塵不染
淵才泉湧　笑語春溫　老拳謹握　大堅當軒
語而明矣　默而冥之　負荷大法　扶顚持危
橫機峭峻　衲子一關　萬松嶺上　誰敢窺攀
姑射山裡　對御談玄　祥雲覆蔭　塔曰寂然
既息幻景　呼喚不回　如如正體　無去無來
作爲此銘　慙愧庸昧　德業長存　天覆地載

右泉南祥雲禪寺寂然塔銘竝序。五山之上。瑞龍山大平興國南禪禪寺住持。僧錄司最岳元良和尙。所撰。

寶曆三年癸酉冬十二月十一日。謄寫以立於萬松山東海禪寺慈陰塔下。

現住閑田義問併拜書

開山澤庵和尙影像一幅（かいさんたくあんをしやうのえいざう　ふく）　正保二年乙酉、師歳七十三、畫に命じ、一圓相を作らしめ、親ら一點を其中に加へ、讃語を上に書して以て壽容とす。かくの如きもの二軸、一は則當時寺に置く。一は則泉南の南宗精舍に藏せり。讃に云く、

無名子告予曰。邈得和尚之眞。展見則一圓相也。山野點一點。卽書曰。昔日仰嶠已燒。六代圓相。龍抓蒼海。重錄九十九箇蛙輾泥沙。南泉曾劃一圓相。歸宗坐其中。麻谷作女人拜。趙壁元無瑕類。相如漫誑秦家。今此圓相包天地。無外窮塵利。無涯無邊。世界如麥似豆。此裡衆生。似粟如麻。九流分列。門戶六藝。起修籬笆。彼諍麟鳳。此決龍蛇。人物是太敍。俊乂亦不些。十方薩埵列星宿。五百羅漢出雲霞。我爲其主張法王。法身全體顯。諸人見我麽。時雖中間。不待後進彌勒。不慕前來釋迦。阿難摧寶蓋。迦葉抱袈裟。宗彭杜多。却增聲價。阿闍世王。妄起嘆嗟。不尊文殊師。頻呼衣蒲。童子課湯菓。不窺維摩詰急引金粟如來。役飰茶。下方聲聞侍我履。四果聖者御我車。有意氣時添意氣。請看闍羅老。斫額以望我。冥官等踊躍。如得爹。我猶乘勢縛獄卒。播扭械。捉憤鬼。負鐵枷。五逆衆生。抃野喜。奈落罪人。得時誇。快然快然。我這裡。今日萬般已治。藥病相瘥。佳衲子只莫所取。無好底法莫所捨。無嫌底法若任違順境家山路猶賒。噫此決從前絕等差。隸中正者落邊邪。佛經祖傳錄方語。點檢將來空裡花。

正保第二乙酉閏五月七日　　前住大德見東海比丘某老齡七十三

ある人この影を拜して

澤庵の御影は丸に一天下東海道に隱れござらぬ

あがたるうしの塔中少林院の後山にあり。當院過去帳に、玄珠院眞淵義覺居士とあり。明縣居大人墓　和六年己丑十月晦日、歳七十三にして身まかれり。猶第壹卷に詳なり。

なんくわくしんせいのにか同上卵塔にありて、一家の墳墓並び建てり。先生姓は服部氏、諱は元喬、字は子遷、俗稱小右衛門、南郭は其號なり。南郭先生之墓　先尾州津島七黨の一にして、曾祖父某、越中國高島に徙る。父の諱を元短といふ。京師に移る。母は山本氏なり。天和三年癸亥生る。歳十四江戸に來りて、徂徠先生に業を受け、後三年柳澤侯に仕ふ。後十八年改仕し、寶曆九年己卯夏六月廿一日卒す。壽七十七といふ。墓碑の銘文はこゝに畧す。其碑に從四位下侍從源賴鄰撰、臣高元碩謹書とあり。

かまくらのごんごらうかげまさのれいし鎌倉權五郎景政靈祠　同所春雨庵の後の山にあり。來由知るべからず。此庵は土岐家累世の祖廟にして、開山澤庵和尚、寶永六年己巳より同九年壬申に至る迄、羽州上の山に謫せられし頃の草廬、春雨庵を移されたりとなり。

このてらは品川の勝區にして、門前の綠水は潺溪として、品川の流海口に通す。屋後は青山崔嵬

として、祇植の祠松間に聳ゆ。茂林脩竹風颯沙鳥の勝覽、筆の及ぶ所にあらず。殊更力丈の林泉は、小堀遠州侯の差圖にして、庭作の規範とす。都て滿地青松丹楓枝葉を交へ、晩秋の奇觀、錦繡を晒すが如し。常に寂々寥々として、實に禪心をすましむるの一巨藍たり。

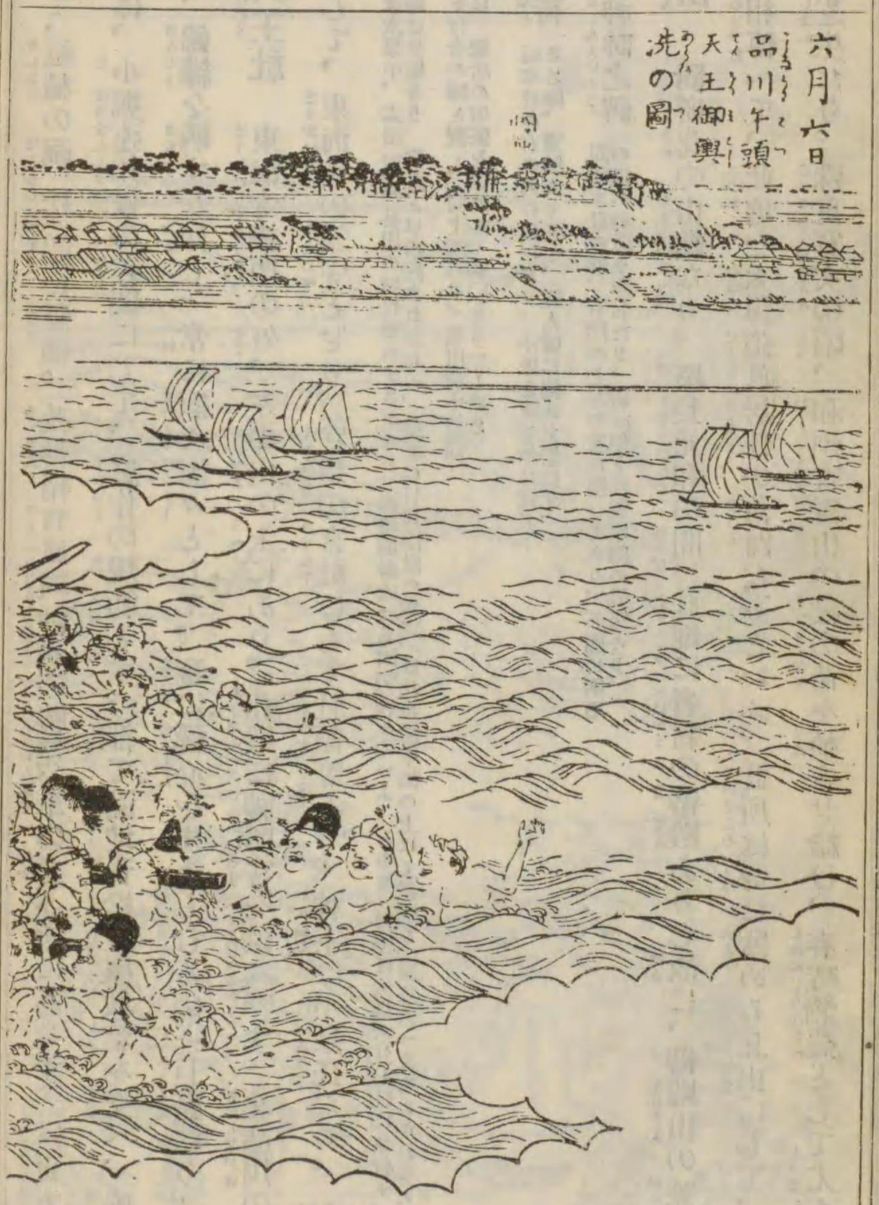
牛頭天王社　東海寺柵門の外、左の山の上にあり。相殿に神明宮を勸請す。北品川の產土神にして、東海寺の鎭守とせり。官造の宮社にして社領等あり。神主は小泉氏なり。江戸名勝志に、牛頭天王は永享中、太田道眞品川の城に勸請する所なり。洲崎明神或は品川明神ともいふ、とあり。祭禮は例歲六月七日に執行す。南品川の產土神は貴船なり。當社とは由緒あればにや、祭禮の日は兩社の神輿、庄北の驛中橋の上にて行逢ひ、又左右へ立ちわかれまゐらす。故に此橋を行合の橋と號く。同十九日まで品川驛中往還の中央に、旅所の假家を儲けて、神輿をうつし奉る。

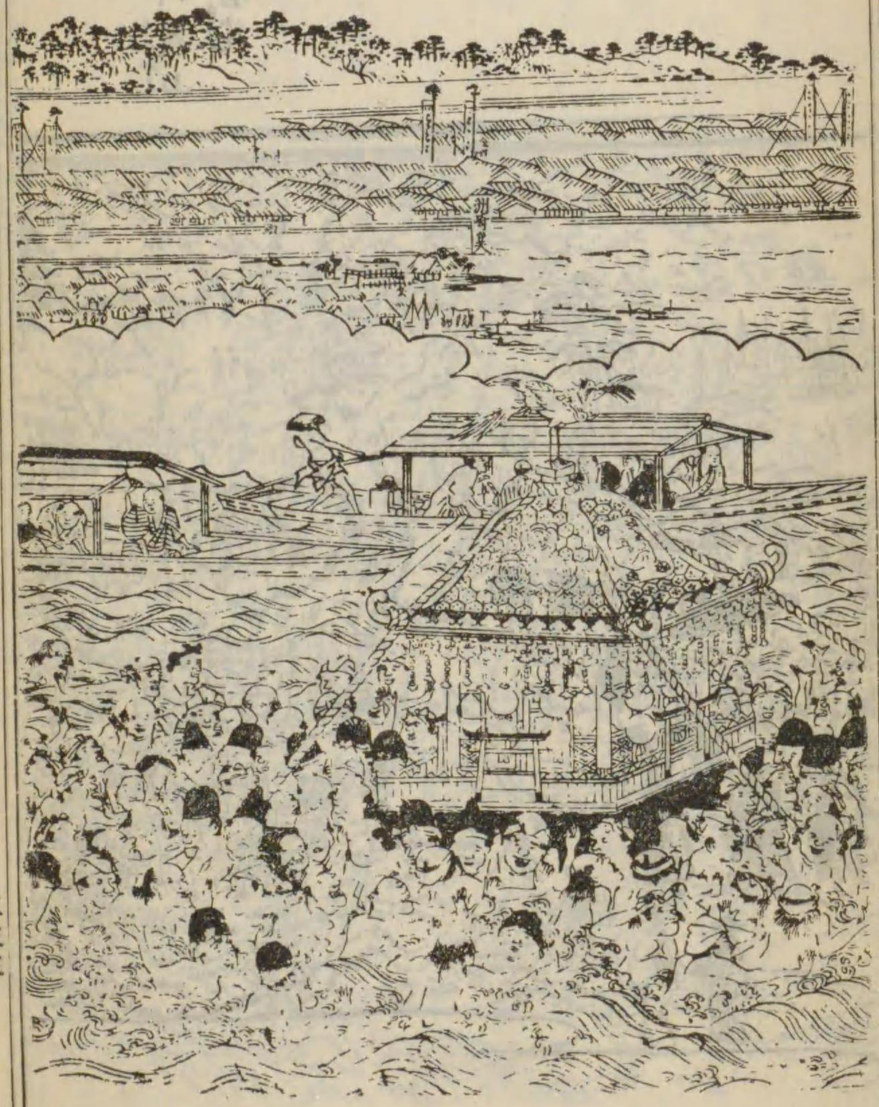
坂稻荷　同本社の右の方の奥にあり。小坂を下る故に此名ある歟。靈驗ありとて、諸人常に絶えず崇信す。

柿本神詠之碑　同所本社の前、石階の上左の崖に臨みてあり、石面に明石の浦の神詠を彫付たり。神祇伯卜部兼雄卿の眞筆なり。

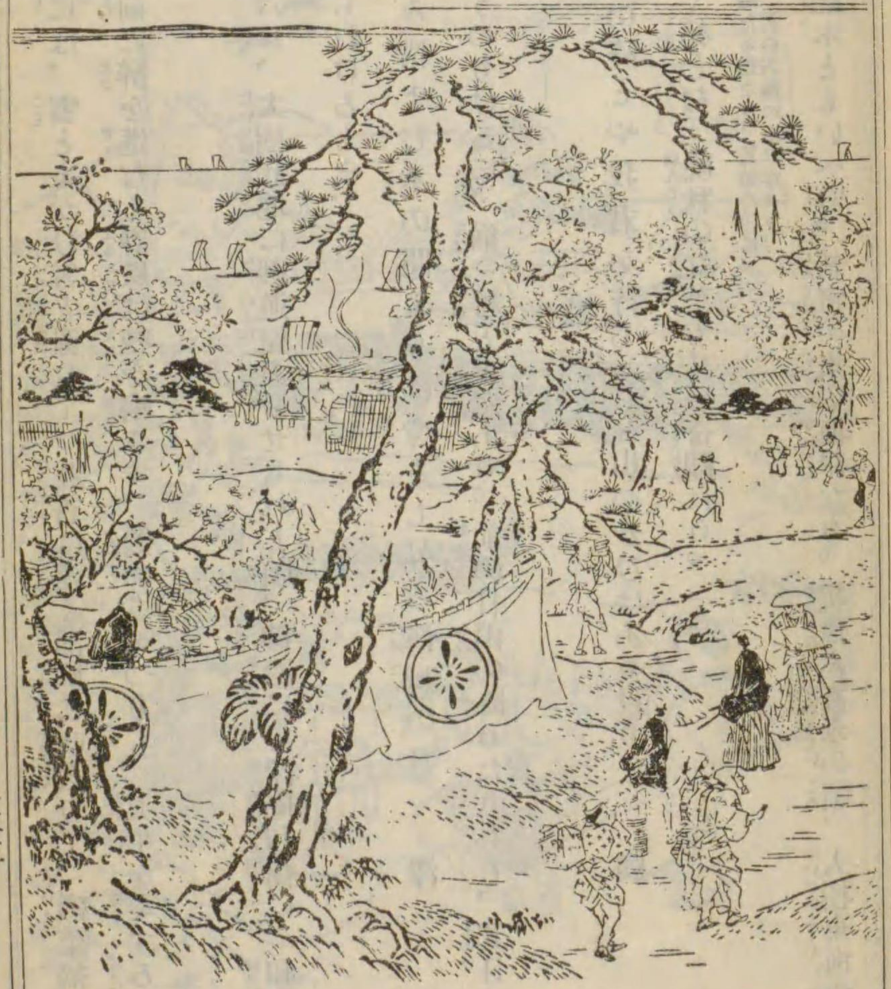
御殿山　同所北の山續なり。慶長元和の間、此地に省耕の御殿ありし故に、御殿山の號あり。土人相傳へて、此地を太田道眞居住の舊趾なりといふ。此所は海に臨める丘山にして、數千歩の芝生たり。殊更寛文の頃、和州吉野山の櫻の苗を植させ給ひ、春時爛熳として尤も莊觀

六月六日品川午頭天王御輿洗の圖





御殿山看花



たり。彌生の花盛には、雲とまがひ雪と亂れて、花香は遠く浦風に吹送りて、磯菜摘む海人の袂を襲ふ。樽の前に醉を進むる春風は枝を鳴さず、鶯のさへづりも、太平を奏するに似たり。

寛永十七年九月十六日、大樹此地に御遊獵あらせられし頃、御殿にて澤庵和尚に、和歌一首を詠ずべき旨命ぜられけるとき、

夕ぐれを惜み惜まむ木の間よりはやさし昇る海越の月　澤庵

月の光の御杯にうつりけるに、猶一首と上意あり。前の日雨の降りたりしも、其日は止て空晴わたりたり、

降る雨も今日の時とや我君を待ちえし山のかひはありけり　同

享保の頃、櫨を多く植しむ。晩秋の紅葉も又一奇觀たり。

鑄鐘松　增上寺の鯨鐘を鑄たる地なり。其跡の辺に植えたる松なり、北の方畠の中に存せり。

問答河岸　又御船雁木ともいへり。新宿の東の海岸なり。相傳ふ寛永の頃、大樹東海寺へ至

らせ給ひし頃、御歸りの時、澤庵和尚御後を見送り奉り、此所迄來り　御問答ありしとなり。故に此唱ありといふ。

磯の清水　御殿山の麓、清水横町と云ふにあり。往古は此邊までも、磯邊なりしとなり。此井清泉にして、旱魃にも涸る事なしといへり。或人云く、昔砂利を掘出したる跡なりとぞ。

品川驛　江府の喉口にして、東海道五十三驛の首なり。日本橋より二里南北と分つ。東海寺の南に傍ひて、貴船の社の側を流るゝ川を堺とす。或人云く、是則ち品川と稱する所の水流なりと云々。旅舍數百戸軒端を連ね、常ににぎはしく、往來の旅客絡繹として絶ず。

梅花無盡藏曰。

品川。注云。隔五十町。有江戸城。多法華宗云々。

双塔五層兼一層　問宗旨答法華僧

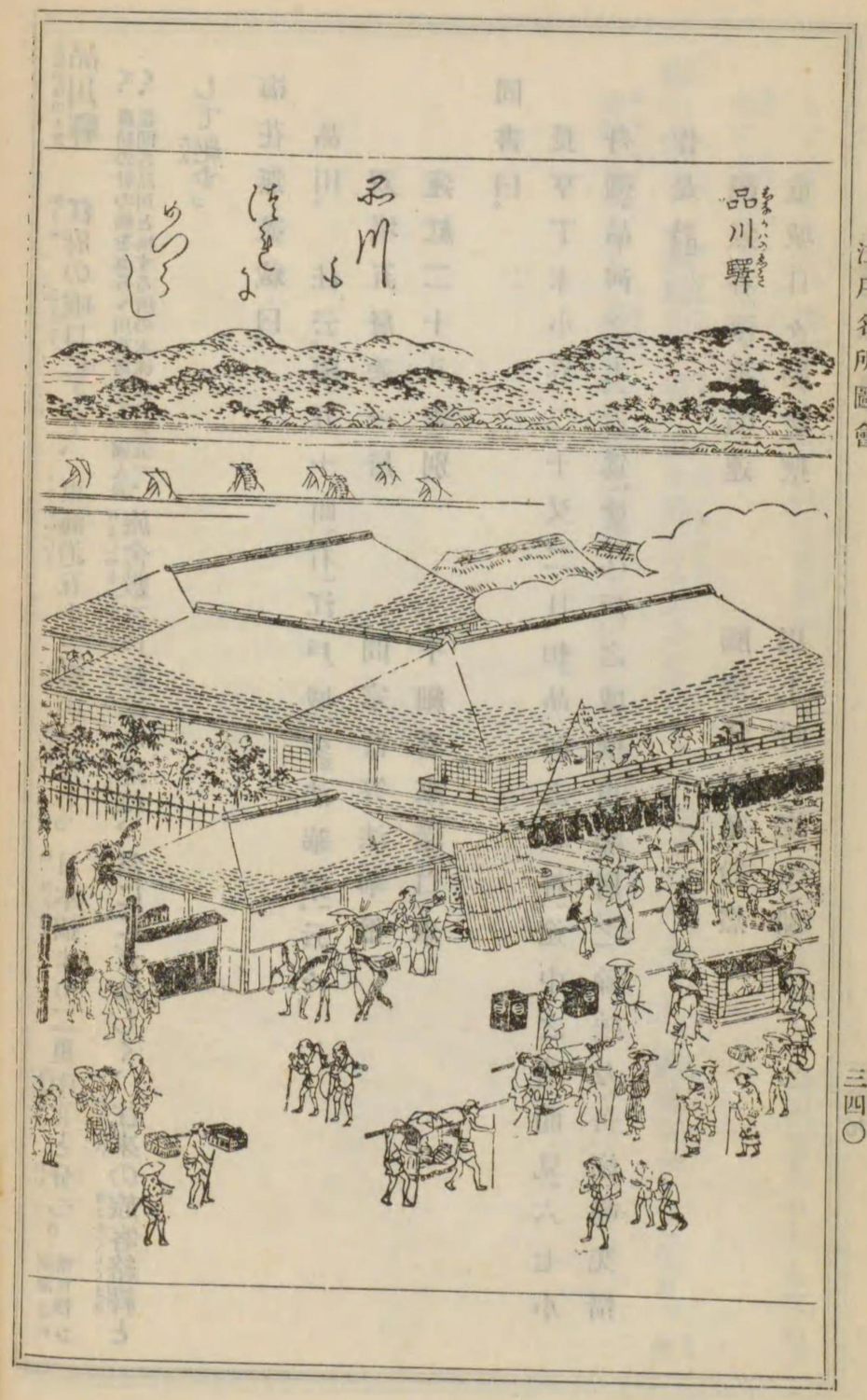
蓮紅二十八差別　子細看來滿口氷

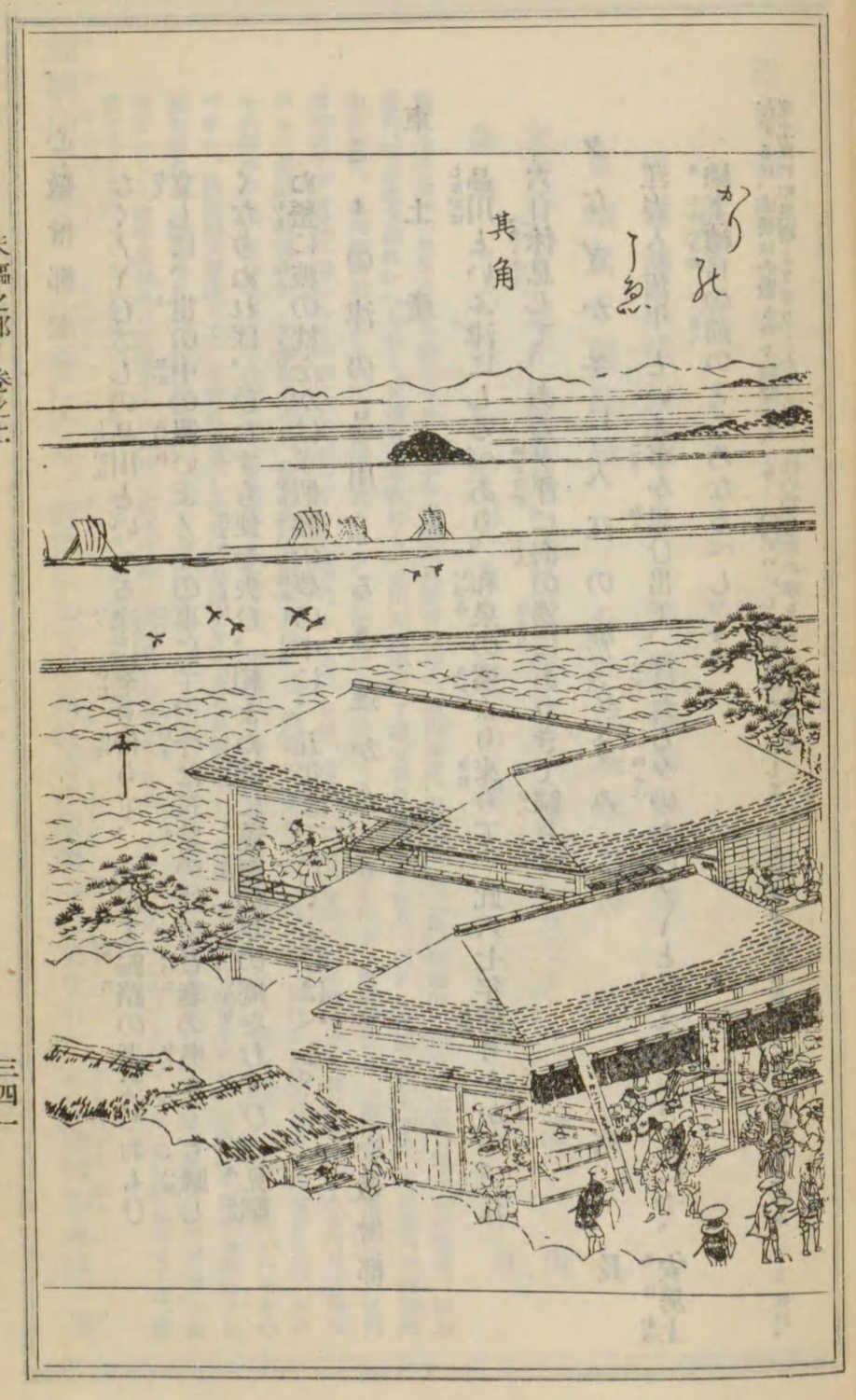
同書曰。

長亨丁未小春二十又二日。扣品河之岐軒。途中之濱而見六七小舟搬品河之土。蓋爲塗江戸之城壁也。騷屑之餘殃及舟楫。嘆无惜作是詩。

潮氣呑濱萬頃連　觸蠻無地不紛然

重城日々勤塗壁　馬上吟看搬土船


品川驛


其角

心敬僧都記

なく〳〵むさしの品川といへる津に至り侍りて、やがて歸路の事などおもひ立しに、世の中の亂いよ〳〵の事にて、今は筑紫のはて吾妻の奥までも騒しくなりぬれば、ひたすら便を失ひ、頼まぬ磯に藻鹽の草の庵をむすび、見馴ぬ蜑に波の枕をかはす假寢の夢の中に、五年までたゞよひはべる。

こゝの津の品川しるき蓮かな　心敬僧都

東土産

品川といふ津にしるべあり。和泉の堺より來りて、此六七年住りとかや。五六日休息して、ある夕汐に海の邊にありきて歸りて、

夕なぎか冬に入江の朝がすみ　宗長

江春入舊年といふ事を思ひ出て、汐たる夕のおぼ〳〵と見え渡るさまにや、安房上總下總目の前のところなるべし。下略

按ずるに、宗長は心敬とほゞ同時の人なり。心敬いにしへ和泉堺の人にして、こゝに來りし事は先にしるせる紀行に詳なり。されば、東土産に和泉堺より來りてとあるは、此心敬僧都の事をいふなるべし。

澤庵和尚京都記行

過品川。

橋過品川倚旅亭　智音携酒好叮嚀

又相別去問前路　吾此生涯水上萍　澤庵

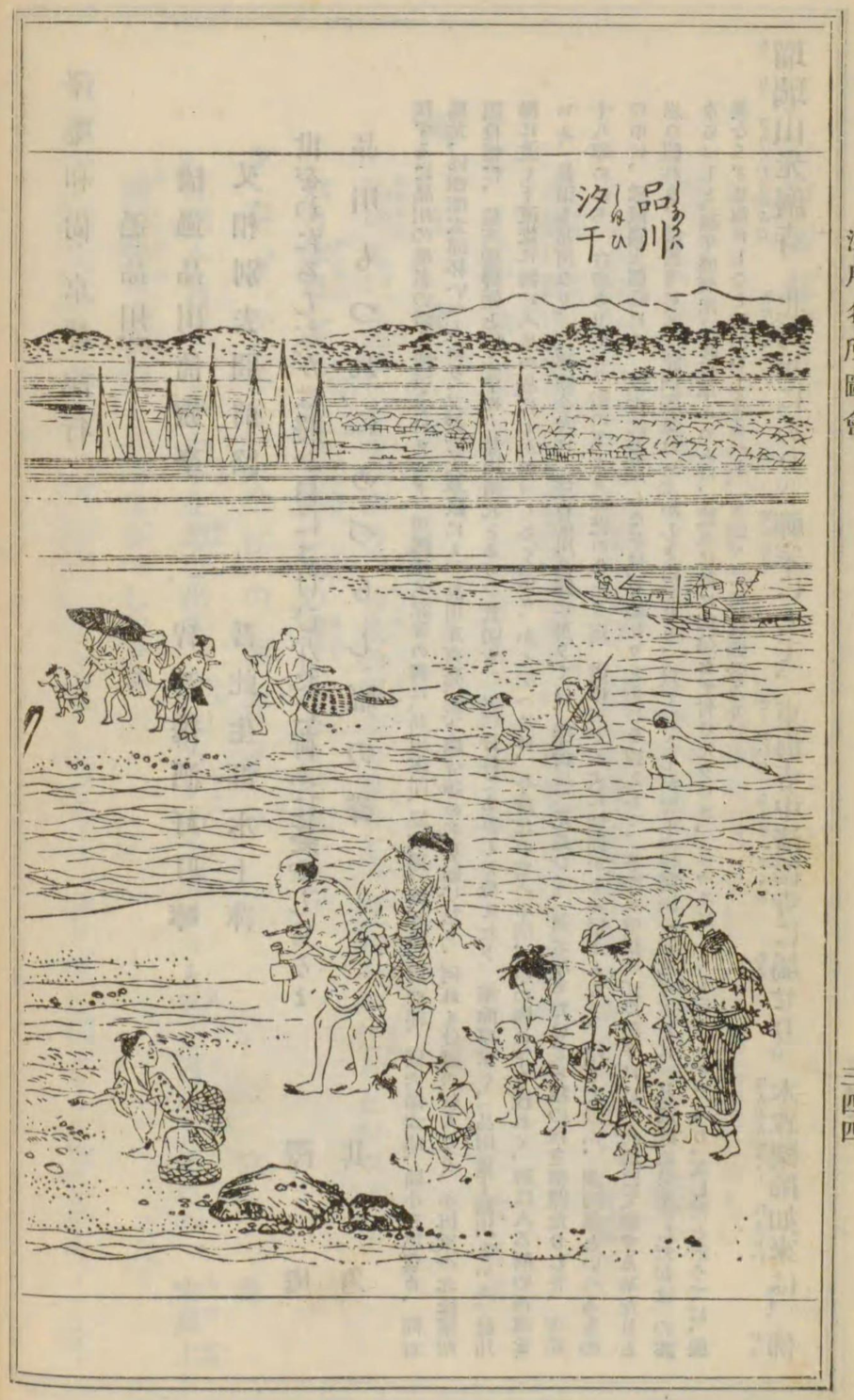
世をわたるしながは賤か口にさけびかたに荷ふに憂やしらるゝ　其角

品川もつれにめづらし雁の聲

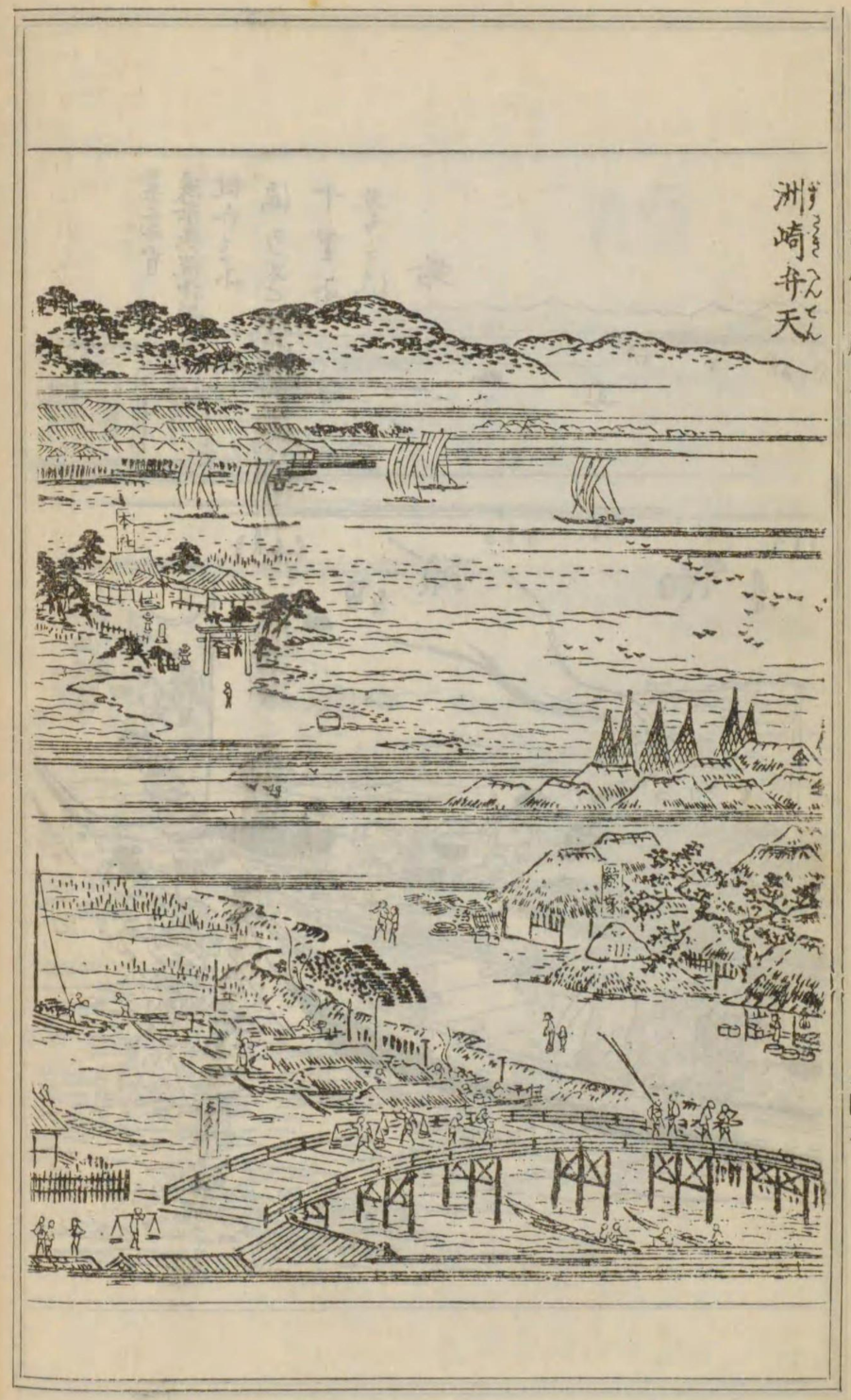
按ずるに品川の地名の發る所近きにあらず。東鑑承久記等の書に、品川太郎、同次郎、同三郎、同四郎、同六郎太郎、同小三郎實貞、同右馬允、同四郎太郎杯いへるあり。又鎌倉大草紙にも、品川左京亮、同下總守等の名を擧げたり。何れも此國の住人なり、小田原の北條家所領役帳に、葛西樣御領といふ中に、品川南北とあり。其頃も二つに分れてありしと覺えたり。南向亭云く、「品川舊下無川といふ。此川海に近く下流直に海に入るの故にしか名づくる」と云々。かく云へるは、今南北の宿の中間、中の橋の下を流れて、海に入る所の河流を、乘掛爲二疋並びて、通る事あたはざる程の狹き溝路なりしを、天正十八年ののち、台命ありて、八山の下より本芝のあたり迄、道巾三十五丈に切開かしめ給ふとなり。附して云ふ、訓閲集といへるものの中に、武藏國大渡莊にて、往古此奈革（しながは）を染たりとあるを據として、冬涉が增補の江戸砂子には　此地にて製する革なりと思ひ誤れり。偽書考にも、此訓閲集はいぶかしき由記せり。以て證としがたし。伊勢家の說を考ふるに、品革は鹿朶革（しだがは）の誤なるべしと。源平盛衰記に此奈革といふは、藍革に紋に鹿朶をぞ付けたりける、とあるにて、しるべしといへり。又しだと云うては、優美ならざる故にしなとは云ひしなるべし、と云々。たなは通音なり。

瑠璃山光嚴寺　北馬場にあり。禪宗にして、東海寺中清德寺に屬せり。本尊藥師如來は、佛

品川汐干



水平三年二月
後奈良院御撰
謎合せの
海のさと
十里ホ
ばかりの
蛤



工春日の作なり。當寺は太田持資の建立にて、その影像もあり。

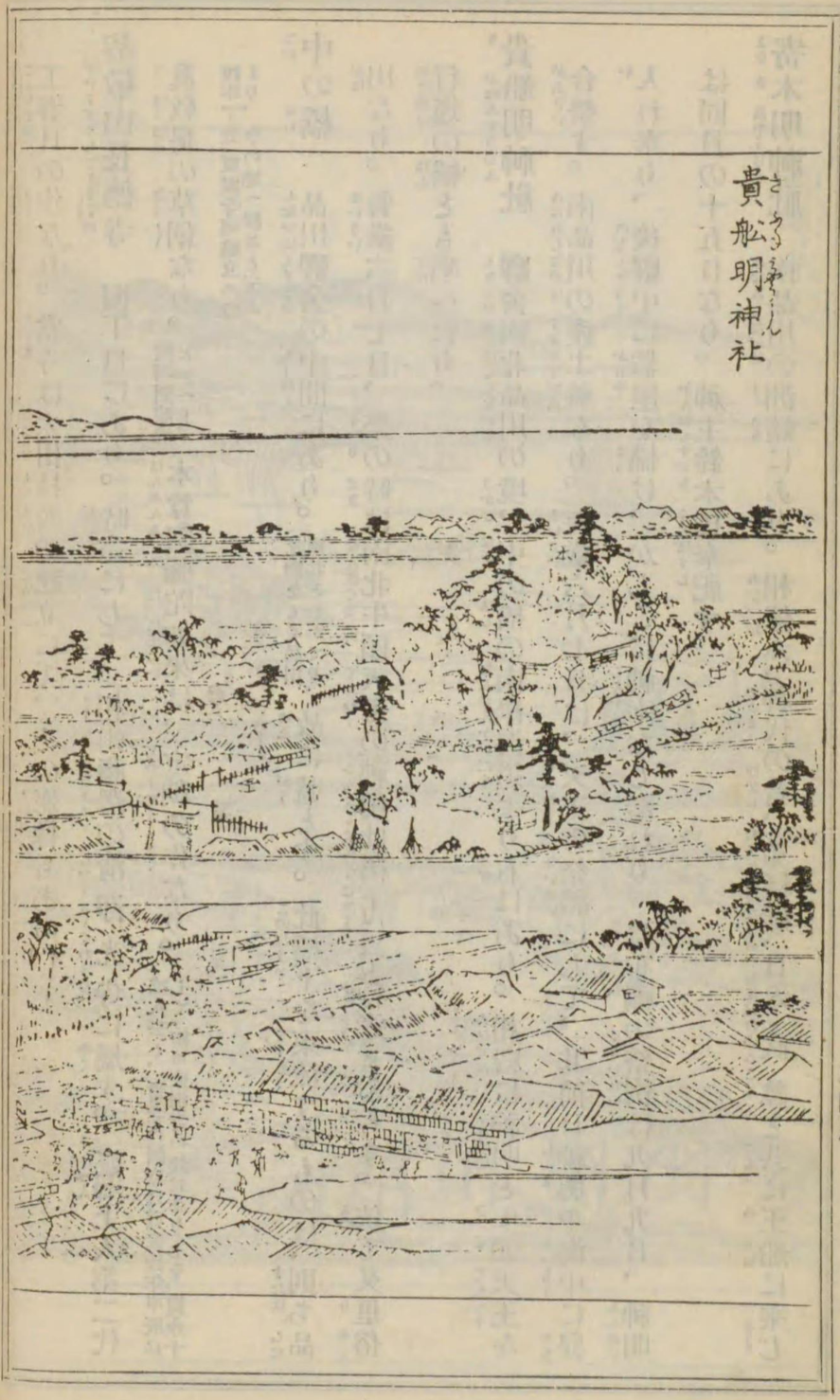
恭敬山長德寺　四丁目にあり。時宗にして、相州藤澤の清淨光寺に屬す。一遍上人第二代眞教房の草創なり。佗阿彌陀佛といへり。本尊阿彌陀如來は、定朝の作なり。或人云く、當寺の創立は寛文四年甲辰にして、始め東海寺の地にありしを、寛永十四年丁丑、東海寺創建立の時より、今の地へ移ると云ふ。

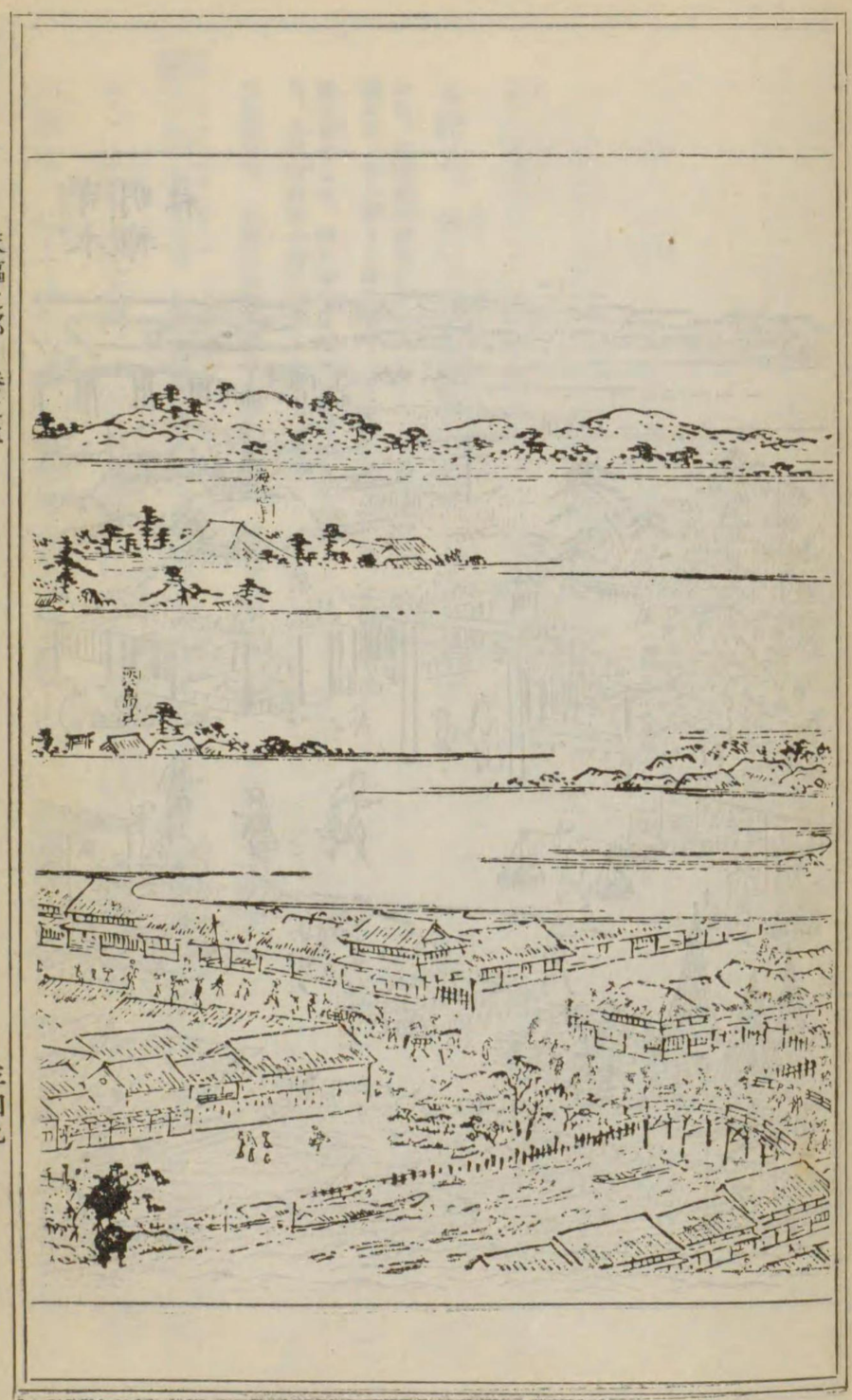
中の橋　品川驛舍の中間にあり。此橋をもて品川南北とわかてり。故に號とす。此橋下を東流するものは、則ち品川なり。毎歳六月七日、祭の時は南北牛頭天王の神輿此橋上にて行逢まるらす。依て又里俗行逢の橋とも唱へたり。

貴船明神社　驛舍南北品川の境、中の橋の南岸海道より右にあり。相殿に神明と牛頭天王を合祭す。南品川の產土神なり。毎歳六月七日は、天王の祭禮にして、其前日神輿を海中に舁入れ奉り、後驛中に假屋を儲け、かしこに神幸なし奉れり。貴布禰の祭例は九月九日、神明は同月の十五日なり。神主鈴木氏奉祀す。

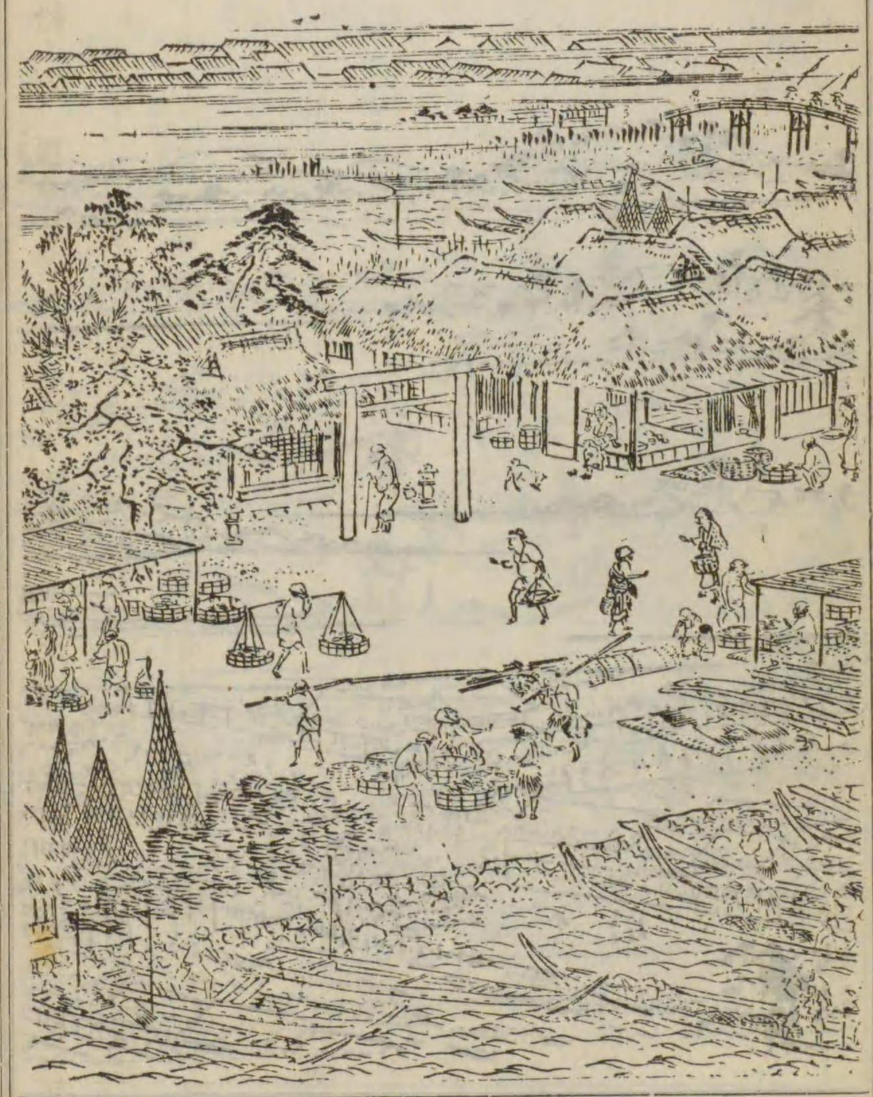
寄木明神社　南品川の洲崎にあり。相傳ふ、神代の昔、弟橘媛、日本武尊と共に王船に乘じ

貴船明神社





寄木明神社

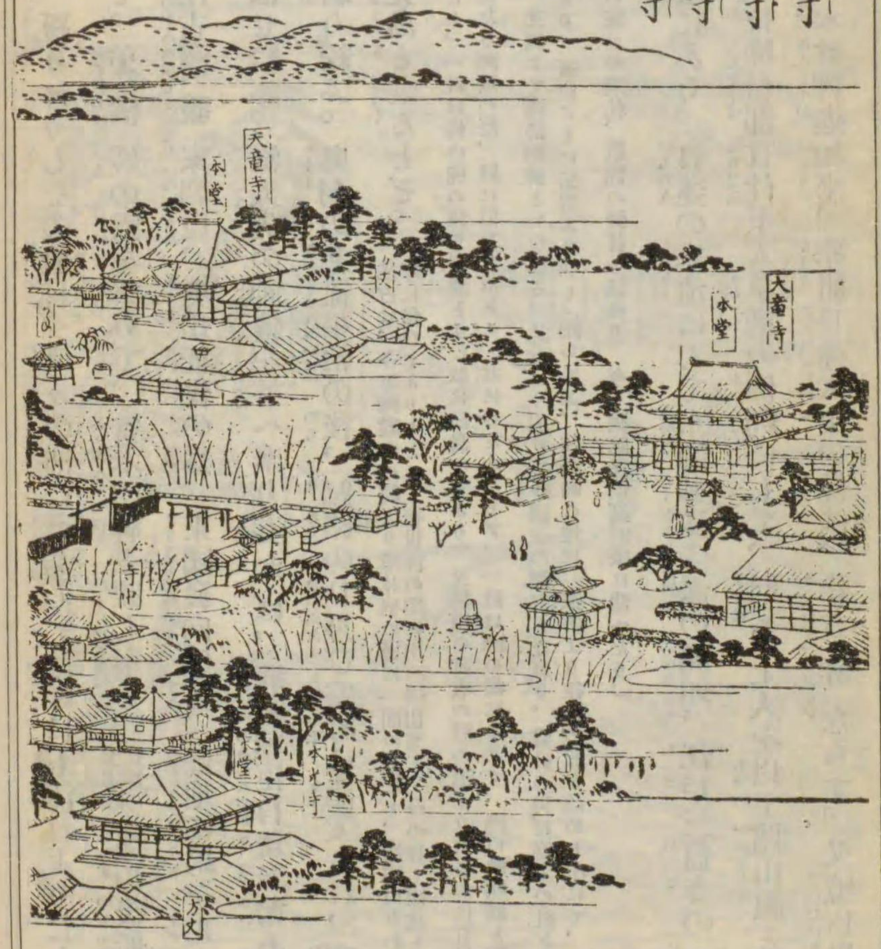


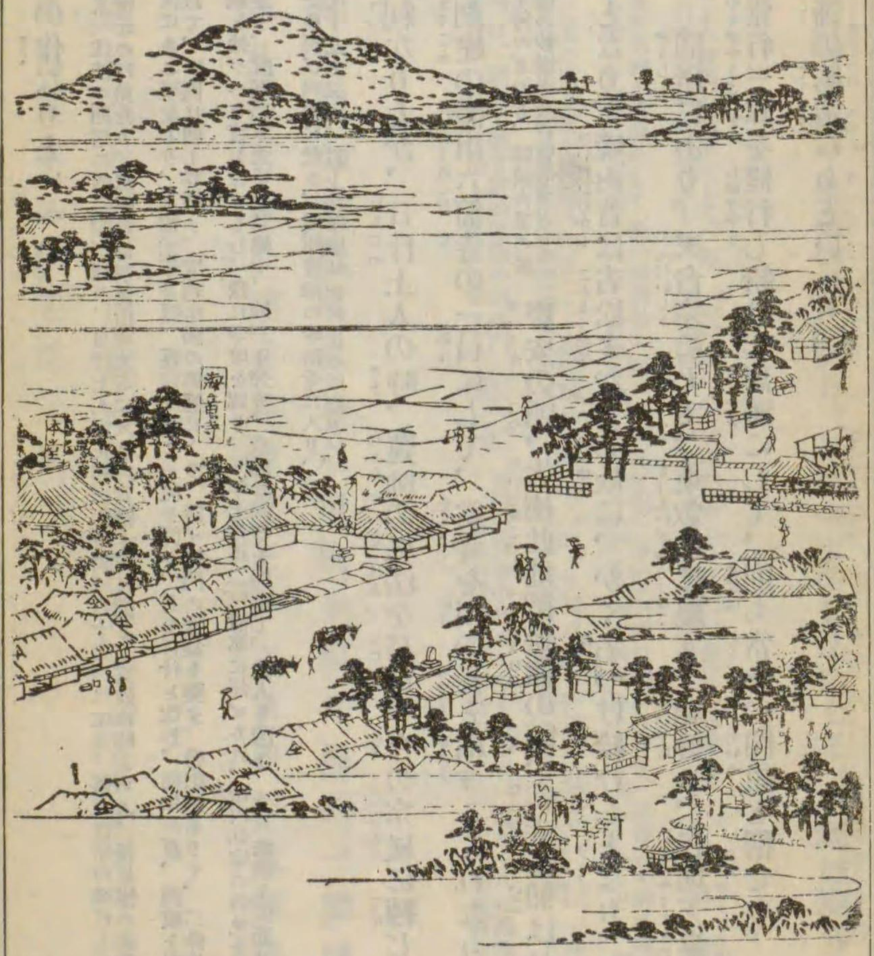
此海上を渡り給ふ頃、覆りたりしその船材、所々の浦に漂滔し、此地にも流れよりたりしかば、土人一社に奉じて、弟橘媛の靈を祭りて、寄木明神と號し奉る。又奇來に作る。遙の後船魂西宮大神を合殿とす。往古源義家朝臣、奥州征伐の爲、東國發向の時、此地に馬を止め、漁人に當社の來由を問はせ給ふ。漁人先の神傳を答へ奉りしかば、義家朝臣自親奉幣ありて、軍の勝利あらん事を祈り給ふ。奥羽の逆亂平治の後、歸路の日再び當社に詣でられ、兜を收め給ふ。故に此地を兜島と號るとぞ。往古は、今の御殿山の麓より南北宿の邊は一面の洲にて、漁家のみわづかに山岸に傍ひてありしとて、後世洲の間に川の流出來て、今の如く南北と二つにわかる。其頃此御神をわけて二社とし、一社は件の兜の紐を神體とす。(故に紐島の名あり)。又橘媛の御衣の紐の流よりたる故に名付とも、一說には、山の麓より細く海中へ出たる洲崎の形、紐に似たる故とも、共にさだかならず。一社は洲の崎にありて、洲の崎明神と號けしが、後に至りては、洲の明神と唱へ　又轉じて諏訪明神といひ誤る。此社は今引けて妙國寺の鎭守となれり。當社の外に寄木の社と稱するもの、品川河崎等の間に往々これあり、來由こゝに云傳ふる如し。(附いてふ、此洲崎の地は、往古より往還の船を改めし所にて、遠見の番所を居置き、北條又山内上杉等の家々の制札、數箇の條目を注せり。今も猶此地何某が家に傳へたり。)

經王山本光寺

南番場にあり。日蓮の宗流にして京師妙滿寺派の觸頭、江戸三箇寺の一室たり。永德二年壬戌、二位權僧都日什上人草創の佛刹にして、則ち上人を以て開山祖と稱す。中興は日鏡上人なり。本尊釋迦如來、宗祖日蓮大士の像は、作者詳ならず。又境内鬼子母

本光寺
大竜寺
天竜寺
海竜寺





神の像は、日蓮大士の作なりといへり。

開山日什上人墓　當寺累代住持の卵塔の内に竝び建り。日什上人は正和三年甲寅三月十七日に生る。舊天台宗の徒にして、叡岳の慈遍僧正の法弟たり。奥州會津羽黒山東光寺に入る、其德十方に徧し、玄妙法印といふ。後思惟の志趣ありて、末代相應の宗立は、蓮師の弘法にある事をしり、永德元年辛酉、舊宗を棄て一流を開き、名を日什と改む。同年の夏、關東を出て花洛に至る。其德行叡聞に達するを以て、所關に朝し昇殿す。鷹司中將の傳奏により、謹て宗門の益を奏す。帝叡感ありて、二條攝政源義滿公をして、寶祚延長の御祈精誠を抽づべき旨を命ぜしむ。殊に寺境を賜り、同年七月正二位僧都に任ぜられ、洛内弘宗の勅免を得たり。其年關東に赴き、同二年當國に至り、此塚に本光寺を草建す。同三年癸亥、京師妙滿寺を開創し、衆人を導き、大に法義を弘通せり。又京師在住年月を經て、明德三年壬申再び關東に赴き、奥州會津の妙法寺に入り、同年二月廿八日化寂あり。歳七十九と云々。以上法華靈場記に出る所なり。

當寺往古は眞言の古刹なりしが、日什上人の時、蓮師の弘法を慕ひ、今の宗風に轉じて法華道場とし、則ち上人創建の體用六箇寺の一員にして、當寺を用の長と稱するこれなり。六箇寺とは、所謂奥州會津の妙法寺、遠州見付の玄妙寺、同國吉美の妙立寺、相州鎌倉の本興寺、京師の妙滿寺及び當寺等なり。慶安の頃、大樹此地御遊獵の頃、當寺に憩はせ給ひ、松の寺と上意ありしとなり。境内昔は古松多かりし故に、かく名づけ給ひしとなり。

熊野山常行三昧寺　同所にあり。天台宗にして、東叡山に屬す。相傳ふ、仁明天皇の嘉祥元年戊辰、慈覺大師常行三昧を修行し給ひし舊跡にして、則ち當寺の開祖と稱せり。本尊阿彌陀如來も、同じ大師の彫造なりといへり。

鳳凰山天妙國寺　常行寺の南、海道の右にあり。日蓮大士の弘法にして、京師妙滿寺の觸頭、江戸三箇寺の隨一なり。

本堂日蓮大士像　天目上人授與の靈佛にして、毎歳十月十三日諸人に拜せしむ。五層塔　文安年間建立すと云ふ。多寶塔　緣記に日敎造營すとあり。諏訪明神祠　當寺の護法神なり。此祠は、先に記せし寄木明神と同神にして、洲の崎明神と稱せしを、後世誤り傳へて、洲の明神と唱へ、又諏訪明神に轉稱す。竟に祠をも此所にうつして、來由を失ふに至る。土俗傳へて、昔は社領の地、海の面へかけて十八丁四方ありしと云ふといへども、定かならず。

二王門　左右に金剛密跡の二王の像を置く。運慶の作にして、靈驗掲焉といふ。二王尊なりしとなり。山王宮後東叡山へ御還座なしたまひし頃、二王尊は常寺へ附し給ふといふ。總門　東海道名所記にいく、妙國寺といふ法華寺あり。此寺の門は、駿河大納言殿御屋敷の御成門を引建てらる。こゝより栗石を取り、江戸に出して賣ると云々。鯨鐘　舊鐘は文安中鑄冶せしものなり。寛永十八年鑄改しとみえて、舊鐘の銘文に、再造の人の名ならびに年號等を鐫めたり。

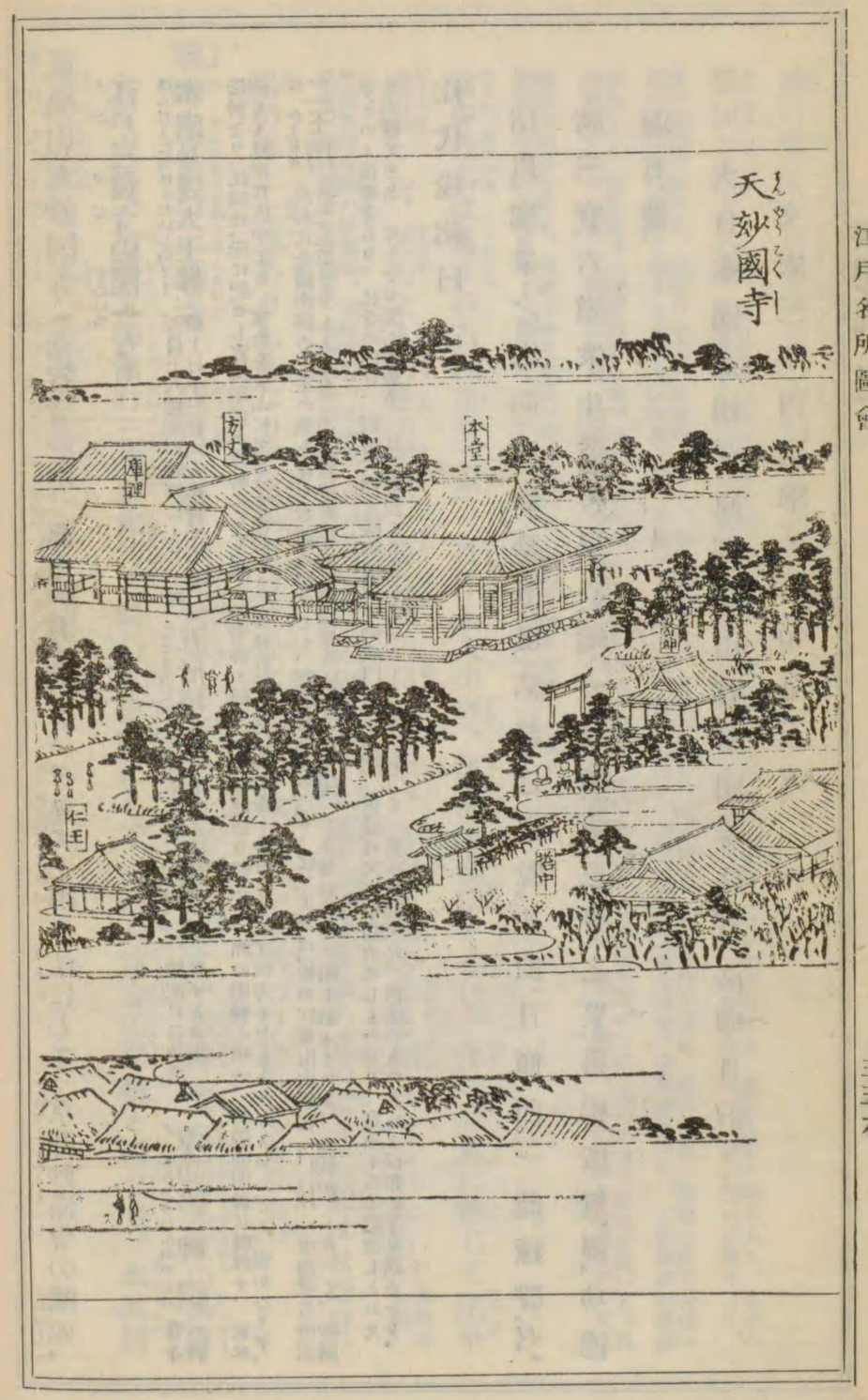
往代鐘銘曰

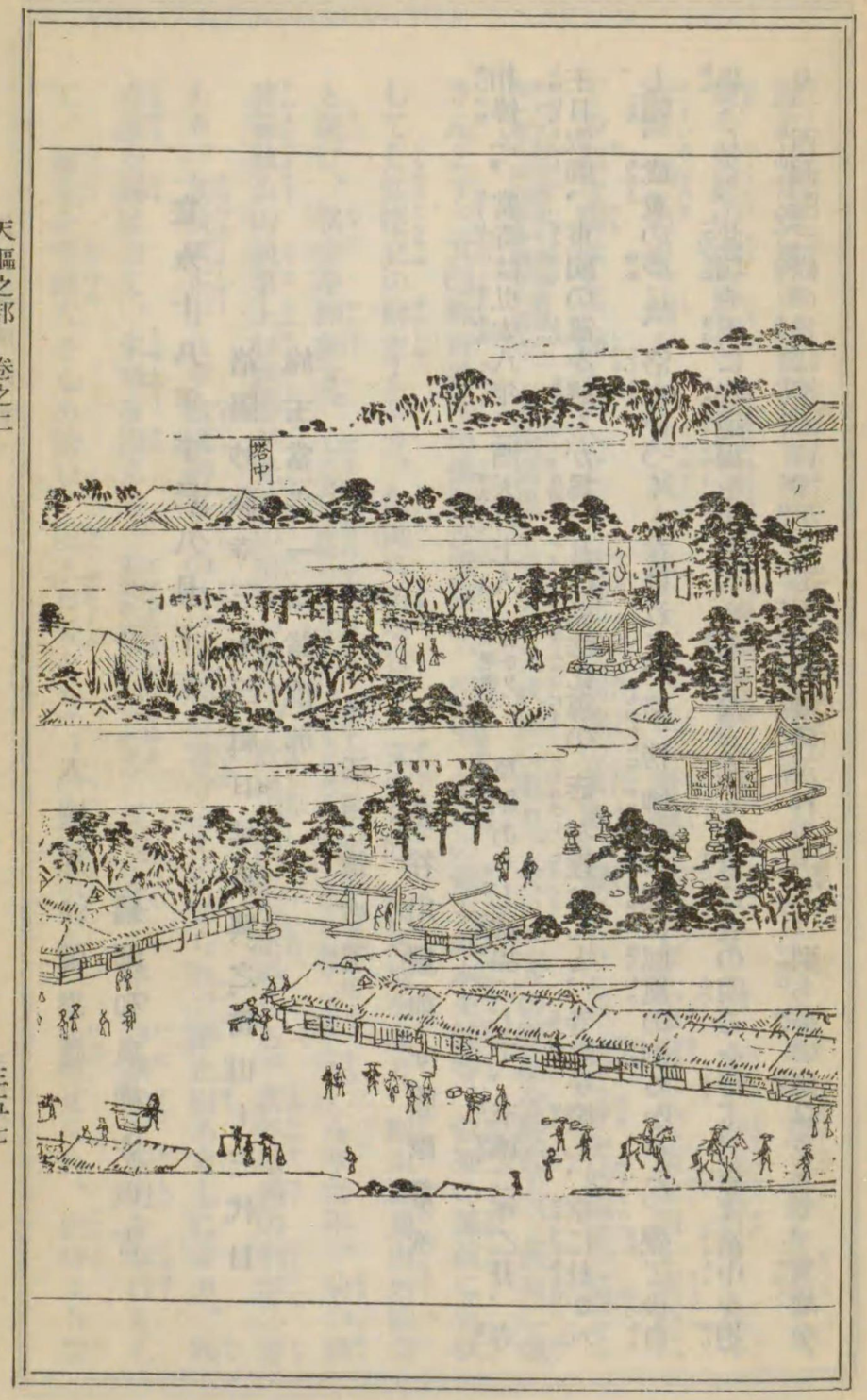
倩以。聖衆之影向。宛如華散風。結緣之得脫。亦似日傾西。一聽鐘聲。召請三寶。六道衆生。發菩提心。鑄一口鐘。祈三身之果。善根廣無限。功德遍有幾。

大日本國武州荏原郡品川鄕妙國寺住持。法印日叡。

文安三年丙寅季冬中旬第三天。

天妙國寺





寛永十八年辛巳八月下旬

洛陽妙滿寺三十三祖。日延再興之。當山十三代目

施主當寺一結諸檀那

大檀那沙彌道胤

鑄師和泉權守貞吉

江戸住冶工

長谷川豐前守藤原重次

相傳ふ、當寺は弘安八年乙酉天目上人（中老僧の一員なり。）草創ありし佛場にして、至德二年乙丑、寺主日叡師、東國の亂を避んが爲、且は弘法化導の志を達せんと、寺院を廢し、京に赴かれし頃、或夜の夢に、洛中いづくとなけれど、路傍柳の大樹に鳳凰の栖るをみる。覺て後自思へらく、此瑞や正に我道場を開くべき前兆ならんと。直に夜の明るを待て、急ぎ洛中を廻り、西洞院三條の邊に至るに、果して大樹の柳の茂れるあり。則ち夢の應なりとて、其地を闢き一宇を營み、鳳凰山青柳寺と號し、日蓮大士より天目上人へ附屬の大曼荼羅を安置し、廣く妙經の法を弘む。（其舊跡は花洛西洞院三條の南にあり。今都七名井の中、柳の水といふは則ち其舊跡なり。）嘉慶元年丁卯、天下疫疾流行す。後小松帝詔あり、師をして此災を除かしむ。依て奇驗の料として、康應元年、南北四丁東西二丁の地を賜はる。然といへども、其寺院は明德の大亂に廢せらる。故に寺を妙滿寺に攝す。（かの大曼陀羅竝に運師親筆の一部一卷の妙經等妙滿寺に寄す。）其後舊里を慕ひ、又武州に至り、天目上人の靈蹟を興起し、舊貫に復さんとす。其頃熊野鈴木の後孫沙彌道印、（鐘銘道胤に作る。）品川の領主鈴木光純等、叡師の誦演に信伏して七堂建立の財主となり、叡師に力を合せ、文安年間、彼舊地を象り、則ち鳳凰山妙國寺と號け、當寺を開創す。（此文安永享の年號前後せり。永享六年、既に妙國寺へ地境寄附ありしよしの上杉憲泰の證狀ありて、文安に先立つ事、凡十有餘年。不審とす。）永享六年、前の將軍義教公の執事上杉憲泰、先境の由緒を擧げ、此地の四至を定めらる。其外數通の判形の書あり。其後天正十八年當國御打入の時、大神君當寺に入らせられ、御止宿ありしにより、後寺領を賜はりて、朱章を添らる。（江戸寺社領を附し給ふ朱章の始なりといへり。）又寛永十一年、伊奈半左衛門を奉行として、諸堂を營建なさしめ給ひ、院主日延をして、中興開山たるべき旨命ぜられ、此時より紫

衣を免さる。以て永規とす。

上杉憲泰　宛行武州荏原郡南品川之端芝原地之事

右依佛地之所望。永代八郎三郎に所補任也。仍四至境。東南は大道堺。西は田堺。北荒居道を陽堀堺。以之竹木可調植者也。仍宛狀如件。

永享六年甲丑五月十三日　　憲泰　在判

妙國寺別當御坊

上杉憲泰　寄進武州荏原郡南品川妙國寺地之事

右彼地。(此間七八字不分明)南者四波堀堺。西者大々道堺。北者塔中堺。彼内畠同勢阿彌作畠一段。竝四郎之寄進地之事、寺家之内在之。此外常金可作畠一段。同東者海堺。南者觀音堂垣堺。西者大々道堺。北者大堀堺。爲金澤智光院殿御菩提。竝爲南小路雲光御菩提。永代彼寺令寄進處也。然間。至子々孫々。於此寄進所者。不可有異儀。仍寄

附之狀如件。

永享十年戊午七月十八日　　憲泰　在判

足利持氏將軍

武藏國荏原郡南品川妙國寺可爲祈願所之狀如件

享德二年五月八日　　從四位下　在判

當寺別當

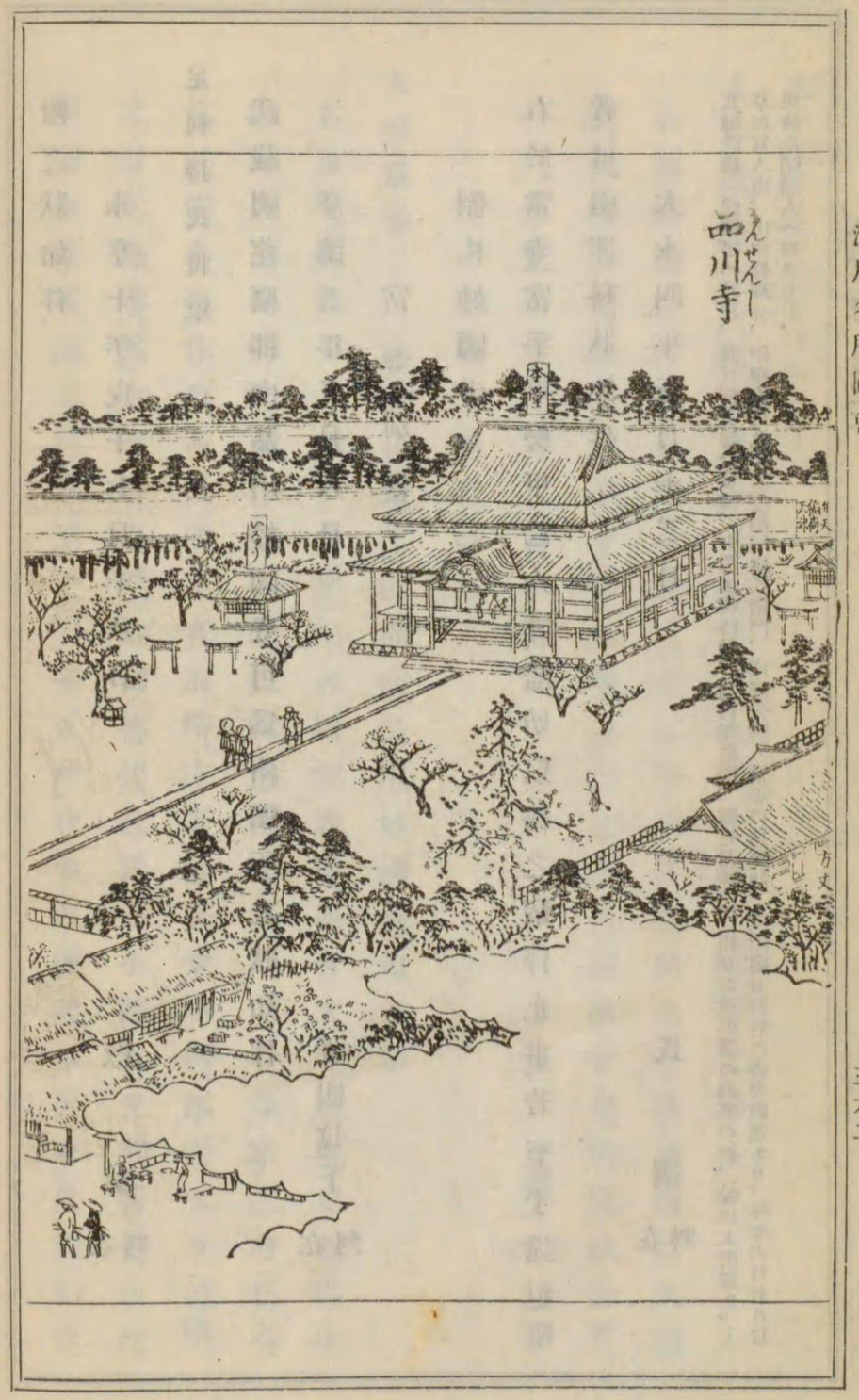
制札妙國寺

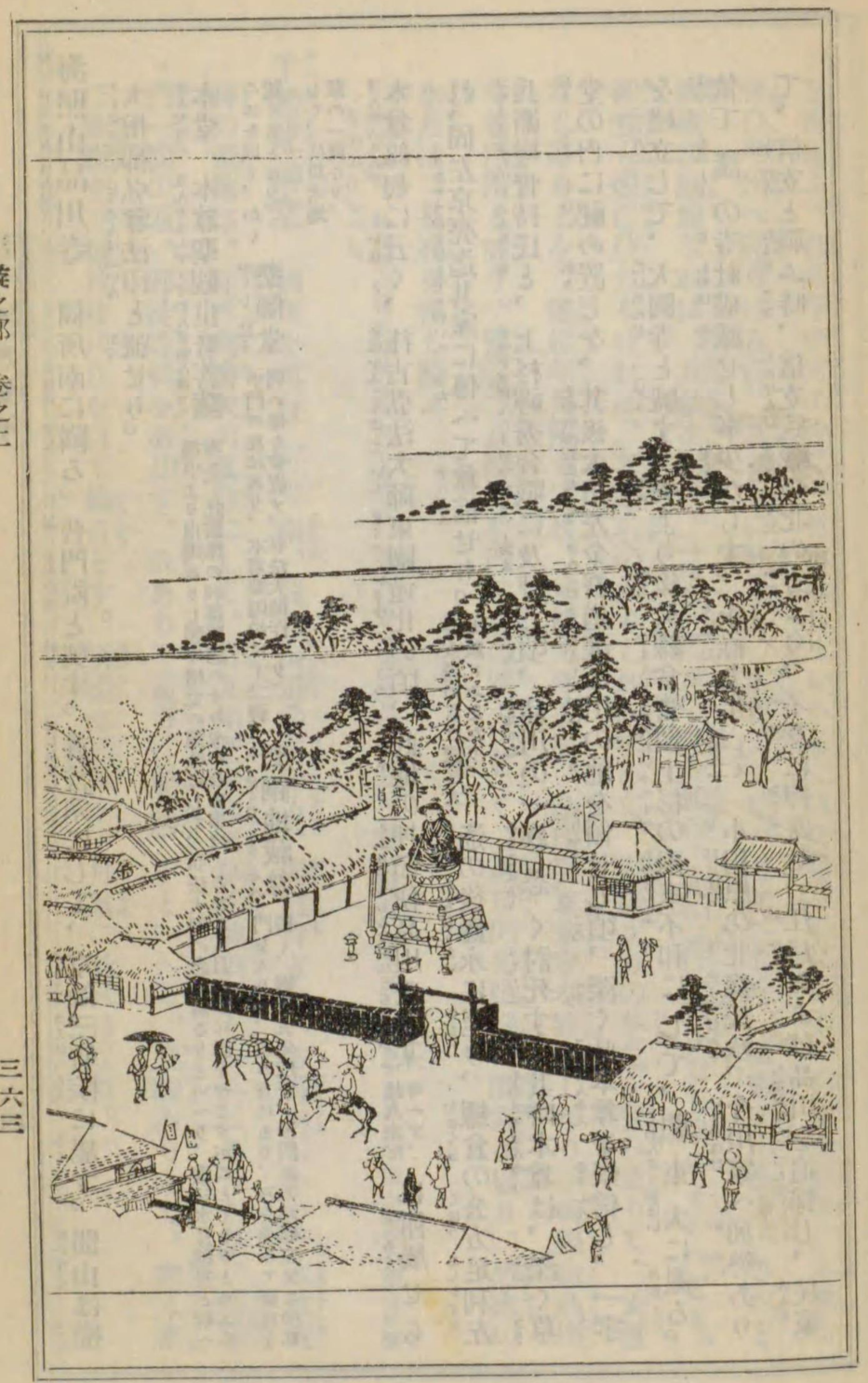
右於當寺。當手軍勢甲乙人等。濫妨狼籍之輩停止事。若至于違犯輩者。可處罪科狀如件。

大永四年正月十二日　　氏綱　在判

其餘氏康、氏昭等の證狀、及び前上總介定景、中務少輔持助、閻善左衛門、彈正左衛門、植草新次郎等の判形の書、竝に太田資正、大草加賀入道、山中修理亮、伊東右馬允、石卷勘解由左衛門、南條飛驒入道等の連判狀、遠山總景判形の書等數通あり。毎年六月廿八日虫拂の頃諸人一拜さしむ。

品川寺





海照山品川寺　同所南に隣る。普門院と號す。眞言宗にして、京師三寶院に屬す。開山は權大僧都弘尊法印と號せり。

本堂　本尊聖觀世音菩薩　海中より出現ありし閻浮檀金の靈像にして、弘法大師の念持佛なりといへり。世に水月觀音と稱へ奉る。此靈像の利益感應のすみやかなる事は、あたかも月の水に影をやどすがごとくなりといふこころを以て、かく號くるとなり。藥師堂　中門の左にあり。本尊藥師並に十二神將の像を安置す。弘法大師作なり。紫銅地藏尊　門を入りて、左の方にあり。石を疊みて臺座を設く。寶永五年戊子、沙門正元坊建立する所にして、江戸六地藏の一員なり。

本尊緣起に云く、往古弘法大師東國遊化の頃、此地の押領使品川氏何某　此人未だ考へず。に附屬せられ、同左京亮迄其家に傳へて尊信せり。左京亮の名は鎌倉大草紙にみえたり。遙の後應永に至り、鎌倉の公方足利左兵衛權督持氏と、上杉禪秀合戰に及びし頃、品川の一族悉く討死す。其時本尊は、深く草堂の內に祕め置しを、其後太田左金吾道灌品川の地を領せし頃、深く此本尊を崇信し、一宇を建立して、大圓寺と號す。夫より後又鎌倉管領上杉の兩家不和にして、關東大に亂る。依て諸〳〵の寺社破滅せし事少からず。永祿九年　十二　小田原の北條氏政、今川家へ加勢ありて、信玄と戰ふ時、信玄武藏の北の方より、不意に押寄せ、江戸および品川を追捕し、民家を燒拂ふ。此時甲州方の中に、竹森蔭村といへる二人の侍、品川觀音の御堂を燒て、本尊を奪ひ甲州へ歸りけるに、其者大に狂亂し、本尊元の地へ遷すべき旨、威靈の示あり。されど武藏は敵地なれば、其便を得ず。一人の乞食の聖を賴み、元の地に遷座なし奉るといへども、御堂も燒亡びたりければ、其礎石の殘りし地を求めて、形ばかりの草堂を營み造りて、安置なし奉りしを、遙に年月隔りて後、承應元年壬辰、法印弘尊堂宇を建立し奉り、海照山品川寺普門院と號す。爾來此降、普門示現の威力著く、惠日の光煩惱の闇霧を破り、感應の水月は、長夜を照し給ふ。

按ずるに、妙國寺什寶に存する所の、永享十一年上杉憲秦寺境寄附の證文に、南は觀音堂坂を界とするとあるは、則ち當寺の觀音の事を云ふなるべし。

千體荒神堂　同所半町ばかり南、同じ海道の右の方、海雲寺といへる禪林にあり。本尊荒神の靈像は、昆首羯磨天の眞作にして、昔九州肥後國天草荒神の原といふにありしを、邪宗門一揆の頃、邪徒等社を破却す、故ありて當寺に勸請すといへり。靈驗ありとて、衆人常に參詣す。毎月廿八日を以て緣日とす。祭禮は三月十一月共に廿八日なり。

千躰荒神堂

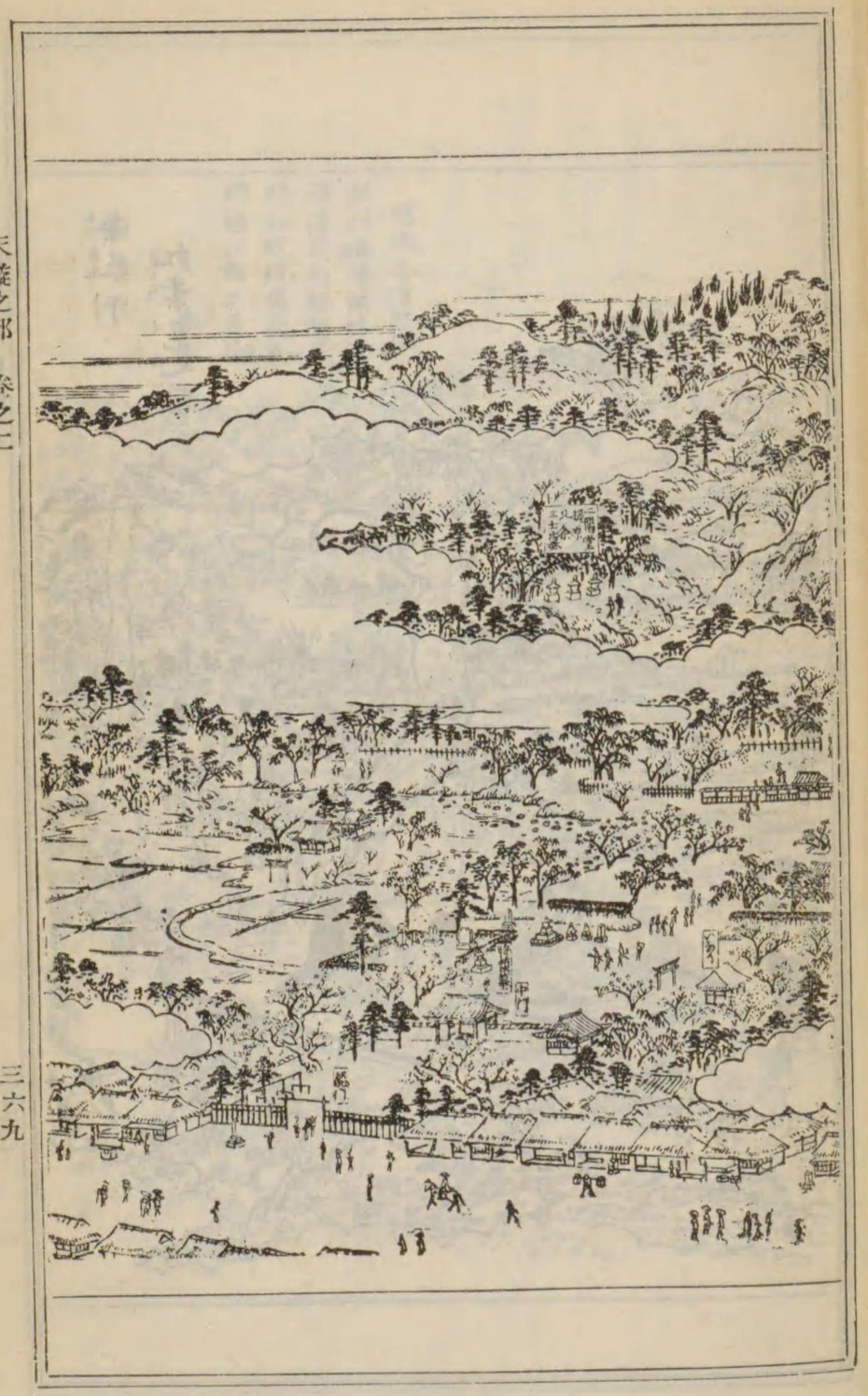
補陀山海晏寺　同所一町ばかり南、海道の右にあり。曹洞派の禪宗にして、三田の功運寺に屬す。北條相模守平時賴朝臣の開基として、大覺禪師を開山と稱し、古山和尚を第二世とす。天叟慶存和尚、慶長元年丙辰、當寺を再興して、中興となる。慶存和尚は松平因幡守康元の子なり。天正御入國の頃、三州より召され、當寺を賜ふ。舊へは臨濟宗なりしを、此時より今の如く洞家に改められしとなり。

本堂本尊鮫頭觀世音

鐘樓　本堂の前左の方にあり。元祿十五年當寺回祿の災に罹り、舊鐘燒損す。依て寶永七年改鑄して、往古の銘を其儘に刻せり。

南膽部州大日本國關東道武藏州荏原郡品川鄕補陀山海晏禪寺。
爰十方施主。屢捨祥財。聚銅金。專命良工。鑄成佛器。高掛層樓。美哉。堂
堂大器。落々洪音。斯廼見色明心。聞聲悟道之因。是故鳴鐘相念偈。願
此鐘聲。超法界鋏圍。幽暗悉皆聞。問塵清淨證圓通。一切衆生成正覺。
是以虎溪老拙厥銘曰。
島氏爐禪　四海九根　當陽掛起　法音千鈎

ひろう！
海晏寺



海晏寺
紅葉見之圖

題海晏寺紅樹
古刹楓林簇晚霞
深深延防駐年華
那知秋後風霜色
却勝江南二月花
春臺

聲透碧落　響徹刹塵　驚破睡夢　忽性眞
弘濟群類　普結良臣　法輪常轉　佛日倘新

寶德三辛未仲夏下澣　鑄師定吉

且越　道琳　現住　存紹代

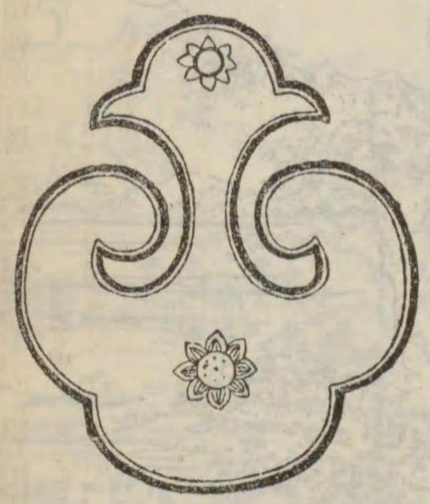
再銘

寶永七中夏上旬

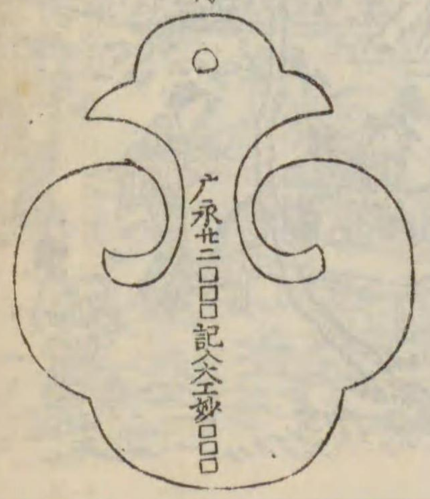
雲版一口

高サ一尺四寸八分
横一尺三寸三分　面

蓮花大サ
二寸四分



背



北條相模守時賴朝臣石塔　本堂の前右の方にあり。碑面に最明寺殿覺了房道崇、碑陰に弘長三癸亥十一月廿二日、正五位下行相模守平元帥時賴と彫付てあり。

按ずるに東鑑に、弘長三年十一月二十二日、(松岡過去帳十一月廿一日とす)、戌刻、入道正五位下行相模守平朝臣時賴三十七、最明寺の北亭にて卒去すとあり。今鎌倉山内にある所の禪興寺といへる寺院は、往古最明寺の舊地なる由、鎌倉志に見えたり。當寺にある所の石塔は、其うつしならん。石碑の形後世のものとおぼし。

二階堂出羽守石塔　本堂の後の山腹にあり。往古より、當寺の門前は鎌倉海道にして、關門ありし地なりと。條家迄は、執權の中より、關門の守護として大森の邊に屋形を建て官人を置かれしなり。依て賴朝卿より北故に此出羽守も、其頃品川の守護として、此地にありしなれば、當寺を香花院とはせしならんか。

按ずるに二階堂出羽守三人迄あり。一は左衛門尉正五位下出羽守行義入道道空と號す。文永五年閏正月二十五日歳六十六にして卒す。二は同從五位上出羽守行藤、正安三年八月出家して道曉と號す。乾元元年八月二十七日卒す。歳五十七。三は同從五位下出羽守入道道蘊、吉野城攻の大將なり。以上二階堂出羽守三人ありて、何れか是なる事をしらず。然るに、惣門の額に海晏寺と書せしを、寺僧相傳へて、二階堂出羽守行氏の筆なりといふ。されど行氏は、從五位下隱岐守に任じ、弘長三年十　月出家して洪名道智と號す、文永八年六月七日五十一歳にして卒せし人なり。

梶原平三景時石塔　同所に竝ぶ。景時謀叛を企て、正治二年庚申正月廿日上洛せんとせし途中、駿河國清見が關に於て、近隣の甲乙人等と一戰し、竟に景時討死するよし、東鑑にみえたり。是もうつしたるものならん歟。

北條左京權大夫平時宗石塔　同所にならび建たり。文永元年より時宗執權賢光寺と號す。三十四歳。鎌倉志に賢光寺殿道果大禪定門と號す。(將軍執權次第に弘安七年甲申、正五位下相模守平時宗、三月廿八日所勞、四月四日出家法名道果、同日酉時死三十四云々)

楓樹　江戸丹楓の名勝にして一奇觀たり。晩秋の頃は、滿庭錦繡を晒すが如く、海越の山々は、紅の葉分に見え渡り、蒼海夕日に映じては、又紅を濯ふが如く、書院僧房も其色にかど

やき、此地遊賞の人醉色ならざるはなし。江戸砂子に、蛇腹紅葉、千貫紅葉、花紅葉、淺黄紅葉、菲梅紅葉、猩々紅葉、など云ふありと云々。

千貫牡丹　佛殿の前にあり。四方八間に榮えたり。又八幡影向の牡丹とも號くるとぞ。　千貫松　賴朝松とも、又は龍燈松とも號くるといふ。今は枯てなし。　龍淵　庭前の池をいふか。蛇の淵も此事か。　兩溪橋　御手洗に架す。橋下の池を蛇の淵といふ。建久の昔、近里の女身を投て蛇身に變ず。二世古山和尚、教化して畜身を解脫せしむといふ。　蓬萊山　方丈の庭の山を云ふ、北の方に昔は蓬來亭と云ふありしとなり。

梶原屋敷　梶原塚の南に當る。　石地藏　弘法大師の作。

權現御手洗池　延命水　明神森

山王社　八幡宮

寺記に云く、後深草帝の御宇、建長三年辛亥五月七日、此地の海中より鮫一口漁夫の網にかゝりて揚れり。腹中より正觀音の靈像を得たり。此事鎌倉へ聞えしかば、時賴朝臣希代の事とし、是祥瑞なるべしとて、其邊に佛閣を闢かれ、觀音の淨土なればとて、補陀山と號し、四海安平の義によりて、海晏寺とせらる。瑞林瑞應廣正東悅等の四院をも、造營あり。同六年の春、諸堂落成し、翌る七年入佛供養を修行す。

海晏寺

總門額

二階堂出羽守

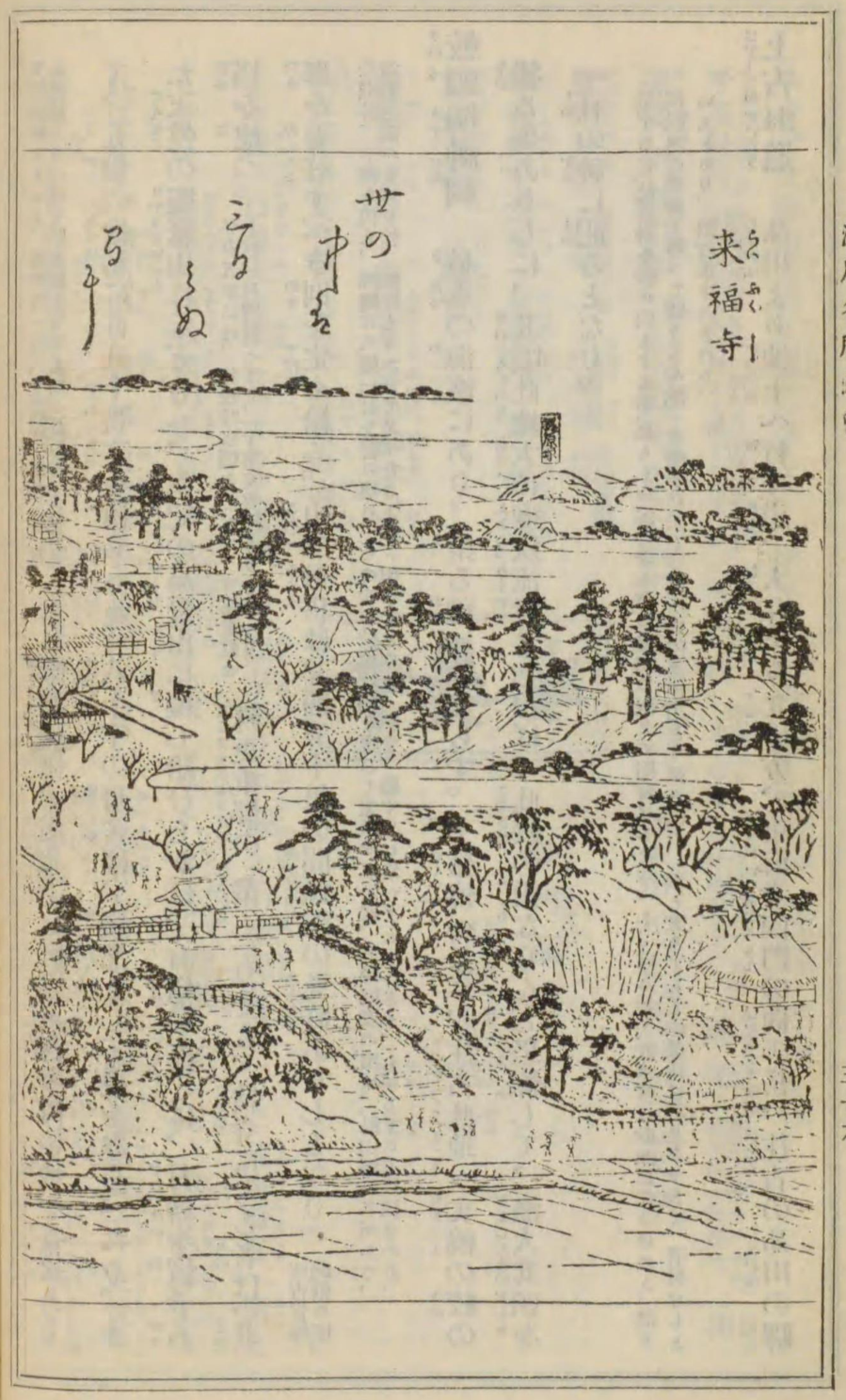
行氏筆

又鮫頭崎ともいふ。海の方へ百八十間餘、南北へ八町の洲崎なり。依て鮫洲崎といひし由、江戸砂子にみゆ。　また時賴朝臣、南北十二町、東西十町の地を寄捨ありて、五箇の僧坊に百八十貫文を附せらる。八十宇の房舍は、巍然として甍をならべたり。また天竺の靈鷲山になぞらへ、南紀の高野山に擬し給ひしかば、有信の輩は、月牌を置き石塔を建つ。弘安五年には、北條時宗願主として、堂塔重修せられ、月牌料として二十貫文寄附ありしとなり。　殊更重罪の輩たりとも、當寺に入る者は、其罪を免許すべき則を定め給ふ。山庫僧供は、四方十里の間頭陀の免許ありしとなり。往古當時開創の頃、松槻各二千株を植る、洲崎に八幡三社を營み建る。その松の枝葉行路を覆ひて繁茂せしかば、其頃鄕童の唄に、「品川浦は名所かな、海晏寺前のまがり松、御代もさかえてめでたさよ」、と謳ひしとなり。鄙言、擧ぐるに堪へずといへども、しばらくこゝに注すのみ。

鮫頭明神祠　砂水の海濱にあり。祭る神詳ならず。土俗傳へ云ふ、往古此地へ丈餘の鮫の揚る事ありしに、其頃此地大に疫疾流行せしかば、此鮫の祟ならんと恐怖して、漁人其頭を一社の神に祀るとなり。

按ずるに、此祭神を鮫の頭とする事、恐らくは海晏寺本尊の緣起に混じて附會せしなるべし。或人云く、砂水昔は砂洲に作りけると。然らば鮫洲の明神と稱へて佳ならん歟。或冊子に云く、此所に佐美津川とて細き流の、潮と交ちずして佐美津ばかりなりとて、名付けしといふとあり。猶訂正すべきのみ。

上古海道　品川より池上へ行く道、大井より北の方、東海寺南門の向の岱、往古の品川の驛


来福寺

雪中庵
蓼太

西光寺

路なり。土人今も元品川といふ。其道筋大井、荒蘭、池上、矢口とつゞきしなり。今も、八景坂より西南池上へ行く道に、昔の一里塚の榎一株殘れり。又其邊の藪中に、標の石今も存せりとなり。延喜式、大井驛傳馬の事證とすべし。

延喜式曰

諸國驛傳馬　中略　武藏國驛馬　店屋　小高　大井　豐島

各十疋　下略

海賞山來福寺

砂水御林町にあり。眞言宗にして、本尊に地藏菩薩を安置す。弘法大師の作

御丈九寸八分

なり。梶原氏の草創にて、則ち此地は其宅地なりしとなり。緣起に云ふ、此本尊は梶原氏代々其家に相傳へて尤も靈威なり。然に元亨の頃、智辨と云ふ沙門眼疾を患ひ、此本尊に祈念して、不日に本快を得たり。其後世の中大に亂る。爾に本尊の所在しれざりしに、文龜年間、梅巖阿闍梨、當寺より四五町西の方經塚といへる地にして、これを感得せしとなり。經塚の來由は、次に詳なり。

按ずるに當時開基、梶原氏と稱するものは、小田原北條家の幕下たりし梶原日向守なるべし。永祿二年の頃、六鶴内新井宿の地を領せし事、北條家所領役帳に見えたり。其によりて考ふるに、此所は日向守の采邑の地にして、又其宅も此所にありしと思はれたり。土民相傳へて、其宅の舊跡は、來福寺あるひは砂水松平土佐侯の別莊の地なりともいへり。

延命櫻　本堂の左の方の庭前にあり。

梶原松　同所にあり。梶原氏てづから栽ゑるとなり。

梶原塚　寺の後畑の中にあり。塚上に杉を植ゑたり。此邊農民の構の中にも、梶原塚と號するものあり。是も其氏族の墓所なるべし。其餘一族の石塔當寺にあり。

當寺境内櫻樹數株ありて、悉く品を頒てり。彌生の花盛には、遠近薫を慕ひて、こゝに遊賞する人少からず。

納經塚　來福寺より六町ばかり西にあり。相傳ふ、往古右大將頼朝卿佛經を書寫なし給ひ、此地に收めらるゝといへり。來福寺本尊地藏菩薩、此所より出現し給ひし頃、土中にして夜な夜な讀經し給ひしとぞ。故に來福寺本尊を、世に經讀地藏尊と稱せり。

松榮山西光寺

同所二町ばかり南にあり。弘安九年の開創なりといへり。往古は天台宗にして、榮順律師開山たりしといへり。其後親鸞上人弘法の道場とす。當寺十五世を空善と號す。芳賀入道禪可より十四世、芳賀伯耆守從五位上淸原眞人元則の長子にして、俗稱は武藏五郎西光、又幼名を伯王丸と呼べり。今當寺を西光寺と號するは、此西光の名を摘りて號けたりしなるべし。寺寶に武田信玄の陣羽織と稱するものを收む。庭前醍醐櫻と名くる老樹あり。

弘福寺

花は單瓣にして、立春より七十日目の頃より開きはじむ。其餘ひとへの櫻の老樹數株ありて、滿花の節は奇觀たり。此地第一の花の名所なり。

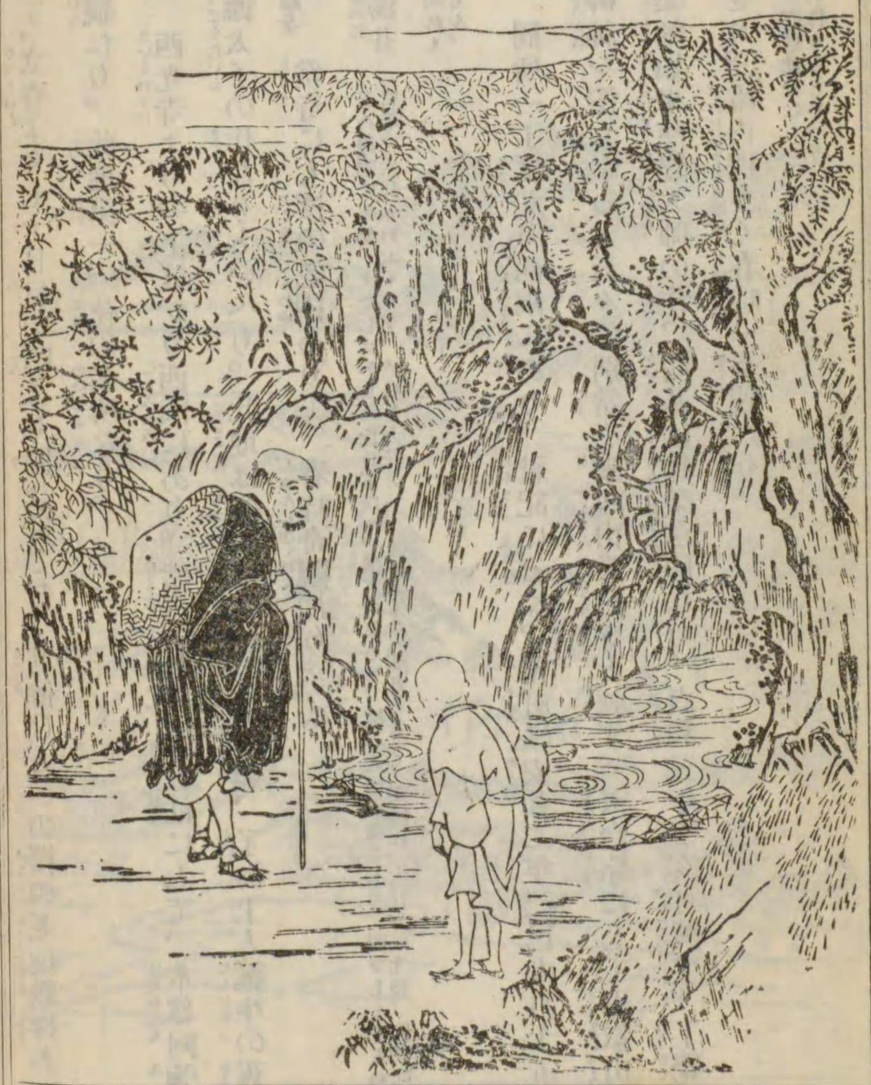
大井山弘福寺　西光寺より一丁ばかり西南にあり。當寺も鸞師の弘法にして、本尊阿彌陀如來の像は、聖德太子の作なりといへり。此地は麻布山善福寺の中興、了海上人誕生の舊跡なり。（第三卷麻布善福寺の下に詳なり。）當寺にも櫻の老樹ありて、春時奇觀たり。

了海上人產生湯井　寺の後園にあり。すこしばかりの丘の下にて、横穴の泉なり。横へ入る事深くして、測りしらずといふ。又當寺に大井といふもあり、但名を大井といふも此井より起るとなり。東鑑に、大井太郎光長、同次郎實春、同三郎等の名あり。何れも此地より出たる人ならん。

鹿島大明神社　同所一丁ばかり西南にあり。社記に云く、當社は安和二年己巳九月十九日、常陸國鹿島の御神を遷し奉ると云々。別當を爾現山常林寺と號す。天台宗にして東叡山に屬せり。本尊は藥師如來慈覺大師の作、開基は尊榮法印なり。貞和三年丁亥再興す。了覺阿闍梨を中興と稱せり。境内櫻多く春時一奇觀たり。

本地堂　本尊は十一面觀世音にして、智證大師の作なりといへり。

大井



古鰐口（こわにぐち）別當常林寺に收む。松女敬白とある上の文字よむべからず。按ずるに福と云ふ文字を、鐫り損じたるものならん歟。其銘左の如し。

奉寄進武州荏原郡大井鄕鹿島宮鰐口

寛正二年癸未十一月日　稿松女敬白

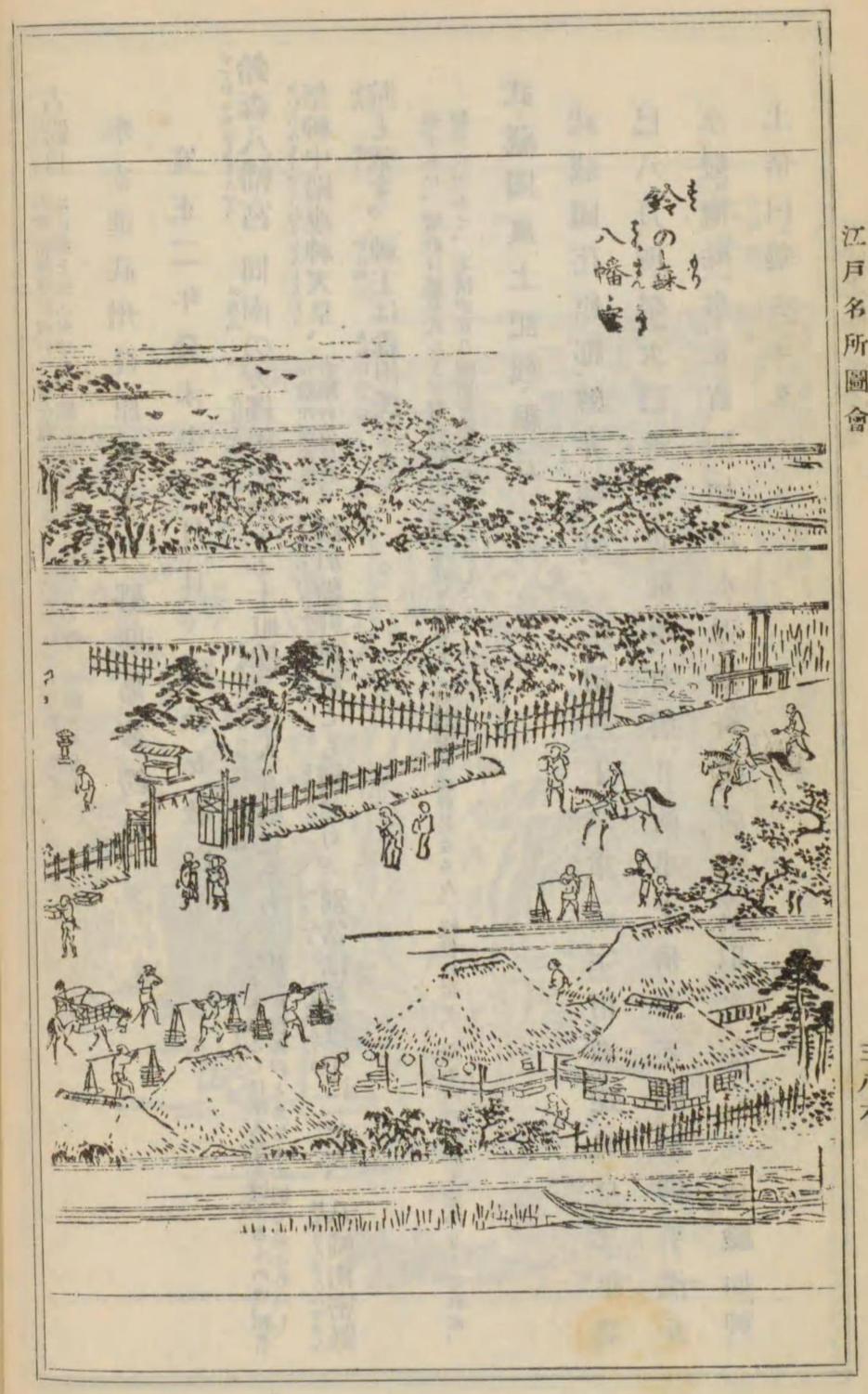
鈴森八幡宮（すずがもりはちまんぐう）同南の方繩手（なはて）を隔てゝ十町餘、不入斗村（いりやまず）にあり。按ずるにこゝに不入斗と號するものは、和名抄に所謂餘戸とあるもの則ち是なるべし。

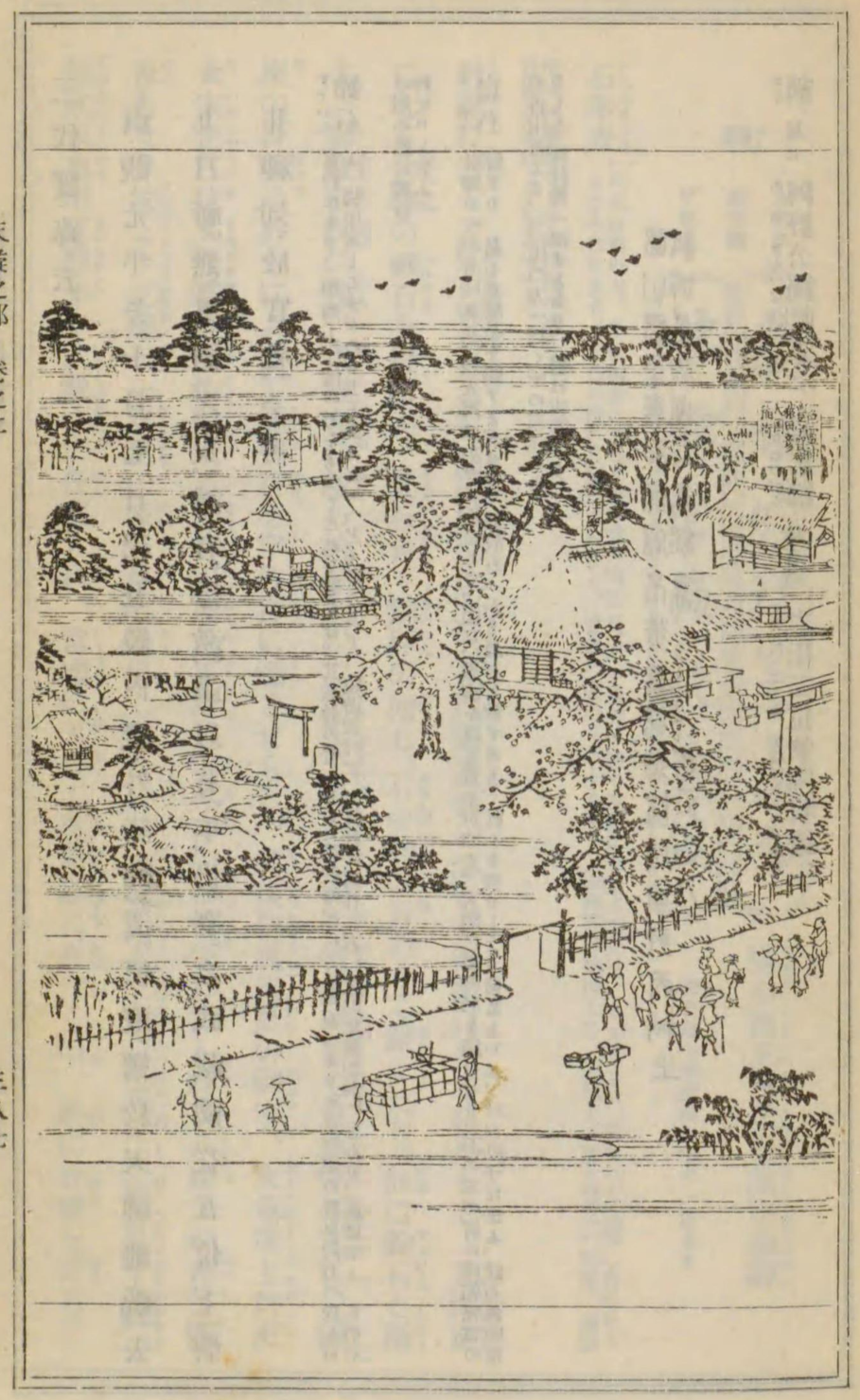
祭神中殿應神天皇、左殿仲哀天皇、右殿神功皇后、總社盤井神社とも稱せり。別當は眞言宗にして、八幡山密嚴院と號す。神主は森田氏なり。

按ずるに、當社は延喜式および當國風土記殘編等にも載せて、所謂磐井神社是ならん。後世に至り、祭る所の御神も定かならざれば、磐井に因みて、石清水正八幡宮を勸請せしなるべし。

武藏國風土記殘編云

武藏國荏原郡。盤井神社。　圭田三十六束二字田。敏達天皇二年癸巳八月。所祭大己貴命也。社邊有磐井。祈事土俗有妄願。則御手洗井水。變鹽味。事正直。則如清水。近國奇之。祈病者。取之服之。其功驗如神。土俗曰藥水云々


鈴の森
八幡宮



三代實錄云

貞觀元年冬十月七日己丑。畿內畿外諸國。遣使班幣於天神地祇。去九月祈無風雨之災。誠有感激。歲以有年。仍賚之。武藏國從五位下磐井神列於官社。云云

鈴石　當社にあり。相傳ふ、他の石をもつてこれを擊てば、其石鈴の音ありと。當社傳記に、此靈石によりてこの地の名を鈴石の森といふ。後中略してすゞのもりと云ふといへども詳ならず。遠遊記行に、「此社に舊有一石。之則其聲如鈴」とあり。或は云ふ、昔の石は賊の爲に奪はれたりと云ふ。

烏石　社地の左の方にあり。四五尺ばかりの石にして、面に、黑漆を以て畫くが如く、天然に烏の形を顯はせり。石の左の肩に南郭先生の銘あり。烏石暮辰是を鐫すと記せり。暮辰みづから烏石と號するも、此石を愛せしより發るといふ。江戸似子に云ふ、此石舊麻布の古川町より、三田の方へ行く所の三辻にありしを、後此地へ遷すとあり。書は古篆なり。

匯日匯星昌石亦鮮系黃雞昌齋陳卯劍夷雨祠土
綱城是視鼠左畜鍋系　昌石山八劍夷雨祠土

額　烏石　阿野公繩卿筆

烏居額　烏石祠　吉田二位兼隆卿筆

聯　左右の柱に掲げたり

龍蛟的珠笠島雨
僊蹤蒼海於森風

梅小路正三位參議定福卿

御自詠七首獻備の中の一首なり

石華表　六七町東の方、今は海面となれり。中昔の頃迄は、石の鳥居の柱のみ纔に水面に顯れ出でてありしが、寶永の大地震に折れたりとて今は見えず。上古は件の鳥居のあたりも、當社の境內なりしとなり。後溯波に缺損して、元龜より萬治寛文の頃迄、海道度々に付替り、今は社地の中を往還の道路とするといへり。

社記に曰く、往古神功皇后三韓御征伐の時、長門國豐浦の津より御船にめされんとし、其海邊にして含珠の神石を得給ふ。其石青く雞卵の如し。石中鈴の音ありて鏘々たり。故に鈴石と稱す。異賊征伐の後、香椎宮に藏め給ひしが、欽明天皇の御宇、八幡大神始て筑前宇佐宮に、鎭座の日靈示あるによりて此寶石を宇佐宮に遷させらる。其後聖武天皇の御宇、文章博士御史太夫正二位文部卿神祇伯勳十二等石川朝臣年足、宇佐宮の奉幣使たりし時、八幡大神再び靈告あり、依之此靈石を年足の家に移し崇信しけるに、嫡孫中宮太夫從四位中納言豐人卿、桓武天皇の延曆年中武藏守に任ぜられ、當國に下向し荏原郡に在せし頃、終に此地を封じて